

ならしをしてゆくのかといふと、必ずしもさうでない。

私は近著『ゴルフバッグ』の中にゴルフ道の大乗と小乗の別につき記してある。小乗とは洗面所で顔を洗つたあとは栓を抜いて水を流すことである。バンカーでクボめた靴あとは地ならしする事である。しかしさらに大乗とは洗面所で他人が捨てつばなしにした溜り水の洗面器を見ると、一擧手の勞である、その栓をも抜くのである。バンカーでいふなら他人の残した靴跡をも序でに地均しする事である。なんでもない。

二 井上信と榎哲

此の間程ヶ谷クラブの大森會トーナメントの夜の宴席上で、程ヶ谷の上世史時代の名譽書記井上信君の話であつたさうな、それはとなりのコースで煙草の吸がらをフェアウェイへ捨てた人を見て、井上君はわざわざそのとなりのコースまでかけつけ、

「どうか吸がらをすてるのはよして下さい。汚なくもなる。又はなれてはボールと見まちがへる事が多い。注意して下さい。」

と一本キメつけたさうな。一本氣な熱情な井上君としてありさうな事だが、その巻煙草をすてた人は、ムクレたままウンとふくれづらをしてわたさうな。誰しもカスをくはされるとあまりいい氣持はしない事になつてゐる。

それから後日の話である。同じ程ヶ谷の或るコースで或るプレイヤーがフェアウェイをパスする時に、道々に落ちてある巻煙草、煙草の包み紙、ボールのつつみ紙などを、眼につくまま拾つてはポケットへ入れてゆくではないか。これを見て感激にあふれた井上君は又そこへかけつけ、

「どうも有りがたう、あなたのやうな氣分でプレイしていただいたら、程ヶ谷のクラブはほんたうにきれいになり又なごやかになります、有りがたう、有りがたう。」

と感謝の詞を連發したが、その紙屑拾ひは、まさしく此の前に井上君からカスを一本喰つた同じ人であつた。その時の彼氏の返事は、

「イヤ君から注意された時は癪にも障つたが、考へて見ると尤も千萬な事だから、今後自分は注意する、他人の分もと思つて、あれから他人の分も拾ふ事にしてゐる。」

といふのであつた。彼氏とは鹽水港製糖會社社長、姓は榎、名は哲君の事であつたといふ。いかにも榎君その人の性格がありありと見える、いかにも榎君らしい。この榎君のヤリ口がまさしく僕のいふ大乗なのである。

三 ゴルフの賞品

そこでかうした序でにゴルフファースの少數者の氣分を御披露して見たい。それはゴルフのプライズの事である。

英米の事例に徴しても日本ではたしかにプライズが多すぎる。それはまだ好いとしてプライズに使ふ金が相當にかさ張つてゐる。これは確かに考へものと思ふ。然しそれは暫くおいて、私のここに一言したい事は別にある。

私が朝日新聞社に在社中、屢々多くのクラブから朝日賞の寄贈を申込まれた。尤も千萬な事である。更にいづれの新聞社のカップとの釣合上今少し大型な立派なのをとか、或はデユブリカがどうかうのと、さうした附けたり註文も聞かぬではなかつた。それも無理からぬ事と思ふ。更に又私個人としてもオフィシャルの外にいろいろなプライベート・トーナメントに賞品の寄贈を申し込まれる事になつてゐる。東西に股をかけてゐる僕は、殆んど毎月一回二回と賞品をおくる事になつてゐる。近頃はカップをやめて他の持ち合せの品、さらにゴルフの歌を揮毫せるもの(せめても表装して箱入りにはしてあります)さらに『拙著ゴルフバック』などの書冊をあてる事にしてあるが、私はとにかく人様から賞品を贈つてくれといはれてゐる間は人間の花である、それでよい、ありがたい事と思つてゐる。

四 授賞のレスポンス

只問題となるのはいや僕の氣になるのはそのレスポンスである。反響である。ひどいものになるとオフィシャルの朝日賞などに對しても受けた本人は勿論、そのクラブからも一言の挨拶さへ無

かつたためしが少くない。プライズをうけた人に至りては尙の事である。僕の記憶では藤澤と武藏野と茨木で朝日賞をうけた當人からの禮狀を各一回よこしてくれた例はあつた。これはいづれも僕の知人であつたからでもあらう。さらに又僕のプライベートの寄贈賞に對し、僕がそのトーナメントに出席してない場合に、その會から、又うけた人から、報告なり禮狀をよこす例もないではないが、どうかといふと机龍之助式に音無しの構へになるのが少くない。成る程考へて見ると、いや考へて見なくとも、賞品はくださいといはないとくれない。栓を振らないと水の出ないと同じである。しかし貰つてしまへばあとは挨拶はしてもしなくともよろしい。顔を洗つたあとの栓をゆるめるゆるめない、水をはけるのはけないのも吾等の自由なりといふ論法と全然一致してゐる。しかし禮狀なり報告なりいづれにしても一錢五厘の端書一本ですむ事である。一言のあいさつ位は有る方がよろしい。別に挨拶をして貰ふ事をあてにして楽しみにして寄贈するわけでもないが、さいそくされて贈る。それで梨の礫になつてゐるなどは、けだし嬉しくない。

五 或る美術展覽會の海南賞

勿論さうした少しも惡氣はないが只不性な氣分は、獨りゴルフアースに止まつてゐるわけではない。序でだから書き添へるが、僕は或る藝術の會へ海南賞として金員を贈る事になつてゐる。別にその美術展の誰にも馴染があつたわけではない。只朝日に在社してゐる、社の同人から頼ま

れて餘儀なく僕のポケットから出してゐた所が、未だ嘗てその海南賞を受けた出品者から私が海南賞をうけたといふ挨拶に接した事が無い。藝術家などといふものはかうした飄逸なものかいは些かどうかなと思ふが、それもこれもおのれが朝日に在職してゐるからは、間接ながらにがしか社の爲めにもと思つて連年續けてゐた。此の春僕が朝日を退社すると、先方は朝日は退社しても海南賞は戴いて差支へがないといふ。僕はおのれの家計もお立直しをせねばならない。又その金はある社會事業費の方へ廻すつもりで斷つてゐたのが、どうした事か會計の方へ談じ込んで矢張り賞品代が御立替になつて贈られた。然し會から別にその海南賞が何の某に贈つたとも、又私が海南賞を受賞したとも、一言の挨拶の無い事だけは終始よく一貫されてゐる。今では此の會の幹部の人達で知人も出來たが、いづれも柄のよい人格者である、親しみ安い、なごやかな人達である、然し只不性なのである。うつかりしてゐるのである。恐らく僕がこんな事を筆にしたのを見たならば、とても氣にされる事かとも思ふ。……いや氣にしないかも知れぬが……かかる事例はあらゆる方面にザラにある事と思ふから、どうか吾等は少しは大乗の心持にもなる、といふと大ゲサなら、せめて感謝の喜びにも浸つてほしいと、かくは長々しく書いた次第である。

六 或るゴルフアーの手紙

此の度かかる事を筆にするに至りし動機は、この十一月に關西のあるゴルフトーナメントに、僕は近著『ゴルフ・バッグ』を贈つた。これは別に依頼があつたわけではないが、僕は最近身上異變ありてゴルフアースはじめ各方面の知己諸友から慰勞の會を催して貰つた。その時に少くもゴルフアースの諸君には感謝の微意を表すべく『ゴルフバッグ』を贈らうと思つた。しかしさうなるとキリがない。際限がない。つまり本屋で發刊しただけみな贈本となつてしまふ。そこで『これからの日本』といふ本を千有餘の知人におくつたのである。それだけにその申譯けの意味をもかねて僕の關係してゐるゴルフトーナメントには、せめて賞品のはしたに『ゴルフバッグ』をとばかり贈呈する事にしたのであつた。

ところがそのつまらぬ一冊の本をうけとつたといふので、それは僕の未知の人であるが、四枚つづきの禮狀をよこしてくれた。先づ包括的な禮狀から次に優勝したスコアから、ハンヂ等々精しい成績を、次に海外ではじめた以來のゴルフの履歷書、さうした事まで細々と書きとめての禮狀であつた。

いかにも珍らしい。僕としては此の手紙を手にして嬉しくおもつた。それがついこんな長々しい一文となつたのである。すまない。(『ゴルフ』二二、一月號)

勝尾寺の歌

茨木ゴルフ場より見あげて

森のあなた はろけき山の 一ところ

勝尾寺の壁の 薄白く光れり

勝尾寺の 築土が見ゆと いひたれど

「それがなんや」と 問ひかへす友は

西國の 札所といへど ああさよかと

聞きながしつつ 球さがし居り友は

勝尾寺が 見えても見えずとも かかはりなし

ただひたむきに 球打つ友は

勝尾寺より見さげて

ゴルフ場より いつもながめし 勝尾寺の

築土の上に われは立ちたり

眞木山の わづかひらけし はさまより

茨木の里の 家も見ゆ田も見ゆ

時雨すぎて 山のはさまに 遠々と

淡く見ゆるは 生駒の嶺か

オリムピック選手の歓迎と感激

十月の三日の午前十時から、日比谷の音楽堂に大日本體育協會が主催となり、今朝入京せるオリムピック選手一行の報告會を開いた。

放送で聞いてゐると拍手の音も相當に耳にしたであらうから、かなり入場者も多い事であらうと思はれようが、有りやうは壇上に列をなしてゐる歸朝選手の一行に、協會の職員たちをあはせた頭數と、聽衆席の頭數とはいづれも二百名足らずであつたとおもふ。前面の數列それも相當空席が残された。來聽者はあまりにも少なかつたのである。

僕はこの小數の見物はいづれも歸朝選手たちの家族・親友それへ熱心なファンが數へる程加はつてゐるのだらうなといふと、隣席の同人はいやこぼかりでない、東京驛のプラットホームだつて歓迎の熱は思ひの外低い、どうも近頃の日本人には感激性が無くなつてゐるのだねと答へた。いかさま選手一行が鹿島立ちの時にくらべたなら、たしかに歓迎の折の市民の熱は低かつた。

しかし何よりも當日の景氣の引き立たなかつた事は、例の颱風來の聲の爲めであつた。琉球の

南方にエンコしてゐた低氣壓がやうやうの事御神輿をあげる。今奄美大島の南方にこれから紀州半島をそれから關東へと、さうした前觸れがかなり物々しく傳へられる。それがいよいよ明三日には東京を襲ふはずだと、二日は深夜より未明へと警戒の放送がつづく、三日のひるすぎが頂上になるだらうといふから、かうなると誰しも屋外に出づる事さへ二の足を踏むに不思議がない。殊に日比谷の音楽堂は野天である。參會者の少なかつたのは當然すぎる。二時間近い報告の間も我等は壇上である。雨除の下になつてゐるからよいやうなもの、傘をさしたりつぼめたり又さしかけたり、降りしきる荒天の下に參會してくれた人々はよくよくの特志家である。これをしも感激性が鈍くなつたなど一口に片附けるのは、酷であると思ふ。

勿論近頃日本人の感激性は總括的に少し鈍くなつてゐるであらうと思ふ。外ではそれ伊エの戦争、ナチスのライン進出、スペインの内亂、近くは滿洲から北支から外蒙古方面へわたり、内には五・一五の前後から二、二六へかけ、あまりにも傷心なショックが頻發されづめである。神經も少しは麻痺するであらうといふと。いや近頃は神經は鈍いのを通り越し、飛んで亡くなつてゐるやうだといふ。

しかし神經は無い事は無い。連日新聞の社會欄には自殺種を缺かない。一方では結婚を許してくれないというて心中するのはまだよいとして、結婚を申込んで聞いてくれないとばかりに自殺する日本男子さへ少くない。まさしく神經は細くなりすぎてゐるなと思ふと、保険金をねらうて

自殺を強要され、それでは死にませうと、たうとう自殺した男の神経に至りては弱すぎるが、その自殺を強要した身内の連中などの心臓はかなり強い、神経は相當太すぎてゐる。いづれにしても太い細いの別はあつても、神経のある事だけはたしからしい。

しかし總じて神経の鈍くなつてゐる事だけは疑はれない。日本人が成都で殺された。又北海で殺された。それまではまだ我慢出来るとして、次いで漢口では我警官が殺された。上海では我水兵が殺された。さうした我等同胞の凶報に對し、日本民衆の興奮なるものは存外低い。もし日本の内地で在留の支那人を殺す。さらに支那の警官兵士を殺す。まあそんな事が想像されうるであらうか。支那の無秩序も呆れたものだが、我國民の公憤の存外低いにも小首をかしげざるを得ない。引きつづきての衝動にあてられて、神経が麻痺し鈍くなつたのか。まさかにはさう一口にも片附けられないやうな氣もする。

それからそれへといろいろ空想をはせながら、選手代表が相次いで報告を耳にしてゐる。雨は間をおいては降り、降つては止む。聴衆は傘をたたむ、又開く、又たたむ、又開く。素敵な低氣壓來るといふも只かけ聲ばかりである。さりとてはきまりのつかない天氣模様である。どうやら日本の現状にさも似てゐる。(『モダン日本』一一、一二月號)

オリムピック片言

來るべきオリムピック大會が東京で開催するときまつた時に、ああ岸博士が此の世の人でをつたならばと思つた。

日比谷の音樂堂で選手の報告會が開かれ、女流陸上選手の一團が壇上に並んだ時に、人見絹枝嬢が今健在であつたならばと思つた。

伯林のオリムピック大會に親しく臨まれた人々の間に、東京の候補地として神宮外苑の會場が不十分である、他に廣々とした好適地を求めねばならぬといふ聲のあるのは、無理からぬ事であると思ふ。

しかし更に再びオリムピック大會の日本に開かれる時は、想像さるべくあまりにも遠い。皇紀

二千六百年以後の將來を考へたならば、會場を神宮外苑以外に求める事には再考三考を要する。

× われ等は何よりも神宮外苑で開かれる神宮競技ある事も忘れてはならない。

(一一、一〇、一八。お茶の水。『オリムピック』一一、一二月號)

日本はあらゆる方面にぐんぐんと伸びてゆく。スポーツ界も陸上競技が戸山ヶ原に行はれてゐた時は、來賓もない、一般觀衆もなしといつてよかつた。芝浦の時に珍らしく來賓席に添田壽一博士が見えてゐる。御奇な事ですなあとといふと、報知新聞社の寄贈賞がありますのでといふ返事であつた。當時博士は『報知』の社長であつた。

スポーツ徽章

(オリムピックはお祭りでない)

一 佛の對獨恐怖

體育協會が新らしき評議員の選定により、更新の門出にのぼつた鹿島立ちのあくる日であつた。日比谷蠶絲會館で故柳澤伯追悼記念として人口問題講演會場における僕の演題は、

「人口問題より見たる日本と獨逸」

といふのであつた。先づ何故に、

戰勝の佛蘭西が英に結び、伊に秋波をおくり、さらにユーゴ、チェッコ、波蘭各協商國と握手し、尙あき足らずして、ソ聯と同盟まで結んで、戰敗國の獨逸を恐れるのか。

これは一に人口問題である。文化爛熟して人口停滞せる佛は、人口増加し新興の意氣に燃ゆる獨に氣負けしてゐる。普佛戰爭の時に佛の三千萬人に獨は四千萬人であつたが、大戰前は佛の四千萬人に對し獨は六千八百萬人であつた。

ヴェルサイユ條約の當時クレマンソーは獨の人口は將來二千萬人を超えしむべからずとさへいつてゐた。いかにも獨の壯丁は三百萬人を失つた。その上に佛波白等へ領土は割讓され、人口はさらに四百萬人近く失はれた。しかるに今や佛の人口四千百萬人に對し獨の人口ははや六千五百萬人を算してゐる。それはどうした原因によるのであらうか。

二 獨逸の人口對策

戰敗後の獨逸は一意

獨逸の人口の増加と、獨逸民族の質の向上

に努力をつづけたからである。人口増加の方策は結婚獎勵である。職業婦人を家庭の婦人に轉向せしめた。民族の質の向上には消極には先づ惡質者の生殖をやめる、かの斷種法の勵行である。八百萬マークの豫算により千百の裁判所二十七の高級裁判所をつくりて、惡質者には斷種を強制したのである。獨逸の四十三萬人の惡質者の種を斷たうといふのである。同時に一方には積極的に日光浴ワンダーフォーゲルなど體育の獎勵に全力を注いだのである。國營としてあの苦しい財政の中でオリムピック大會を催したのも、その目的は獨逸民族の質の向上であつた。

獨逸にはいかに多くの體育學校があるか、重なる大學にも體育科がある。體育専門學校もある。スポーツの教師の養成に力をつくし、その數を増しその待遇をよくし、國民のスポーツ獎勵に全

力をあげてゐる。

さうした事態につき講演したので、その精しい事はいづれ誌上に現はれるが、ここに紹介せんとするものは、そのスポーツ獎勵についてである。オリムピックといへば只お祭り騒ぎのやうにけなしてしまふ聲がないではない。だから多くの讀者は御承知の事と思ふが、ここにスポーツ徽章につき話して見たい。

三 スポーツ徽章

獨逸のスポーツ徽章は一九一二年に制定されたもので三種に分かれるが、これを保持する者既に百五十萬人に上つてゐる。

その第一種のスポーツ章は五種のスポーツに優秀なる成績をあげし者であつて、それには銅銀金の三種がある。

銅章は 十八歳以上三十二歳まで

銀章は 三十二歳以上四十歳まで

金章は 四十歳以上

に與へられ、次の五種のスポーツに及第せるものである。その五種と及第點は次の如くである。

一、水泳 三百メートル―五分

二、跳躍 幅跳—七メートル七五

高跳—一メートル三五

三、短距離及中距離競争

十三秒四—百メートル

六十八秒—四百メートル

五分二十秒—千五百メートル

四、投擲 圓盤投—二五メートル

槍 投—五三メートル

砲丸投—八メートル

五、長距離競争自轉車乗スケーティング等

長距離 五十分—一萬メートル

四時間十分—二五キロメートル

又は四十五分二十キロの自轉車競争、スケーティング、スキー、乗馬、自動自轉車等と科目の交換ができる。又櫓か橈による競漕、分銅上げ、空中滑走、小銃射撃と振り替へる事もできる。

此のスポーツ章をうけしもの數、男四十三萬二千人、女五萬五千人であるといふ事により、いかに國民あげてスポーツに精進してゐるかといふ事がわかる。

次には青年スポーツ章である。これは十八歳以下の青年に與へるもので、既に男子十一萬五千人、女子四萬九千人に上つてゐる。

四 突撃隊徽章

次には突撃隊スポーツ章である。これは一九三三年十二月に制定され、三十五年二月に改定されしもので、この六月までに既に八十三萬五千人の受領者がある。この受領資格には次の條件を必要とする。

一、體 育 一〇〇メートル短距離競走、幅跳、砲丸投、長距離擲彈、三〇〇〇メートル競走

二、基礎的運動 二五キロメートル負荷進軍、二種の姿勢の小銃射撃、起立跪坐横臥の擲彈

三、野外運動 地面觀察—平野にて幅三〇〇メートルに互り光線の状態に應じ四百—八百メートル先にある九個の目標の内六個を見當てる

土地の知識及踏査 使命擬裝及び距離の測定をふくむ

以上がスポーツ徽章の大要である。その内容につきての批判は人それぞれ見るところがあらうが、いかに戦敗後のドイツが人口の増加と體質の向上、悪質者の排除に苦心してゐるかがうかがはれる。今やその状態は回復の一途をたどり、最近のニュールンベルグの大會などは、その壯丁

の充實せる訓練を如實に示し、歐洲列國に少なからぬ脅威となつた事は周知の事實である。いづれも此の如き努力による結果である、此の報告は『マンチェスターガーディアン』紙の特別調査報告になるもので、全文は十一年十一月の『國際パンフレット通信』にのせられてある。

僕のここに紹介するのは、兎角オリムピックゲームに對し又スポーツに對し誤解せる人もあるやうであるから、さうした人達への誤解をとく爲めの一つの参考にといふ心持からであつて、獨英佛伊殊にソ聯等のスポーツについても述べたいが、あまり長くなるので人口の量の増加と質の向上に突進しつつある獨逸にとどめる事にした。

(一)、二、三。高輪。『オリムピック』二二、一月號)

オリムピック組織委員會への希望

會場敷地は神宮内外苑をふくんだ神宮中心となるべきであつて、それが紀元二千六百年の記念としてふさはしく、なほオリムピック以後將來に通じての體育競技を思ひ、また全國青年の明治大帝御遺徳奉讃の體育大デモンストレーションである神宮體育大會あるを思へば當然すぎる。

なほこの機會に二荒伯の提唱されてゐる神宮大神苑奉納といふことも考へられる。國民あげて一錢乃至十圓を奉納する。男女學生に工業的勤勞奉仕を奨勵する。さうして現在の内外苑を包含した大神苑をつくるといふことである。伊勢神都の大擴張を思ひ、また歐米大都市に比して大東京の公園のあまりにも貧弱なるを思ひ、かかる機會につけ加へ江湖に訴へておく。

オリムピック村に至りては、交通關係さへ考慮すれば距離よりも時間の問題である。密接せる市内より遠さがるがよい。その建物が必要にいかにかに利用されるかといふ點から見ても、位置や建築などが考へられる。青年學校とか、兵營とか、アパートとかいろいろ話も出てゐるが、體育といふ上からヘルセンターその他の社會事業の設備にあつてもよい。もし兵營といふことになれば、

あはせて或る間隔内に練兵場といふことにもならう。ひいては代々木練兵場もふりかへられて大神苑に包含されるといふことも考へられる。

組織委員会には陸軍に對して海軍、衛生、交通、警察などより内務。内外の關係員や觀光客の運搬より鐵道、郵便、電信、電話の關係より遞信、國庫補助の點より大藏などの代表者はもちろん、國際放送や國際宣傳のためドイツで宣傳省の代表者を取入れてあつたが、日本でも放送協會や同盟通信やツーリスト・ビューローなどの代表者を大會の計畫に參與聯絡せしむべく、なほ後援會の代表者といふ意味から全國的大會として、地方からも代表者を参加せしめる要があらう。

このほか競技種目や、デモンストレーションや、ことにわが國の武道や相撲などにつき一言すべきだが、もう餘白もない。さらにこの四年間、否將來に通じ醫學的、科學的の指導に加ふるに、軍事的訓練をかねた全國民の體育運動の合理化、普及、獎勵、それにはドイツの老幼男女、全國民を對象としたスポーツ章の事例などは、少くともオリムピック・スポーツを遊戲視する誤解を解く上からのみ見ても必要であるが、それは『オリムピック』新年號について見てほしい。

(一一、一二、二五。著者。二八。『大阪朝日』)

身投げ男に命をとられる女

銀座三越の屋上からうどん屋の若い男が鋪道を眼がけて飛び降りた。電線に引つかかり一回轉して歩道と車道の間の棚にぶつかり、あはや路面に轉下せんとするとき、通行中の婦人の上に墜落する。二人とも路上に打ち倒れる。若い男は念願通り即死したが、思ひまうけぬ災難にぶつかった婦人は脳震盪を起し、病院へ運ばれたがとうとう亡くなつた。

災難といふものはいつどこから降つてくるのか湧いてくるのか分らない。かうした不時の災難は自動車の事故だけでも毎日何件となく起つてゐる。それがたまたま屋上よりの投身者にぶつかつての事故だけに一層あきらめがつかねる、今更人事無常などといふもおろかなりである。

私はいつもかうした時には、あとに残された人たちがどうであらうかといふ心持に胸が塞がれる。話が飛ぶが井上準之助、團琢磨、犬養毅の諸氏が斃れた時を例にとつて見る。さうした人たちの命を失ふ事が、長い目で見て邦家の爲め又社會のためどうか、あきらめねばならぬのか、あきらめられぬか、見る人の意見にまかすとして、亡くなつた人よりも、あとに残されし夫人と

か子とか孫さんたちの身になり、どうであらうかと、とかく気が廻されるのである。

亡くなつた人自身になつて見ると、否應は無いのである。否應いふ間はないのである。人間はいつかは死ぬことにきまつてゐる。それも遠い事はないのである。高齢の人はまごまごすると逆さま事ばかり見て、一身一家より見れば長生きも考へものさへ思はれる事がある。だから高齢の人達が不時の災難で斃れたとしても、下手に食道癌になつたり、中風でヨイヨイになつたりして、長々と病床の人となり病苦にさいなまれるより、却つて気が利いてるといふ感じもある。さうした意味から僕は公けの旅にハルピンのブラットホームで、朝鮮人の手にかかつて即死した伊藤春畝公ほど、羨ましい臨終をとげた人はないと思つてゐる。

日露戦役當時の軍部の知人などが、旅順に壯烈な死を遂げた廣瀬中佐をうらやましいといつたのも無理がないと思つた。同時に乃木軍の山岡參謀の如く失明になつたのは、なんともいへぬ氣の毒な事と同情せられた。

どうせ遅かれ早かれ死ぬときまれば、死に花を咲かして亡くなる事はさうさう悲しむに當らない。さればこそ進んで自滅するのさへうなづかれる事がある。もしそれ、その死に尊い意義が含まれると、その死が一層光明を放つてくる。乃木將軍の死がそれであつた。古閑中佐の死も又尊い事と思つてゐる。少佐の爲めに當時私が筆を染めたのもその故であつた。

これを逆にいへば死にたくも死すべき時と處は容易に得られない、というて好んで自殺するわ

けにもいかぬ。さりとして生きてゐる事が心苦しい羽目に陥る事も稀でない。近頃いろいろの突發事件が頻發してゐるが、世の中には病氣でもよい、又他殺でもよい、キレイさつぱり一と思ひに死んでしまふ方が却つてよらしいと、あきらめて思ふ人もあらう。他人から思はれる人もあらう、というて死ぬにも死なれない人があるやうな氣もする。

觀じ来れば死生は天なり命なりである、災難にかかつて死ぬ人の身になれば、死に損なひ不具者となつて生き残る、廢殘の人として餘命を送るよりは、一と思ひに死ぬ方がのぞましいであらう。しかし死者は物言はず天國に上つてしまふ、あとに残りしものこそお氣の毒千萬である……時にはお氣の毒でないこともあるが……死生ただ天の命である、というてあきらめる外はない。

四五日前救癩事業の爲め新たに設立される岡山MTLの發會式に臨むべく岡山へ旅をした。程遠からぬ癩の救養所として名高い、此の世からなる不幸なる人々の爲めの樂園である長島の愛生園をたづね、そこに一千餘の病める人々を見舞つた。その時に今更ながら僕自身は癩者を救ふのではなく、癩者の爲めに救はれてゐるといふ感じをとどめあへなかつた。……なぜ吾等が癩者に救はれるか。それは別に筆にしてあるが、みなさんもあの不幸なる患者を見舞ふと、さうした心境になつて来る。東都銀座の四つ辻ジャズの音絶えぬ群衆のさ中に、屋上から落下する人間にぶつかつて命を早める人もある。瀬戸の小島に御恵みの鐘の音を聞きつつ、不治といはれる業病を養つてゐる人もある。世の中はさまざまである。(『モダン日本』一、八月號)

ビンヅルさまとステッキ

ローマのヴァチカンを參觀したとき、あの大きなドウムの中に、數多くの圓柱が立つてをり、その圓柱を背にしたキリスト使徒たちの銅像は、大凡等身大であると覺えてゐるが、丁度吾等の顔の前に使徒の脚の指先が突き出てゐる。その指先がまたなんとほとんど摩滅されてゐるのを見て驚いた事であつた。驚いたといふのは、それは數知れぬ信徒のキッスによりてすりへらされたといふからである。軒滴岩を穿つといふから、根氣よくなめつづけられた銅像の脚の指先のすりへらされるに不思議はない。……黒ずんだ脚の指先のすりへらされた局所は、錫か眞鍮のやうな黄色さである。どういふ金屬製のものか僕には分らないが、それはいづれであつてもさしつかへない。とてもステキな大變な數知れぬキッスをまたねばならない事だけはたしかである……。

僕はその時に故國のお寺などの本堂の脇に鎮座ましましてゐるビンヅルさんを思ひ出した。彼氏の五體は頭のテッペンから足指の爪先に至るまで撫でられづめで、すべてツルツルに禿げてしまつてゐる。多くは赤い色彩で色どられてゐたが、満身禿げちよるになり木地をむき出してゐる。

患者は腕が痛めば己れの腕をなでてからビンヅルさんの腕を撫でるのである。股にかさをかいてゐる、股をなでてその手で彼氏の股を撫でる。つまりビンヅルさまはおのれの一身を投げ出して、身代りになり、もろもろの衆生の病を我身に引きうけてしまふといふのである。引きうけてくれる彼氏の犠牲的精神は大いに多とするが、彼氏の全身に撫でつけられた千種萬様のあらゆるバイキンは、又もろもろの衆生の手先によりてそれぞれ萬遍なく御互ひに傳染される。早い話が銀行に手形交換所があるが如く、ビンヅルさまは病菌交換所のお役をつとめてゐるのである。

病毒日本を以て誇つては居るものの、さすがにこのまま放任できないといふので、いつのまにかあのビンヅルさまはお取り拂ひになつたらしい。近來あまり見うけなくなつた。しかしヴァチカンの使徒の像はもとより取り拂はれてはゐないはずである。ただキッスの度數がその後どんなダイヤグラムを示してきたか、その後の經過を知りたいものである。

此のほど學友關正雄君の新著『書窓遠景』中にパレスチナ紀行がある。その中に次の一節を見いだした。「多くのパレスティン訪問者は現實のパレスティンを見て幻滅を感ずるといふ。確かに聖蹟がおピンヅル化されて居るのを見ては愉快でない。聖蹟の殆んど全部が全部、各寺院の内に取り込まれてゐる。(中略)基督の御墓と傳へられる所の如き、大理石の御墓は硝子の箱の内に保護されて居る。聞けば巡禮者が御墓に接吻するのはまだしも、御墓の石を缺いて持つてゆくので、硝子の箱の中へ納めたのだといふ。しかしそれでは今度は巡禮者の方が納まらないので、硝子の

箱の正面に徑一二寸の圓い穴をあけ、その側にステッキが一本置いてある。巡禮者はそのステッキで御墓の石に觸り、そのステッキに接吻してゆくのだ相である。正に隔靴搔痒の接吻といふべしである。」

墓の石を缺くのは古今東西その趣を一にしてゐる。本所回向院の鼠小僧次郎吉の墓をはじめその例まれならず。因州鳥取の荒木又右衛門吉村の墓も盛んに缺きとられるので、金網の中に納まつてゐる。劍道の達人又右衛門も死んでしまつては手も足も出ない。金網の中でおとなしくばやいてゐるらしい。それにしても圓い穴をあけステッキでふれて、そのステッキにキツスといふ手はまさに珍なるものである。まだ東洋にははやらない。

僕はこの程スペインの政情につき筆にした時、スペインの舊教のお寺がとても莫大な土地を所有して、しかもそれが皆無税であるといふ事と、あのスペインには文盲者が半数に近い、それは舊教が政治に立ち入り教育に立ち入り、新しい教育につくことを妨げて來た、さうした事がスペインの衰頹をまねき、又今日の如き血で血を洗ふ慘禍を引き起した大きな原因の一つであることを筆にした。宗教の力は強くもあり又尊くもある。それだけにその害用された場合は恐ろしい。ヴァチカンの使徒の脚の先、パレストアインのステッキ、淺草觀音堂のピンヅルさまと、それからそれへと聯想さるるまま、この一文となつたのである。(『モダン日本』一一、一二月號)

年號考

年號はいふまでもなく奈良朝時代の支那文化輸入の一つである。

天災地變吉凶禍福、なにか事あれば年號を改めたもので、それが根よくつづいて明治維新にまで及んだのである。孝明天皇の御一代にしても、

弘化が一年 嘉永が六年

安政が六年 萬延が一年

文久が三年 元治が一年

慶應が三年

と二十一年間に年號が七回かはつてゐる。

それが明治の御代より一代一號となり、その煩雜さ、ややこしさからどれだけ助かつたことか知れないが、さて一代一號となつても、昭和の御代まではや三代にまたがると、大正何年だ明治何年だと聞かされても、それが昭和何年から何年前になるのか。又今から何年前といつても、そ

それが明治又は大正の何年にあたるのか、すぐに頭に浮んできにくい。いやゆつくりしても浮んで来ない。況んや統計の計表などに於ては殊に混雑をきはめる。そこで一代一號より更に簡易にならぬものかといふ事は誰しも感じるはずである。

それでは、

西曆と一つにしてさらに國際的にも一本で通すか。

奈良朝以前にさかのぼり紀元を以て一貫するか。

明治は日本の中興、新日本興隆の御代であるから明治で通すか。

過去は過去としてこれから昭和で通すか。

四様の意見がありうる。その中にも紀元何年といふ事は現に筆にし口にされてゐるところで、いはば現在は紀元と昭和とが併用され、昭和が原則となつてゐる。だから悠久なる將來に通じて紀元を原則に使ふやうにするのが一番實現しやすく、又現状に於て合理的であり、實行の可能性が多いやうに思はれる。(『ホームライヴ』)

『書窓遠景』

新聞は筆を揃へて、「四ヶ條の保留ありてなんの獨立ぞや、我々は須らく全くイギリスの羈絆を脱し、名實共に眞の獨立國とならざるべからず」と書き立ててゐる。

四ヶ條の保留とは、スエズ運河などの交通權の確保、外敵に對するエジプトの防禦、歐洲各國の利益の保護、スーダンの英埃の共同統治である。イギリスをしていはしむればその中には歐洲各國の利益の保護といつてゐる。決してわし獨りの利益の保護でないといふいひ廻しである。この一項は中々に物をいふ。

日埃通商の行き詰りとなつたのも、歐洲各國やイギリスの利益のためからの一つの動きであるが、各國の反對により自動車税一つ出来ないといふ現在のエジプト。さては昔にさかのぼつたクレオパトラでおなじみの古代のエジプトをはじめ、聖地エルサレムの巡遊記。さうした紀行文をよみつつ、エジプトタバコといふが、そこに一本のタバコもつくられてゐない。遠い遠い日本のタバコがエジプト煙草の原料として送られてゐる消息も、ヴェールをかぶつてゐるエジプト婦人

の近頃の街頭進出ぶりなども、『書窓遠景』といふ冊子により巨細にしるされてゐる。

この書の隨筆に著者の風格と筆致がしのばれる。中にもバルフォア卿がオイスターベイにテオドル・ルーズヴェルトをたづねた會見記。さらにルーズヴェルトが大統領を辭し先づアフリカを探検してから、二年前の約束である小鳥の囀りを聴きたいと、春の季節をえらんでイギリスに入り、前外相グレイ卿と、一日山中に小鳥の囀りを聞き入つたといふ。さうしたいかにも讀み心地のよい隨感隨筆が、全篇の三分の二を占め、最後に「フランスの爲に」といふ盲目の母を殘して出征する戯曲一幕物の譯文が添へられてある。

著者關正雄君は長く遞信省にあり、近く大阪遞信局長を退きて現に大阪放送局長になつてゐる。由來ムツソリーニが戯曲を作る、ヒットラーが建築や音楽の趣味が深いと聞くと眼を丸くするやうな日本では、官場の人が筆をとることはあまり流行らない。よく日本人に哲學がないなどいふのも、こんなところから割り出されてゐるのかも知れない。僕のこの書につき筆にしたのも、單にこの書の中味からの故のみではない。(『大阪朝日新聞』ブックレビュー)

御經の文句

毎日のやうに數多い新聞雜誌を手にしてゐる私には、『中外日報』は行書草書に屬するものとして、少からず慰められもし又教へられてゐる。その日報社からなにか隨筆をとの事である。しかし私にはちがつた畠であるからふさはしい思索もできない。只近頃の宗教界の異聞を種に、思ひ浮ぶまま雜然たる感想の中から御經について卑見を筆にする。

大本教が潰された。天理教には脱税事件がある。人の道は今祖上にのぼされてゐる。それ見たことか新しいものにロクなものはないといふ人があれば、尻から尻から芽を出す宗教の中には育たないものも少くはないだらう、乳兒の死亡率の多いのは昔からの通り相場である、そんなことを口にするなら、もう立派に育つた青年壯年の宗教の中に、血で血を洗ふ騒動が稀ではない。御法主様に限定相續だのなんのかのと法廷の公事沙汰さへ起る世の中であるといふ人もある。もちろんあれは壯年どころかも老年だよといふ人もあらうが、僕はああ老年だからねと、一口に片附けたりあきらめてしまひたくない。

それよりも考へさせられる事は蓮門、黒住、金光、天理、大本、人の道、曰く何、曰く何と、この科學萬能の聲盛んに、民衆あげてインテリ化しつつある二十世紀の日本に、なぜつきからつきへと宗教界に生新しい看板の絶えないかといふことである。

宗教……僕をしていはしむればその芽が萌え花咲き實の結ぶのは、生きてゐる衆生を對象としてこれを濟度するにあるとおもふ。だから現實の世の中に適せるものは榮え、適せざるものは衰へる優勝劣敗適者必存の道理は宗教界にもかはりはない。

さらに佛教を例とするなら、その昔支那から移り來つた各派の中にも、三論とか法相とか華嚴とか俱舍とか時宗とか、さうした宗派は當時の日本に適しなかつた。そこに日本に適せるものとして眞宗や法華宗が新たに生れ出た。そしてそれがかなり民衆の中に大きな根をおろし、現存十二の宗派中最も有力なるものの中に數へられてゐる。それから星霜ここに千年近いが、江戸幕府の末までは昔のままの現状維持も不思議がないとして、さて明治以後世の中の下デン返し革新の後をうけ、尙佛教の各派を通じその間にこれといふ改良も進歩も變化もない、というて新しい宗派も現はれないといふ事は不思議といへば不思議である。應病與藥といふ詞もあるが、現時の佛教はまさしく不應病不與藥の類廢期？ いや睡眠期ではあるまいか。

何よりも佛教でむづかしいのは御經の數の多い事でありむづかしい事である。僧侶の御説教の上手下手は別として、御經ほど深遠なもの外はない。よくかうした研究が古い古い印度で遠い

遠い昔に積みかさねられたものと思ふ。我等はあまりに數多い御經の中から、時には九牛の一毛か二毛かその片鱗にふれうるにすぎない。

一體なら今少し廣く深く分らねばならないが、たまたま縁ありて法事などに御經を聞かされても、それが全部棒讀みが多い。ようまあ若い坊さん達までみなあれを空におぼえ節をつけて讀んで御座るが、もろもろの衆生は皆目なんの事やら分らないのである。昔は高僧たちの長々しい誦經を聞いて、もろもろの衆生は感涙に咽びつつ深く歸依してゐた。なによりも當時はひまでもあつた。今は信仰が薄くなつてゐるところへ、電信、電話、ラヂオ、飛行機、自動車の世の中である。大きな葬式ほどもろもろの弔問者の爲めに、どうか御經は何分共短かくと御願ひする事ほど左様に、あわただしい世の中である。棒讀みに誦誦する坊さん達にも大きなウエストなれば、折角佛門へ近づくべき機縁は與へられ、惠まれながら、その衆生をして徒らに退屈せしめシビレを切らすに止まるは、さりとては心なき業である。ことに全然勝手が分らないから、いつまでつづくのやらいつごろケリになるやら、さつぱり見當がつかずに坐らされてゐるなどは、罪な事である、殺生である。既に既成宗教が舊態依然たりとせば、そこに新しくさぐさの芽の生えるのに不思議がない。

蓮門でも、黒住でも、天理でも、金光でも、大本でも、人の道でも、その説くところ、その説く人にはとりどりの別があらう。中には天理教の如く積極的に朝鮮、臺灣、さらに滿洲、支那、

南洋とのびてゆくものもある。その土地土地の少数の内地人相手でない。その土地土地の言語に習熟したる人により、相當の資本をつぎ込んで、その土地土地の人たちを對象としての進出振りを見ぬでもない。又中には大本教の如く思ひ上つて増長し法にふれて潰敗せるものもないではない。しかしいづれにしても新たに芽を吹き出してゆくのである。新しき芽を吹くものに共通せる一事はその説く處が平易である、簡明であるといふ事である。御經の捧讀式でないといふ事である。私は佛教は老年期でない、壯年期だといつた。いや壯年期でありたいといつた。悠久なる遠い將來を達觀すればまだ青年期である。もしそれ平安朝、鎌倉朝と大正、昭和の今日をひきくらべたなら、更に新たなる眞宗、法華宗が芽生えずとも、今少し佛門の造作には模様替へがあつてもよいとおもふ、いやなければならぬとおもふ。(一、一、二、『中外日報』新年號)

「カナモジカイ」の稻垣伊之助氏から「タマシイノフルサト」といふ冊子をおくられた。僕の「お經の文句」を讀んで感ずるところあり、筆にしたのであるといふ手紙が添へられてあつた。まさにカナモジの御經なのである。

漁村の人々に

第一に註文したい事は昔を忘れない、さらに昔を知れ、といふ事である。

私達の學生時代には水道がなかつた。衛生上よいわるといふよりも、炊事に、入浴用に一井戸から水を汲まなければならなかつた。本郷の高臺では自炊してゐた我等にはこの水汲みが一仕事であつた。

私達の學生時代には電燈がなかつた。明るい暗いといふよりも、毎日洋燈のシンを切る、ホヤを拭ふ、石油をつぎ込まねばならなかつた。しかもシンはうまく切れない、いぶりたがる、ホヤがくもる、よくわれる、灯先はわづかの風に明滅する。

私達の學生時代には電車もない、自動車もない、早いおそいと云ふよりも、人力車ではノロスぎる上に賃銀が割高である。いつも親譲りの二本足でてくつたものである。

東京の眞ん中でも暗い中に魚河岸までかけつけた魚屋の若い衆達は、仕込んだ魚を荷車へつみ込んで、先引きあと押しでかけ聲も勇ましく、市中を朝まだきに駆けたものである。駿河の海岸

清水江尻の邊で漁した魚介は、肩に荷なつて十六里、甲府の町へと山道をかけて行く。かへりは
鰍澤から富士川を下る。その半日で下つた川を、曳き舟で三日がかりで上つたものである。ただ
ほんのこれだけの事例を見ても、今の青年は文化のありがたさを感じなければならぬ。

なによりも今までは漁業は和船によつた。船足は遅いから遠くへは出かけられない。少しの風
波にもなやまされる。時化にあつては難船もする。それが發動汽船やトロールとなつて、船足は
馬鹿に早い。少々の風波も苦にならない。船に無電の設備もある。ラヂオの設備もある。天氣豫
報によりてあらかじめ出港もさし控へる。出漁中でも早く先廻りして歸港もできる。漁獲物は電
話で市場と取引する。おくるに汽車あり、電車あり、戸から戸へと、トラックがはしる。

更に漁獲物の加工が発達する。國際品とまでのびる。遠洋漁業の發達となる、蟹工船どころか
近くは南極方面へ鯨工船が出かけた。鯨を取る、その場で始末してしまふのである。

そこでわれ等の考へさせられるのは、日本といふ國は鐵、石油、棉花、羊毛等々に恵まれない。
獨り水産に於てのみ大いに恵まれてゐる。さればこそ漁業に於ては、世界を通じての漁獲高二千
萬キログラム、その價格十七億圓に對し、

日 本 一〇、四一萬疋 三三六、三三萬圓

の最高峰にあり、これに次ぐものは遙かに下りて、

ソ 聯 邦 一、四三 一八四、四五

北米合衆國 一、四六

一七八、四八

英 吉 利 一、〇〇

一五一、二九

といふ状態にある。

さうすると水産は海運業と共にわが國に於ては地勢と國民性と相俟つて世界に群を抜いてゐる。
それだけに日本の財政經濟に寄與するところも多いが、同時にわれ等は先づ濫獲をつつしむ事
である。濫獲をつづけてゐては本も子もなくしてしまふからである。

次に船で遠洋に出かけるばかりでなく、日本の漁民そのものがかなり出口は塞がれてゐるが、
海外に進出する事である。日本の國內の人口過剰を間接に緩和するばかりでない、さらにわが民
族の海外發展である。

かくの如くにして漁獲物は日本國內のみならず、國際的食糧としても世界に貢獻をする事にな
るであらう。

日本をとりまいてゐる洋々たる海波は、見る目もはるにかぎりなくつづいてゐる。

〔漁村〕二二、一月號。

金蘭簿後日物語

昭和十一年の年賀状はアイウエオ順に仕分けたまま、いまだにそのままつかねられてある。いづれは年末の挨拶状を出すのだから、それまでに金蘭簿と対照して、

新たに金蘭簿へ組入れるものも出来よう

宿所肩書の變つたものは補正しよう

といふのであるが、春去り夏過ぎんとしていまだに手がつけられずに、積み重ねられたままでゐた、といふのも無理がない、差出した數が一萬をいくばく越してあつたかよく覚えなないが、受取る方は無論それより少ない。それにしても七八千にはなるであらう、見たばかりでもついうんざりしてしまふ。

僕は近頃浪々の身にはなつてゐるが、それ講演それ寄稿と舊によりて註文が相次ぐ。そこへ晩春から三部の書冊を上梓するため何かとあわただしい。このほど一と片附いたときに、右の足のうらの水蟲がとがめて外出も出来ない、八月の三十日から九月の五日まで、海南莊に箱詰めにな

つてゐる。そこで足かけ七日金蘭簿整理に没頭すべく運附けられ、やうやうにケリがついた。

僕の間金蘭簿は、アイウエオ順のカードの挿み込みにして、丁度十冊になつてゐる。到来した賀状を一々カードとてらし合はせ、或は新たにさし込む、或は移轉に伴ひ肩書を書きかへたり、カードをさし替へる。それだけならなんでもないが、かなり面倒な事は姓のよみ方である。

米といふ字がある。コメでコ部がよいのか、ヨネでヨ部がよいのか、マイでマ部がよいのか分らない。現に米田とかいてヨネタとよむ人もあり、コメタとよむ人もあり、マイタとよむ人もある。角といふ字がある。スミでス部なのかカド又はカクでカ部なのか分らない。現に角野と書いてスミノとよむ人がありカドノとよむ人もある。それで米の字はすべてヨ部にとめるとか、角はみなカ部にとめるとか、小の字のこれこれはオ部又はコ部と仕分けるとか、色々の便宜解釋を各冊のはじめに記し、それぞれカードの落ちつく先をきめてあるが、それは僕自身としてもかく間ちがひやすい。妻や書生の手では尙の事である。そこで飛んでもない處にはさまつてゐる事もあり、ところどころに重複しがちである。

生命保險會社では、保險者被保險者のカードはすべて音により振り分けてあるが、これとても音が漢音吳音などとりどりに使はれてゐる。我等は電話帳をくるときにも、いつもまごつきもし、手數も重ねるが、姓の類別には全く頭をなやめる。

次には鈴木中村佐藤など姓の數の多いものは尙更の事であるが、さらにその名をアイウエオ順

に分類してある。ところで鈴木佐吉、準太郎、信吉、正藏、宗五郎など同じサ行の名前が多すぎると、その中に順位をつけねばならない、そのサ行の欄が満員になる。さうするとその前後の分までそれぞれ順に上へずらすとか、又そこへ新たに一枚はさみ込むとか、此の手数がかなり厄介だが、その信吉もシンキチなのかノブキチなのか分らない。シャウゾウなのかマサゾウなのか分らない。ソウゴロなのかムネゴロのか分らない。爲めに重複もする。さがしあぐむ。かうしたカードの組み込みにかなりの手数がかかる。

年賀状不用論者もあり、又新聞廣告を出してゐるからよろしいといふ人もある。年賀廣告を新聞にのせた、雑誌にのせたとしても、その人の知人たちは、あの人は廣告してゐるからといつて、それを賀状をよこした場合と同じやうに見るかといふと、必ずしもさうではない。それは現に廣告しながらも矢張り年賀状を差出したり、又一々答禮のあいさつをする例の少くないのを見ても分る。僕は年に一度の事である。その折に平素の久瀾を敘する。それはよい事であり、又さうしたあいさつを多く差出すこと、又差出し得る事は目出度い事と思つてゐる。殊に『朝日新聞』在社中は、矢張り間接に社の爲めであるといふ心持から、かなり手廣くあいさつ状を差出す事にしてをつた。

僕の方では年中旅行をする。至るところ世話をかける。歓迎をうける。その重立ちし人達の名前はカードとなつてはさみ込まれる。しかしその名前と顔とはいつまでもピッタリと記憶には残

されない。殊にその人達が縣廳や學校や銀行や會社の勤め人で、他の地方へ轉勤されて見ると、尙更の事である。先方では毎年あいさつ状もおくつてくるから、海南はオレを知つてはすだと、思ふのも無理からねど、相手かはれど主かはらず、當方のややともすると、いやたびたび失念し失禮することあるも止むを得ない。

そこで今年の金蘭簿には少しく變つた手加減を加へる事にした。つまり私の身上に異變があつたのだから、在來に比してそこに自づから手加減の加へらるべきは當然すぎる。いづれにしても一介の野人として尙將來あいさつをかはずべきや否や、その程度をどうきめるか、それはかなりに難しいが、

毎年あいさつしても一向に手應へのないもの

どういふ因縁で組み込まれたか全然分らなくなつたもの

身上異變に伴ひ當方より遠慮して然るべきもの

先づさうしたものを相當整理して見た。そして尙先方からあいさつされるときはそれにうけ答へる。當方から押しつけてあいさつはしないといふ心持で整理して見た。

年賀状による整理を終ると、今度は年末に僕が差出したが、符箋つきで舞ひ戻つた分、これが大凡二百近くもあつたであらう。此の方は行先不明もあれば死去したのもある。中には他に轉任してゐる事がよく分つてゐるが不明になつてゐるものもある。ひどいのは差出した宛名の人はその

縣廳の知事であつたが職をやめた。或は他の縣知事に轉任してゐる。しかるにその縣廳では前任知事あての郵便に對し、當方に心當りなしとばかりにつきかへされてゐるものもある。

僕は毎年一と通り眼を通すが、今年是一段と入念に見て少しく嚴選主義？をとつて見た。同時にその入念にといふ気分には、行先の不明とか殊に死亡した人々に對するくさぐさの感慨もふくまれてゐる。更に又私とその亡くなつた人たちのカードについて、どうした手続きをとり又つづけつつあるか、それは又別に筆にする事もあらう。

只一言つけ加へておく事は、この二百餘通の舞ひ戻つた符箋つきの年賀状である。それは主として轉居した人の通知が行き届いてないのか、然らずんば通知をうけても相手が訂正をしてなかつたからである。しかし更に考へられる事は、いよいよ配達不能の分だけが舞ひ戻つたので、轉居の先々へ符箋が一枚二枚三枚と重なつた末に、配達済になつた分も少くはないといふ事である。現に僕へあてた年賀状の中に符箋つきのものが少くない、僕は十五年前に今の苦樂園に移つたもので、その以前一寸御影の柳に居た事があり、さらにその前には東京で麴町四谷赤坂麻布と轉々してゐた。その古い古い肩書の年賀状がまだ五六十枚も見出される。僕はさうした差出人へは、現住所を通知して將來郵便の速達と、郵便局の無駄節約をはかられたいとの注意状を差出す事にしてゐるが、既に十數回注意を重ねても、尙頑強に舊住所を書きつけてくるのがある。僕は遞信省に在職して居た爲めやかましくいふのではない。金蘭簿の訂正は一舉手一投足の勞であるから、

郵便局の手數を省略するため、本人たちの速達を期するため、訂正に吝ならざらん事をのぞむ者である。

僕は浪人となつてから今雑誌や書籍の處分につきなやみつがある。その方こそ筆にすべきであつたのが前後してしまつた。金蘭簿につきあまりだらだらと長々しく書きすぎた。書籍物の始末につきては此の次の機會にゆづる事にする。(二一、九、八。「書物展覧」一〇月號)

六甲苦樂園の海南莊を引拂ふにあたり、海南文庫がそのまま残される事になつたのは仕合せである。しかしその中から東京へ移すものを選びわける、その爲めに殆んど一週間を費した。その残された文庫の書冊の整理それには、少し閑になつたら又一週間位山莊へ泊り込まねばならぬと思つてゐる。(二二、三、三三)

浪人偶語

今春はからずも小生身上に異變あり、三月十二日誕生日といふに、思ひ出深き朝日新聞社を退きここに一介の浪人となりました。舊により朝日新聞社への同情と、併せて小生への御厚誼のほど御願ひいたします。

一家あげて相變らず無事、小生は頑健にペンをはしらせることと各地への講演に、その日その日を逐はれて居ります。此の間上梓せるもの『これからの日本、これからの世界』新潮社發行。『人口一億』第一書房發行。『ゴルフバッグ』目黒書店發行の三部。中にも『これからの日本、これからの世界』は今春の起草にかかり、いささか邦家將來の國策を筆にせるもの、幸に電覽を得ば幸甚と存じます。

ここに恒例により謹で各位の御健勝をいのります。

西宮市苦樂園（電八五八番）（上京の節は本郷區元町文化アパートにまかりをります）

昭和十一年十二月

海南 下村 宏

委員とか會員とか、理事とか監事とか、評議員とか贊助員とか、顧問とか維持員とか、さうした名前が僕の肩へ約二百六十ほどぶら下つてゐる。

『朝日』に在社してゐる頃は、故村山社長は對外關係の肩書の大部はみな僕に背負はしてしまふ事になつて居た。そこへ『朝日』の一員として、さらに又個人として、東西を股にかけてゐたから、又かなり店をだだつびろくひろげてゐたから、三百近い肩書を重ねてゐたといふに不思議が無い。

此の春身上に異變があり、一轉二轉更に三轉して、『朝日』も退社し、一介の浪人となつて見ると、さうした肩書の中で『朝日』關係のものは多く脱ぎすてるべきであり、さなくも僕個人として肩につけてきたものもその大部は今更そのままにしておくに及ばないものが相當に數へられるのである。それは手數であるとか無駄であるとか費用がかさむとかいふ問題ばかりでない。それは一つの紳士税にすぎぬといふばかりでない。一會員であるとかいふ外に、理事とか評議員とかいふ職にある事は、事實自分としては無責任の嫌ひがあるからでもある。

勿論政府のつくり上げた會の委員といつても、國際觀光とか國立公園であるとか、度量衡であるとか、對支文化であるとか、簡易生命保險であるとか、相當密接な因縁や關係を持つてゐるものもある。又新たに貴族院制度の調査といふやうな特殊の意味を持つものもある。その他社會問題に教育問題に、政治に經濟に保健に人口に、歌の會合にゴルフのクラブに、その他郷黨關係と

か同窓關係とか遞信關係とか拓殖關係とか社交關係などに、全く身柄の抜け切られないものもある。

しかし此の際僕としては相當整理し立て直る必要が少くない。かりに一例を日英日米といふやうな國際的な協會にとつて見る。僕としては支那と佛蘭西とからは勳章をおくられてゐる。ベルギーは勳章の外に僕の二年近い留學地である。又ロシアは亡父の時代にかなり縁故を持つてゐた。しかし英も米も加奈陀もメキシコもブラジルも、さては獨逸も伊太利もチェッコも波蘭も印度もシヤムもヒリッピンも、僕としては全く縁故は薄い。シヤムもブラジルもヒリッピンも、その土地に足を踏んだ事すらない。僕は今さうした方面から順次整理にかかつてゐる。それは僕の浪人生活として已むを得ないのみならず、僕は一面日本民族の量として移民問題の運動に、質として國字の整理や、保健の爲めに結核と癩を減退し絶滅すべき運動には微力のかぎりをつくしたい。さうした意味からも建て直したい。

僕の郷黨關係に於ても南英育英會のやうに意義も深く縁故も淺からぬものもある。それは拙著『南紀人材論』によりても示されてゐる。しかし中には大分因縁の薄い縁故の淺いものもある。さうした方面の整理にも取りかかりつつある。

尙一言しておきたい事は、僕の所見僕の國策私見ともいふべきものは、大正のはじめ臺灣に在職中公けにせし『日本民族の將來』、次で大正十一年の『歐米より故國を』、昭和七年の『世界と

日本』、同八年の『日本の行くべき道』、及び同十一年新春筆を下せる『これからの日本と世界』等に終始一貫して、ほぼその大要をつくしてある。その中にも國民保健の問題とか移民の問題、地方行政の統一、日本國字の改良等々、やや實現されつつあるものもある。私のいくばくもなき餘命は、その筆にし口にせるものの實現に微力をいたすまでである。

何分にも日暮れて道は遠い。焦心しつつ一日一日を送りつつあるのが現在の私の姿である。一刻一刻と身をきざまれるやうに感じてゐるのが現在の私の心境である。

浪人心境

乞食を三日すれば忘れられないといふ諺があるが、浪人も三日すれば忘れられないのかも知れない。

乞食の方はまだやつて見ないから分らないが、浪人の方ははや一年近くなつた。此の方の體驗によると、衣食に不自由を感じず、趣味の多い人ならばまさに乞食以上やめられないものと思ふ。僕が浪人になつたときに落手した書状は何百通を算したとか、その中に僕の浪人を禮讚したのも少くはなかつた。その中に目黒のなにがしの筆として次の如きがある。

小生の知る人の中で浪人になつて一番困らぬ人（但し臺所の方は保證の限りにあらず）は海南老であらうとは小生の常に思つてゐた處でした。愛着措く能はざる朝日を去ることは定めし心淋しいことと、重々お察しはしてゐますが、此の點を除いては、交友の廣いこと、書齋生活を樂しむこと、又道樂の方面にかけても、得意とする文章詩歌から詩吟玉突は固よりのこと、あれほど下手なゴルフさへあんなにエンジョイし得る人が消閑に苦しむはずはなく、

かく考へて來ると浪人として最もはまり役な人が浪人になつたとも思はれます。そして此のことは冗談でなく人間とし最も名譽な且つ幸福なことであると信じます。

いかにも今の僕は舊の如く忙しい。しかし爲めに健康を害するまでには至らない。重荷をおろした氣安さは、日常茶飯事の忙しさにくらべてはその徳廣大無邊である。同じ忙しさでも職務を負うてゐるといふ氣持の有ると無しとは、そこに大きなケヂメがある。

或る友人の曰く、そりや浪人になつた當座は肩の荷をおろしてヤレヤレといふ氣持もするが、先づ一年立つと今度は相當さびしくなるものだよと。僕ははや一年に近くなつたが、もし僕にして趣味が少なかつたならば、さびしくなるのかも知れない。

いはれて見るとそんなものかも知れないが、さらに同人杉村楚人冠はかなり長々しき書信の末に、次の如き文句をつけ加へてあつた。

今から御注意申上げておくが、隱退といふとのんきらしいが、馬鹿に忙しくなるものである事だ。僕自身が呆れてゐる。君はこの上忙しくなりやうがないといふかも知れぬが、そんなものではない。僕はこれを君の健康の爲めに憂へる。

僕には講演と起稿といふ慢性の疾患があるから、なんとしても日夕心忙しくおかつてゐる。雜然と積み重ねてある白雲樓の書齋の書籍雜誌類にまだ整理の手が少しものびてゐない、好きな圍碁なり撞球へ復活をと思つてゐるが、さうした暇など及びもつかない。折々にペンにせるものも

いつの間にか追っかけてきて、まとめられ書冊として上梓されるべく、舊稿の整理や校正に逐ひまはされる。爲めにこの春から念じてゐた第四の歌集の原稿はまだ手につかない。

僕の浪人は新聞人の廢業であり、又政變の當時に突發したのであるから、毎日政局の動くを見毎日新聞を手にする以上、浪人の氣分になり切れない。毎朝『朝日新聞』を手にしては一喜一憂する。大きな御世話であらうが全く在社の時と同じやうな氣持に囚はれがちである。そしてソウもう退社してゐるのにナアと思はず苦笑することもある。新聞紙上には毎日廣田内閣の記事がでる、世間話にも政局談を耳にし口にせぬ事もない。これ又その日その日一喜一憂を禁じ能はない。かつて臺灣の職を退いて直ちに外遊した時とは大した相違である。たとひ内地に居ればとて臺灣の記事はさうさう紙上に現はれない、口の端に上らない。それを思へば僕は新聞と内閣と二重に結びつけられてゐる事になる。もちろん廣田内閣はある時には更迭になるにちがひない。『朝日新聞』に至りてはいついつまでも毎日毎夕眼にふれずにはおかない。

何等の責任もない廣田内閣のファンとして『朝日新聞社』のファンとして、肩をこらしてゐる僕も、はや廣田内閣の引退によりて、その一半の肩のこりが抜ける事になつた。

今東京への轉宅に一時ではあるがドサクサとしてゐる。東京と大阪と兩建の生活は浪人の經濟として許さない。そのいづれを取らねばならぬかといへば何分にも東京には雑用が多い。大阪は浪人生活に不向きである。容冬から恰好な家をさがし廻つて、漸く大森區の田園調布にささやか

な浪居の巢を求め得た。

六甲山麓海南莊に堆積せる書籍雜誌類も、新居へは恐らくその百分一しか收容できないと思ふ。この整理がなんとしても大仕事だとおもふ。なんだか自分で自分の亡くなつたあと片付けをしてゐるやうな感じで、今海南莊の部屋の中をうろろしてゐる。(二三、二、一六)

偉くなる人、大業をなす人、出世する人は、

如何なる資格を必要とするか？

- 一、日本國民たる感激を失ふなかれ。
- 二、おのれを使ふ人の身になつてはたられ。
- 三、相手の身になりて同情を忘るるな。
- 四、おのれの給與にくらべて貸し方となれ。
- 五、意思は強く熱誠であれ。
- 六、人をうらむな己れを責めよ。
- 七、寛容の徳を養へ。
- 八、健康に注意し運動をつづけよ。
- 九、絶えず讀書につとめ日記を怠るなかれ。
- 十、死は時々刻々に迫る。寸陰を惜しみ、死後延命の道として遺言をつくれ。(『キング』一一、七月號)

時の力

今日は二月二十六日である。

二・二六事件の當日であるから、一年前を追想するは當然すぎる。馬場先から雪降りしきる千代田の宮城を仰ぎつつ、そこに鐵條網をかつて警戒についてゐる兵士の群をながめたあの折の感じも残つてゐる。警視廳はどうなつてゐるかと言ふまで出かけたが、これも又通行止になつてゐる。内務省や警視廳に通勤する役人連が兵士を取り巻いてゐる。中へ入れてくれとでもいつてゐるのであらう。さうした光景も記憶に浮んでくる。

あれから連日『東京朝日』に立てこもつてゐた當時のくさぐさの思ひ出は、ここに筆にすべくあまりにも数かぎりがない。それからそれへと走馬燈のやうに腦裡をかすめてゆく。

それにしてもわづか一年をへだてた今日からは、早かなり遠い昔の話のやうに感じられる。それは誰彼となく押しなべての心持ではなからうか。かなり深いショックをうけた僕自身にしても、もうなんだか人ごとのやうな氣がするほど薄く淡くなつて來てゐる。

それから引つづき眞夜中に組閣本部へかけつけた記憶もないではない。東都を去つて鎌倉海濱院に引揚げた前後の思ひ出も忘れられぬはずではあるが、それとてもなんとなく人ごとのやうな氣がする。

友人から今日は弘世助太郎さんの一周忌からかへつて來たと聞き、高柳松一郎君の一周忌にゆくのだと聞いて、さうさう海濱院の一室で妻といよいよ朝日新聞社へも御暇を願はうではないかと話し合つてるとき、弘世さんや高柳さんの計報をつぎつぎに聞き、今更のやうに人生無常の感慨を深くした事であつた。

あの海濱院における思ひ出も、弘世さんや高柳さんの話から、逆に思ひ浮び出す位のものである。

三月十二日、奈良は二月堂お水取の日である。僕の誕生日である。僕は忘れられぬ思ひ出とすべく、此の日を退社の日として社の同人に告別の辭を述べた日である。その誕生日に結びつけてあるために、さうさう今日は退社を願つた日だなあと思ひ出さざるを得なかつたわけであるが、この日は偶然にも我肩にからんとする重荷を辭退するために、あわただしく駆け廻つてゐたせゐでもあらうか、一年前の十二日の追憶らしいものは、とんと浮んで來なかつた。

もし僕がその日その日の米鹽の資にでもつかへてゐたら、かうでもあるまい。もし僕が病床にでも横たはつてゐれば、かうでもあるまい。僕は健康である、喰つてゆける、さうした身の上で

あるからでもあらうか。軽い淡い思ひ出に今日此の頃を過ごし得るといふは、なんとしても有り
がたい事である。

しかししかし、それにしてもどうしてかうもアツサリした気分になつてをれるのか。あの大事
件にぶつかつてしかもわづか一年しかたないのに……。

勿論人間が年中同じやうに喜び怒り哀しみ楽しんでゐた日には大變である。時は移つてゆく、
時が動かしてゆく。それでよいのかも知れぬ。さういつもいつも笑つてもゐられない、泣いても
ゐられない。

しかししかし、それにしても時の力がかうまで強いものであらうか。随分あの時のあのショッ
クをうけて、ああもせねばならぬかうもせねばならぬといふムーブメントは日本國中至るところ
にあつたのである。しかし惜しいかな歎かはいかな、喉元過ぐれば熱さを忘れたがるのではあ
るまいか。いつのまにか又惰眠……敢へて惰眠といふ……に陥れるが如き感無きを得ない。

折角の尊い犠牲は無駄にはしたくないものである。無意味にはしたくないものである。

(二二、三、一八。大阪クラブ)

第四篇 山と水

忠義櫻と不忠柳

一 花岳寺

播州赤穂をたづねたなら、臺雲山花岳寺に數多き義士の遺跡を見出でるであらう。

淺野家三代五十七年間ことに初代長直侯は、水道の敷設、鹽田及び新田の開拓、赤穂の築城等により、明君の譽れ高く從三位を贈られてゐる。その長直侯が母の院號臺雲を山號とし、父の院號華岳を寺號として臺雲山花岳寺を建立した。淺野家の香華院であり又家老大石家の菩提寺である。

山門は赤穂城の搦手門を移し建てたものであり、本殿の前面には大石良雄が母の冥福を祈るために移し植ゑたる大石名残りの松があり、境内西寄りの一字には本懐成就の後大石が寄進せる守本尊千手觀音菩薩を安置し、左右には四十七士の木像を列べたる觀音堂がある。その觀音堂にあらべる寶物館には義士の連名狀、早打狀、大石の惠光和尚への暇乞狀、亡君への奉答文、さては山鹿素行はじめ義士の銘々の書畫刀劍什器など、數多い遺品が陳列されてある。

ここに筆にせんとするは寶物館の南に隣せる淺野内匠頭をはじめ四十七士の墓の前なる忠義塚

である。忠義塚は龜跌の上であり、碑文には良雄の殊遇厚かりし西播の碩儒熊陽藤江忠廉の撰文が刻されてある。寶曆二年義士五十遠忌にあたり、有志相はかりてこれを建てたと傳へられてゐる。問題はその忠義塚の兩側にある義士墓畔の櫻と柳である。

櫻は大石邸内遺愛の櫻樹の一株を移し植ゑしもので忠義櫻と名づけ、柳は大野九郎兵衛の邸宅門前にありし垂柳の一樹を移し植ゑしもので不忠柳と名づけてある。

二 大野九郎兵衛宅趾

花岳寺の書院に片山伯仙師と茗をすすりつつ義士の昔話をしのびあひ數刻をうつした事であったが、その折に先住仙珪和尚は義士狂僧とまでいはれ、大石神社の建立に三十餘年全力をささげて努力をつづけた事、又さうしたおこりは明治九年佛人モズロベールの花岳寺訪問にきざせし事なんぞ聞かせてくれたのであるが、話の序にこの忠義櫻はよいが不忠柳はよくない、取りのぞけといふ説もあり、いや取りのぞいてはならぬといふ意見もあり、一時は取りのけた事もあります。が、今は又植ゑつけてあります。これはいかなるものでせうといふ事であつた。

此のたづねにつきすぐ思ひ出したのは先刻大石神社に参拜したかへるさに、ところどころ義士の舊宅の趾にしるべの石標が立つてゐる。鳥居を出て、左に大石瀨左衛門宅趾といふ石標があつたとおもふ。右して右側に間瀬久太夫左に磯貝十郎左衛門の石標がある。大野九郎兵衛のやしき

あとはとたづねたら、磯貝の西隣りでここになります。しかし不忠者ですから石標も建てないのださうですといふ事であつた。

これからが私の伯仙師へあいさつした話の要領である。

大野九郎兵衛の屋敷跡には石標があつてよいとおもふ。何も故人をおまつりするといふのでは無い。ここに大野の邸があつたといふ標識にすぎない。もし義士の遺跡顯彰會の仕事であつたとしても、藩侯といはず、山鹿素行といはず、その他善惡邪正に拘らず、それに因縁ある遺跡にはしるべをつけておいてよい。或は觀光會なり町役場でやつてもよい。遺跡の保存、道しるべなのである。もしその石標がカケとられる、さうした事は鼠小僧の墓にもあれば荒木又右衛門の墓にもある。いろいろの意味でくさぐさの心持でカケとられる事がある。大野の宅趾の石標を見て大野は怪しからぬ都合なやつだといふので、カケとられるならそれもよいではないか、倒されるならそれでよいではないか。それが不忠者に對するこらしめ世のいましめになると解してよい。さうした意味で大野宅趾にも石標はあつてよいと思ふ。

三 不忠柳

不忠柳にいたりては大野宅の石標とは大分話がちがふ。それは遺跡でも道しるべでもない。もしそこにまつられてある長矩侯又四十七士の遺靈がどう感じられるかといふ點も考へられるが、

それよりも考へらるべきは、それが参拜者に與へる感化である。

さうなると大石良雄遺愛の櫻をうつし植ゑてある事には何人の異存もありやうもないが、不忠柳となると押ならべて是非共にここに植ゑつけておかねばならぬといふ理くつもないが、さりとして不忠柳を植ゑつける事はよくないかといへば、さうはいへない。というて取りのぞかねばならぬといふほどの理窟もない。

問題はそこに参拜する數知れぬ人達には、老若男女それぞれにくさぐさの思慮分別があるからである。参拜する人々の心持によりて、よい戒めだとうなづかれる事もあらうし、又よい氣味だ、尤もだと思ふ事もあらうし、又さうまでせずともと首をかしげる事もあらうし、又却つて追慕参拜の氣分をこはされると思ふ事もあらう。だからわざわざ植ゑ附けねばならぬといふ事もない、というてわざわざ取りのけるにも及ばぬと思ふ。

私が伯仙師に答へたところは、もろもろの多數の参拜者にはどうひびくのかといふ事であつて、いづれは國鐵が赤穂をすぐる頃は、参拜者の質もかはつてこよう。殊にその數は大變な事になる。その頃の参拜者へ及ぼす感じにより、自から此の問題もなんとかきまるめどとなるであらうと答へた事であつた。それならお前はどう思ふかといはれたら、赤穂の町をたづねて義士追慕敬仰の念に浸つてゐる、ことに義士の墓前に立つてゐる。さうしたところへ大野九郎兵衛とか、不忠柳とかさうしたイヤな感じを聯想される事は氣分をこはす……さうした感じがするのである。

四 生死觀

赤穂の濱邊には藻鹽たく烟が眞すぐに立てるしづけき秋日和である。赤穂御崎までドライブして對鷗館の樓上に、屋島群島から小豆島へかけ瀬戸の島山を見はるかしつつ、花岳寺よりおくられたる義士の書翰類の刷りものなどに目を落としたが、大石良雄が泉岳寺へ引上げ吉良上野介の首級をささげ、亡君の靈前により上げた奉答文を再讀三讀して、今更ながら大石内藏之介の智仁勇兼備であるといふ事がしみじみと感得された。さうしてたまたま大石内藏之介が在藩中に江戸表で松之間の刃傷があつた。もし内匠頭が場處柄にかんがみて辛抱我慢をしたならば、又もし内藏之介が出府してゐて分別されたなら、かうした凶事も起らずにすんだであらう。大石内藏之介はじめ四十七士の銘々をはかる凶事の起らぬやう、又起つてもお家斷絶にならぬやう、只淺野家安泰なれと専心であつたであらうが、事ここに至りて已むなく元祿の義擧となり、それが長く後世に我國風教の上に尊い遺烈を傳へたといふ事は、見方によれば上野介の意地悪と内匠頭の短慮のおかげであつたとも見られる。

長い長い悠久の間に我等は朝露の命を託してゐるのである。昔から死は安く死に處するは難しといつてゐる。松の間の刃傷が無くば、大石はじめ四十七士もその名も知られず残されず天壽を終へた事であらう。又四十七士は淺野家の爲めにさあれかしと祈つた事であらう。それが不幸

にして凶事に直面した。大石はじめ四十七士はここに死に善處すべき秋を得て見事善處したのである。

五 泉岳寺の奉告文

内藏之介の亡君の靈への奉告文はいかにも情理がつくされてゐる。次の如くである。

奉申上事

一、今日只今大石内藏介ヲ始御足輕寺阪吉右衛門迄都合四十七人進死臣等謹而奉告亡君之尊靈。去年三月十四日尊君刃傷吉良上野介殿之御事私共不奉存其子細、然所尊君御生害上野介殿御存命御公裁之上我等共如是之上我等共如是之企非尊君之御心而却御怒奉恐候得共、我等共尊君之食祿申共不戴天之儀難默止共不可踏地之文無耻不可申候然而晝夜感泣仕候、假抱耻相果候共於泉下可申上詞無之候。因茲可奉繼御意趣奉存候ヨリ此來今日ヲ相待申事一日三秋之思御坐候。四十七人輩起雨踏雪一日二日漸一食仕申候、老衰之者數々進死申候得共、蟻螂頼臂之笑ヲ相招彌尊君之御耻辱ヲ相遺可申歟與奉存候得共、不得已昨夜半申合上野介殿御宅エ推參仕、則上野介殿御供申是迄參上仕候。此懷劍者故有私家先祖代々則持仕兼御存被遊候觀音妙利劍ニテ御坐候、御墓下御尊靈於有之再御手ヲ被下候テ逐給御鬱憤右之趣四十七人一同奉申上候以上。

元祿十五年壬午十二月十五日

大石内藏之介良雄謹言上 花押

六 内藏之介の心持

奉告文中私共其仔細は存じ奉らず、しかし尊君は御生害上野介殿……殿と云つてゐる……御存命である、既に御公裁のありし上は、我等の企ては尊君の御心に逆ふかも知れぬといふ事を恐れるが、しかし尊君の食祿をはみし我々は、共に天をいただけないといふので、刃傷の仔細はいかにあらうとも、よし又御心に逆ふかも知れないが、臣子の分としてこのままでは居られぬといふ意趣を明かにしてある。それから四十七人は一日三秋の思ひにて今日を待った。もししくじつたならば尊君の御耻辱をます事と存じたが、昨夜上野介殿御宅へ推參しと記して、さてここに上野介殿の首級をあげてといはずに、上野介殿御供申し是まで參上仕り候とある。私はこの一文をくりかへし讀んでゐると眼頭があつくなつて來た。そしてふと又伯仙師の不忠柳の話へ聯想されて來た。あの忠義櫻と不忠柳を前にし、亡君を中心にとり圍んである四十七士の墓所、その地下の靈がこの不忠柳をどう見るであらうかと想像をめぐらして見た。

大野九郎兵衛の不忠柳！ それは痛快だといふ者もあらうと思ふ。この場所へ汚はしいと怒る者もあらうと思ふ。内匠頭は「眼障りである切つて捨てよ。」と一喝されたかも知れぬ。内藏之介は只靜かに「取のけたがよからう。」といひさうに思ふ。(二二二。『文藝春秋』)

室津物語

(室君とお夏清十郎)

一 室津の涙地藏

數知れぬ瀬戸内海の島々は先づ東は家島群島よりはじまる。家島群島を左に見て、播磨路の海岸線が揖保川の河口なる網干から西へ屈曲がはげしくなり、室津灣相生灣坂越灣、それから赤穂御崎の鼻を経て吉備の國へとつづいてゐる。

室津灣から東播磨の海岸線は明石海峡を横ぎり屈曲が浅いから、瀬戸内海中國筋の船附場としては室津が一番東の端となるので、江戸時代には西國大名はじめ江戸へ参覲交代する者の海の關門であり、その以前も瀬戸浦々の便船の手ごろな船附場になつて居り、支那貿易の足溜りになつて居た。だから赤穂の海岸に取揚島、唐船山、唐船島……カラセンとよむ……などの名が残り、室津灣頭の三つの島も神唐荷島、中唐荷島、地唐荷島と名づけられてある。

たしか谷崎潤一郎君の蘭菊物語に室津の港の支那貿易の話から、室君など遊女たちの話がかた

り精しく記されてあつた。室津といへば攝津の江口とならんで遊女街が聯想され、江口の妙に對して室津の室君の名が浮んでくる。

網干の町へ講演に出かけた折を幸ひに、自動車を室津へと走らせた。岩見の漁港をすぐると斷崖に沿うて道がうねりうねり室津に近づいてくる。その名も七曲りといひ、このあたりを遊女が郎君をおくり、後朝の名残を惜しんだといふので、そこに涙地藏と名づけられたお地藏さんがまつられてゐる。昔は後朝の別れを惜しむ情緒でんめんたる光景にあてられて、お地藏さんまで涙を流したらしいが、今は自動車が舞ひ上げる砂ほこり、さてはガソリンの異臭にあてられて涙をこぼして御座るらしい。

二 山吹の前

その昔は室津千軒といはれたが今は三百軒に足りない。箱根が山の關所なれば、大井川が川の關所であり、ここは海の關所ともいふべきで、九州の諸大名はもとより藝州廣島の淺野侯まで、船によりこの港を發着地としたといふから、支那貿易でポロイ仕事をつづけた頃はもとより、江戸時代とても船から上れば先づ一と休み一泊となる。乗船となるとそれ風だそれ雨だというては、一日一日と泊りをつづけましたらう。當時の室の港の榮華振りは想像にあまりがある。

その頃揚屋は十六軒、但島屋西屋などいふ大店に、室君、友君などいふ遊女が名を賣つてゐた。

友君といふのは木曾の義仲の妾山吹の前の後身で、巴御前と共に戦場に出陣したものだといふ。山吹は又の名葵といひ、膂力あり、義仲北陸西上の折り勇戦をつづけ、越中礪波山トナギの役に戦死したはずで、かりに生きてゐたにしても山吹の前ともあらうものが、室の港で遊女に轉向するといふ事はうけとれない。只さうした突飛な傳説もあるといふ事だけつけ加へておく。

三 二組のお夏清十郎

傳説といへばお夏清十郎の清十郎はこの室津の出であり、姫路の米問屋田島屋九左衛門のもとに奉公してお夏とO・Kになる。

主人がけしからぬとつむじを曲げる。清十郎がムカついて主人を傷つけ死にいたらしめる。室津から船で遁げたといひ、追手につかまつて殺されたともいふ。イヤイヤ主人を傷けたのではない、二人の仲を割きにかかつた戀敵である番頭の與茂七との格闘となり、與茂七が足踏みすべらして命を落とす。清十郎はお夏と大阪へ落ちのび、捕へられて町中引廻し獄門になる、そこでお夏の狂亂になつたのだともいふ。

清十郎の家のあとが残つてもあるのかと聞くと、代はかはつてますが家は昔のままですといふ。それについても思ひ出されるは和泉の國のお夏清十郎物語である。一二年前泉州水間みづまの觀音さまに御詣りすると、そこにお夏清十郎の墓がある。姫路からここへ遁げのびたのかいなあとた

づねたら、イヤここの清十郎は紀州の武士であり、お夏はこの町の生れで家も昔のままに残つてゐる。今の婆さんはその何代目かの嫁にあたります。代々みな別嬪べっぴんでしてなあといふ。

そこでわざわざそのお夏の家なるものをたづねても見た。お婆さんにも逢つて見た。何分七十何歳といふのだから、若い時にどの程度のシャンであつたのか一寸見當けんたうがつかかねた。さてそのお夏であるが、岸和田のお殿様のお目にとまりお城へお呼び出しになる。清十郎の身になるとまさしく一生の別れになる。我慢ができぬといふので、岸和田のお城へかつがれてゆくお夏の駕を途中に擁し、お夏を殺しおのれも自害したといふのである。

ここに於て水間にはお夏清十郎の墓がありお夏の家がある。姫路には清十郎の墓があり、室津に清十郎の家がある。二組のお夏清十郎があるといふことになる。一つは、

向ふ通るは清十郎ぢやないか

笠が見えます菅笠が

といふ俚諺によりて知られ、一つは、

お前一人は殺しはせぬよ

どうせ死ぬなら二人づれ

といふ俚諺によりてうはさが残されてゐる。

四 室津の遊女屋

話がお夏清十郎へ飛んでしまつたが、室津の港は江口の妙と西行法師といふやうに室君と性空上人とのエピソードを残してゐる。つまり室君も佛果を得て往生をとげたらしいが精しい事は分らない。はつきり分つてゐるのはその室津の昔にくらべ今のさびれ方である。それでも昇榮、金勢、愛榮と三軒、昔ながらの古色蒼然たる遊女屋がならんでゐる。遊女通計二十八人なり。家は古色でも遊女はモダンである。晝蘭けし頃であつたが、門邊に三々五々立てるあり、うづくまれるあり、油を賣つて御座る。あらい縞のどてらのやうなものをつけてゐるのもあれば、アツパツパ然たるものを一着に及んでゐるものもある。いづれも斷髪だから物凄しい。やり手兼客引のをばさんが戸口に腰かけて毛糸を編んでゐる。狭い往來を室の明神へと志す我等の一行を上目に見たが、一行の案内に町長さんが見えてゐる。これはアカンと眼を毛糸の針に落としてゐる。晝の室津の町は静寂そのものである。

それにしても、交通の要路からはなれた室の港に、今日なほ三十人近い遊女のあるこそ不審なれとたづねると、この近所近在から遊びにくる、姫路からも見えるといふ。いかさま路のりは七里なれど七十錢のバス代を拂へば、室津通ひもあまり苦にならぬらしい。室津は安直でしかも情がこまやかであるぞよといふことである。

五 加茂明神

室の港の灣口へ突き出たる明神山の岩角の上が、室明神の境内になつてゐる。加茂別雷外二神がまつられてゐる、謡曲で有名な賀茂明神である。家島群島を眼の前に、はるかに小豆島一帯のながめが一望のうちにある。境内の一角斷崖にのぞめる長風閣の欄により、室の港の昔語りを聴きつつ、瀬戸の内海の風光を飽かずながめてゐる。

初秋の澄みきはまりし風ぎの日であつた。發動汽船の音はなみよるふ島々にこだまして近づきつつある。島影より小さな汽船は二艘の大きな漁船をうしろに引つ張つてゐる。大漁の旗が二振りづつみよしになびいてゐる。ともものあたりに漁師がむれてゐるが、その聲高い音が交つて聞えてきたとおもふまに、船は灣頭へと影をかくしてしまふ。大漁祝ひにこよひは金勢樓あたりへ發展するのかどうか、そのへんのところは分らない。

晚餐會に引つづいての講演に間に合はさねばならぬと、心せかれて一行は又自動車を網干へむけ走らせる。昔ながらの室の港をあとに、七曲りを右へ左へ、涙地藏へ砂ほこりをあびせつつ。

観光道路への期待

歐洲の多くの國は、特にドイツとイタリーは、自動車道路に力こぶを入れてゐる。それは一面には失業救済の對策であり、一面には産業開發の爲めであり、さらに觀光客誘致といふ點に重きをおいてゐる爲めである。

だから道路も只最短距離に、時間を最短時間にといふのではない。先づ風光のよろしい地點にルートを取り、成るべく切りとりヤトンネルなど眠さはりな道筋はさける。その上にレベルクロッシングを少なくし、時間の節約の外にゴーストツプの爲めの自動車路ドライブの快感ぶちこはしをしないやうにする。まあさうした方針であるらしい。

それで今日日本で観光道路らしい道路があるかといふと甚だ貧弱である。吾等は先づ東海道の幹線を中心に、山陽に九州又東北に信越に、産業と交通を本旨とした大きな立派なドライブ・ウェイの完成をのぞむ。これから京阪神及び東京を中心としたそのトランクラインに連絡すべき觀光道路につき卓見をのべて見る。

一 京阪神を中心にして

京阪神は地勢上スケールは小さくなるが、そこに歴史的な人爲的な背景があまりに豊富である。それで先づ京都から大津に出て、あの琵琶湖を一週するドライブ・ウェイが出来なくてはならず、又現に問題になつてゐる、いやもう出来上つたはずである。

次には奈良から京都大阪和歌山へのドライブ・ウェイの完成があまりにもおくれでゐる。一面に名古屋から神都へ、又神都から大阪へ熊野へ、一面に和歌山から熊野へ、又熊野から十津川なり北上の峡谷に沿うて奈良へ、さうしたドライブ・ウェイの連絡がのぞましい。

尙神都と熊野の連絡には志摩の海岸を縫ふ事も、大杉谷から大臺原山麓に沿ひ北上峡谷へといふルートも考へられる。

二 東京を中心にして

東京を中心にした觀光ドライブ・ウェイには、日本アルプス一帯の山岳地帯はしばらくおいて、先づ西は静岡、東は白河、共に鐵路の里程が約百八十キロであるが、東京をカナメとして静岡から白河まで百八十キロ半徑のローカスにて大きな扇面をふがいて見たい。

西には先づ三國一の富士山がある。この山麓のドライブ・ウェイは貧弱ながら出来つつあるが、

まだ大宮と御殿場方面が結ばれてゐない。山麓が一周されてゐないのである。精進本栖と下部身延間及び河口と甲府間の道路は開通されるとの事であるが、河口甲府間の道路には三坂峠がある、此の三坂峠のながめは恐らく富士百景中の白眉であらう。

富士箱根国立公園ともなつてゐるのであるから、富士中心として道路の外にホテルからその他あらゆる設備を通じ、ここに日本一国立公園の見本をつくらねばならない。その上に僕のプランとしてはこの一帯と奥日光とを連絡して見たいのである。

先づ甲府から八ツ岳山麓に出る。佐久の一帯をぬけて輕井澤につなぐ。あれから淺間山麓を走りて草津四萬など奥利根の温泉郷を縫ひ沼田に出る。丸沼から菅沼奥日光に出で、さらに鬼怒川、鹽原、那須の温泉郷を横ざまにつないだあたりで東北本線に合流する。尙東北線から水戸大洗鹿島から房總半島周遊のルートも出来るだらう。

此の扇面のルートに派生して西には富士から箱根十國峠、さらに伊豆半島の海岸を縫ひ、……この西海岸石廊から仁科へかけての海岸線は素敵である……一度本線にいで、さらに久能山清見瀉方面にドライブする。又東には今、福島から高湯あれから吾妻、盤梯の高原を縫うて若松への道路がつくられつつある。さらに若松から尾瀨沼へ出て沼田へつなぐのも、猪苗代湖から郡山また那須へむすぶのも一案であらう。

只筆にし口にするのは樂なものだが、そんな大ゲサなどいふやうな時代はもうすぎ去つたと

思つてゐる。只來るべきオリムピックまでに完成は難しいかも知れない。しかし奈良又は大阪中心の星狀線、富士箱根公園の完成、淺間と日光の連絡、その位の道路はやつてのけてほしい。もちろん道路といつても只自動車のはしりさへすれば、砂煙りはあげ次第といふ道路ではない。向ふから一臺見える。徐行したり、停止したり、あとすさりしたりする道路ではない。

(一一、八、三〇。海南莊。『風景』一〇月號)

ライン河やスキスのところどころの湖上の船の旅をせるものは、早くあしたものが瀬戸内海になればならぬと思ふであらう。伊豆の海岸を縫うてほしいと思ふであらう。デッキの上に安樂椅子によりながら音楽のしらべを聞きつつ、白雪の影を湖上に浸せるアルプスの山々を仰ぎ、船のあとをしたひむれ飛ぶ鷗の群をながめ、無心になつてゐた旅心はいまだに忘れぬ。

熱海ホテルのある朝

ふらふらと止め度なく無軌道に豊葦原瑞穂の國を荒らしまはつた颯風もどうやら影をひそめ、秋晴れの光のどけき九月極日の朝まだき、熱海ホテルの二階の一室に眠り足りて静かに眼覚める。赤く映えたカーテンをかけた窓の戸を押し開ければ、眞青き海原は鏡の如く、その一ところに初島はくつきりと浮び上つてゐる。

眼の下には海にのぞめる青々と絨毯をひいたやうな芝生のところどころにベンチがある。その一つのベンチに白髪の老人が身ゆるぎもせず海のかなたを飽かず見守つてゐるのが見おろされる。時計は午前六時半を指してゐる。早起の爺さんだなと思ひながら便所にはひる。顔を洗ふ。齒の掃除を終りて再び窓外を見おろせば、舊によりてお爺さんは海のあなたを見つめてゐる。部屋をあとに階下なる温泉にひたる。いい加減に温まつて階上の我部屋にかへる。又氣になつて芝生を見おろせば、お爺さんはもとのままに海のあなたを見つめてゐる。

服装の支度をすませる。朝のトースト、鶏卵、コーヒ、梨、りんごが運ばれてくる。コーヒ

1をすすする。トースト、鶏卵を口にすする。梨をむく。林檎をむく。その間にも氣になり出して時に芝生を見やると、爺さんはさながら石像の如く身ゆるぎもしない。

ああおれも一日でもあのやうなのんびりした氣分でありたい。そして芝生のベンチに腰かけて爺さんと耐久競争でもやつて見たいなあといふ心持になる。しかし今日は東京で朝日新聞社主催の伊藤博文公記念展の開場式がある。八時五十分熱海發上り汽車の時刻も迫つて來た。階下にくだと、今まで二階から見おろしたベンチのお爺さんをレベルに見ることになる。そこへたまに同宿した奈良在住のN君が見える。さういへばあのベンチの石像にさも似た老人は、昨夜N君と球を撞いてゐた老人らしい。

「君あの老人はゆうべ君と球を撞いてゐた人ぢやないか？」

「さうですよ。」

「どうした人かね……今朝六時半頃にあのベンチに腰をかけてるのを見かけたのだが、まだあのまま丸で石像のやうにたじろぎもしないのだが……。」

「あの老人はWといつて横濱で生絲貿易をやつてゐたが、關東の大震火災で身も粉も無くしてから、あとは本國より入金する年金でくらしています。ただぶらぶら旅行をつづけて……。」

「妻君は？」

「亡くなつたらしい。」

「子供は？」

「娘さんが一人あるが、英本國で嫁いでゐます。」

「もういくつだらう？」

「七十六七であつたと思ふ。」

「日本には長いのだらうね？」

「かれこれ四十何年になるらしい。」

「それなら日本語はしゃべれるだらうね？」

「いやほんの片言だけで……今更稽古するのも面倒だといつてる。」

「君はどうして老人を知つてるのかね？」

「奈良に住んでますから顔見知りになつてます。」

「それで一緒に出かけて來たの……。」

「いや老人は此の夏は日光中禪寺に避暑してゐたのが、寒くなつてここへ引越し、そのうち下田あたりを見物して奈良へかへるといつてます。」

「若い時働いて老後の餘生をおくるだけの年金を求めておく、さうして意の向くままに悠々自適してゐるなどは羨ましいね。」

「一時ポンドが七圓代にさがつた時は香港へ遁げてゆきました、昨今爲替關係がよいので日

本で大いにエンヂョイしてゐるのですよ。」

話はこれだけであるが、日本ではいくら年を取つてもいくら精力が衰へても、いかに後進の道を塞ぐにすぎなくとも、椅子にかじりつくのが原則になつてをり、又椅子をはなれると平素の心がけがわるく自力ではくらしえない、子供達におんぶする。親族友人などのお世話になる例が多い。又自分で餘生をおくるだけの資力を有してゐても、さて仕事がなくなつて獨りとなる、寥しくて仕方がない、子や孫の中へ割り込んで愚痴つたり屁講釋をいつたり五月蠅がられる例は少くない。今W老人の話聞いて、それからそれと思ひめぐらせば、歐洲留學中にもよくW氏に似た生活を送つた老人達が、少からず淡い記憶によみがへつてくる。

七十餘歳の孤獨の老軀を擁し、語も自由に通じない極東の天地に、誰にも迷惑をかけない誰の世話にもならない、靜かに白雲の去來をながめつつ漂然として餘生を逐うてゆく。おもしろいなあと思ふ。

ホテルの玄関に迎への自動車が來た。N君にわかれを告げて車中の人となる。氣になつて又車の窓からながめると、青海原をバックにした白髪の老人は、まだもとのままだに石像の如く芝生の上に浮んでゐる。(これは一〇年一〇月頃の筆と思ふ。『モダン日本』)

信太山

此の夏は關東に那須の高原を、關西に信太山をたづねた。温泉めぐりでもなく、さりとして殺生石や信太の狐たちの故事をたづねる爲めでもなく、ゴルフをプレイする爲めに出かけたのであつた。

ゴルフは十數町歩の地積を必要とする。だから宅地畑を潰してゴルフ場にできぬ事はないが、ソロバンがとれない。その上ゴルフは都會の空氣からはなれて自然の風光をたのしむ。殊にノッペラポーの平地よりも、川あり谷あり池あり森あり、地勢の變化に富む事がゴルフのプレイから見ても好ましい。そこで人跡至らざりし那須の高原、雑木林や池や沼や丘陵の一團である信太山、さうしたところにゴルフ場ができて、そこでボンボン球を打ち出したのだから、これには玉藻前も葛の葉も地下に面喰つて居る事とおもふ。いや吾等同輩も學生時分那須に山登りし温泉めぐりをした時に、他日こんなところでゴルフとかいふものをプレイしようなどは夢想だにも及ばなかつた。

下野の 那須の高原に 古き友と ゴルフを遊ぶ 命なりけり
と歌うたに不思議があらうか。

阿部野の齋場へよく出かけても、阿部野の停留場を上下しても、その邊に晴明の神社もあるなどとは一向に御存じない我黨の士には、信太の森とても恐らくゴルフでもはじまらないと、只阪和電鐵の客となりし時、葛の葉とか信太などいふ停留場の名前を見いでて、アア此處なのかとうなづくだけで、いつも素通りで御無沙汰仕舞ひになるはずであつたと思ふ。しかし信太山のゴルフへでかけるとなると、その道すがら葛の葉稻荷の社頭を前にしては、素通りするのもどうかと思ふ。カーを下りてお詣りする。

球打たまく 信太山への 行きずりに 心ひかれ詣づ 葛の葉稻荷に
葛の葉の 姿見しとふ 井戸により わが顔を我も うつし見にけり
信太山のゴルフ場は筆にしても、それはゴルフアース連の樂屋落ちになつてしまふから、短歌數首をしるしてこれに代へる。たとひゴルフを遊ばずとも、大阪から濱寺から行樂の地としてみなさまに信太山をおすすめする。

しもと結ふ 葛城山を 背向にし 犬鳴牛瀧 檜の尾の山々
森と森の はざまをすきて 遠遠し 淡路島山 かすみたり見ゆ
ところどころ 池なるらしも 初夏の 日ところどころかがよふ 和泉國原

森のはさま 一すぢ長う 水きららに 光り見ゆるは 久米田の池か
信太山 池そひ行くと 珍らしき 鶉の鳴き聲に 足とどめたり
玉飛んで 池を越えたり 松の秀末^{ほすま} かへり見すれば 金剛山はかすむ

〔日本短歌〕一一、一〇月號

關東にくらべて關西は人口は密であるが、ゴルフコースは少い。附近に土地が得られない。地價の高いといふことは見のがせない。近頃男山八幡のうしろ手の藪たみ^{たみ}の土地が候補地になつてゐる。南海線の淡輪の松林の丘では土工にかかつたらし

小夜の中山夜泣石

朝日會館も十周年を迎へるとともに「會館藝術」もはや五周年を迎へることになつた。中村喜庵老の思ひ附ではじめはしたが、どうしたものかうまく育つてくれるとよいがと、懸念をした我等が眼ちがひで、それが朝日會館の宣傳に効果百パーセントであるのみならず、雑誌は雑誌で立派にペイしてゆく、誠に目出度候ひけるのである。

會館の十周年記念に何か筆にしてくれといふ、いはれなくとも筆にせねばならぬ因縁もあるから、ここに當時の思ひ出をあれかこれかと思ひ浮べて見たが、恐らくそれは喜庵老はじめ同人の筆にすべき筋合であつて、あまり樂屋落ちの記事のかさなるのは感心しない。そこで今筆にしようと思つてゐる隨筆の一つをこの方にさしむけることにした。

海道一の大井川、朝顔が見えぬ眼にのび上つたあの大井川の東の岸に、帯祭りで名高い島田の宿、島田鬻發祥^{ゆはつせん}の地である島田の宿がある。

その島田の宿の青年團から講演の申込があつた。

あわただしき　この世をさかり　川止めに

足とどめたる　昔をしのぶ

といふやうな気分も手傳つて、蓮臺渡しのあともさぐつて見たい。殊に大井川の上流千頭へは三十年來遊思がまだ残されてゐる。その又上流に大井川の水電工事が落成せんとしつつある。それも見たい、あれも見たい。更に大井川の西岸金谷の宿から日阪への道すがらなる菊川の里から小夜の中山のあたりをたづねて昔をしのびたい。かたがたよき折とばかり九月のはじめに島田の宿へ出かけた。そこで島田の宿、大井川、小夜の中山と三部作の紀行小品を書くつもりであるが、この一文はその一節である。

前置はかなり長いが中味はそれほどのものでない。

島田の宿から大井川をへだてた金谷の驛からすぐ長いトンネルがある。そこには静岡縣では茶園の代表的案内所になつてゐる牧野原、舊幕臣新富組開墾の歴史を持つてゐる牧野原、東西二里南北七里の高原で眺望も大きい。御駐輦のあともある。その牧野原の下つ腹をつきぬけてゐる。この牧野原の高臺をぬけてから小夜の中山への谷あひに二三十戸の小部落がある、それが菊川の里である。

承久の亂に囚はれて東に下つた藤原宗行卿が、

昔南陽懸菊水　汲下流而延齡

今東海之菊水　宿西岸而亡命

と吟ぜしあとであり、次いで後醍醐天皇の御宇に藤原俊基卿が、

いにしへも　かかるためしを　菊川の

同じ流れに　身をやしづめん

とよみしあとである。菊川は溝のやうな小川であるが、新國道はこの小川を渡りいくばくもなく小夜の中山をのぼる。

小夜の中山は箱根、鈴鹿とならべて三つの難所にかぞへられてゐるが、見たところさう高い峻しい山とも見えない。しかし實朝卿は、

東路の　さよの中山　こえいなば

いとど都は　遠ざかりなむ

また西行法師は、

年たけて　また越ゆべしと　思ひきや

命なりけり　小夜の中山

とよんでゐるから昔はかなり難所であり、川の關所大井川もあり、さなきだに旅愁を催した處で

もあらう。その小夜の中山はまた夜泣石の傳説で知られてゐる。

それでは夜泣石のいはれはといふと、恐らく多くはよくは知らないと思ふが、傳説によると昔その昔奈良朝時代の事である。お石といふ女が姉の爲に金谷へ金を借りての歸り道に、この中山の峠で強盜に腹を切られて殺された。臨月であつたので子供が生れたといふか、ハミ出たといふか、そのときに子を思ふ母の一念が、そばにあつた石にのりうつつて大きな泣聲を立てつづける。中山のいただきの久延寺の坊さんはこの聲を聞きつけてかけつける。その赤ん坊を寺へ引取る。水飴で育てあげる。そこで名物峠茶屋の子育館が評判になる。

新國道のそばに引越した館うる家の前にて車を下り、登ること一丁にして舊國道なる夜泣石の前に出る。直徑凡そ四尺の圓い石である。表面に南無阿彌陀の五字が刻まれてある。弘法大師御巡錫の折、この話を御聞きになり、一夜ひそかに石におかきになつたが、佛といふ字をかかうとして夜が明けたから、五字だけしか残つてゐないといふ。

弘法大師が書かれたら石がほられたといふそれもよい。南無遍照金剛でなくて南無阿彌陀であつてもそれもよい。何故夜が明けたら書く手を止めてストップになつたのか、そんなこともいづれでもよろしい。夜泣石のいはれ因縁は母性愛の傳説としていかにもおもしろいではないか。

しかし話もそれだけでは結末がつかぬぢやないかといふかも知れない。そこにぬかりのあるべきや、傳説は後日ものがたりとして次の如く傳へてゐる。

一、坊さんはその子の名を音八とつけた。

一、音八成人の後、母の最期の一ぶしじゆうを坊さんから聞く。

一、音八は母の仇討に旅に出る。

一、刀研ぎになつて大和國恩知村研屋源五郎方に身をよせてゐる。

一、或る日旅人が研いでくれと刀を出す。

一、音八がその刃の先のこぼれに見入る。

一、旅人は「それは先年山の中で女を切つたところが、石に切りつけたものだから。」と問はず語りをする。

一、そこで仇とわかつて仇討本望をとげ、目出度し目出度しといふことになる。

夜泣石にもそのときの刃先のため缺けたところもあるといふから、石が泣いたのは痛かつたからかも知れない。それにしても石が泣くとはをかしいですねと半疊を入れるものがある。

傳説だからよいではないか。芭蕉の羽前山寺でよんだ句には「石にしみ入る蟬の聲」といふのがある、蟬の聲が石にしみ入るのだから、石の方からも聲が出ないと、時節柄バーターの上から見ても釣合がとれないのである。

それにしても何十年かすぎて刀をとぎにくる、その時間はす語りにしても、なにもわざわざ山の中で弱い女を殺す……強い男を殺したなら自慢にもなるが、女を殺したのだよなどと、ペラペ

ラ口走るには及ばないぢやないかといふ。

よいぢやないか、よくお芝居では、舞臺の眞ん中で見得を切つて、

「うまうまと寶藏へ忍び入り、奪ひ取つたるラヂューム百キログラム、これさへあれば大願成就、帝大の醫學部へ持つてゆけば、褒美の金は望み次第、人目にかからぬその内にちつとも早くオオさうだ。」

と大聲をあげる。大聲をあげるから、うしろから「曲者待つた。」といふかけ聲のキツカケもできる。だまつてゐては夜泣石物語の始末がつかない。さうでもせぬと仇討にならないぢやないか。

このあたりには夜泣松、妊婦塚、子育て觀音、久延寺等々の名所もあるが、もう島田町の歡迎會の時刻がさし迫つて來てゐる。小さい木のひらの先に巻きつけた子育ての飴をシャブリながら、菊川から牧野原、金谷の町をぬけて、その昔越すに越されなかつた大井川にかかつてゐる鐵橋の上を自動車で一氣に越す。

これで夜泣石の話は終りである。他愛もない紀行の一節である。この一文は別に朝日會館の記念催物の演出物にしたならばといふわけでもない。しかし母子愛の傳説としては夜泣石はまことにゆかしいものである。兒童劇には好い資料である、或はそんなじよそこらでもう劇になつたことがあるかも知れない。(一一、九、一二。お茶の水。『會館藝術』一〇月號)

大井川と島田の宿

一 大井川の卷

大井川といふとなんとなく男性的な豪宕な氣分が聯想される。芭蕉の、

五月雨の雲吹きおとせ大井川

の句が廣く知られてゐるが、『朝顔日記』では、

海道一の大井川しのを亂して降る雨の

などといつてゐる。海道一といふのは何が一なのか分らないが、川の長さならば天龍や富士川はすつと長い。大井川は甲信の境赤石嶽に源を發し靜岡縣内を流れてゐるにすぎない。大井川の海道一といはれるのは、

箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川

といふ馬子唄にもある如くに、川の關所であつたからでもあらう。

江戸幕府が渡船架橋を禁じたる徒歩^{ちほ}涉の川には草津、瀬戸、安倍、興津、酒匂等があつたが、

さうした中では大井川が一番長く大きい。大井川は氣まぐれな川であり、怒りつばい。折々豪雨
いたりて川留となる、攻防共に天險を利用せる要害であつた。橋は架けられないのではない、架
けさせなかつた。江戸を守る第一線が箱根である。駿府の西の方大井川は第二線としてあつた。

これは眞否はさだかでないが、「寛永三年七月十九日家光上洛のみぎり、東海道中の諸大名城
主領主、いづれも道路を修し驛館を經營し巖石を埋め架橋を新たにせるが、駿遠の大守忠長卿は
さしもの早瀬大井川に浮船を渡し、平地の往來の如くにたやすくかまへられ、供奉のともがらも
忠長卿の巧智を感じざるものなかりしが、車駕この橋にのぞませ玉ひ、家光の御氣色以ての外に
變らせ玉ひ、それ箱根大井の兩險は關東第一の要衝なりと、神祖にも今の御所にも常に仰せら
るる所なるに、かく浮橋を渡し諸人往來の自由を得せしむること言語道斷の所爲なりとて、御憤
り大方ならず、後年駿河殿罪を蒙りしも此の時の事より起りしとぞ」と傳へられてゐる。これは
一の挿話にすぎないが、もともと家光と忠長とはそりが合はない。此の時の事が罪を蒙りし原因
となつたのではなく、罪となすべくかかる事が算へ立てられたのであらう。いづれにしても交通
を便利にするなどとは言語道斷だといふのであるから振つてゐる。

さうしたわさわさ天險本位にしてゐる大井川であるから、林道春の『丙辰紀行』には、

「されば古へより徒扛輿梁もなりがたき故に、往來の人馬川の瀬を知らざれば、金谷に待つ
もあり島田に留るもあり、渡りかかりて溺るるもあり、辛うじて向ひの岸に到るもあり。」

と記してある如く、當時諸人の難澁は想像にあまりがあつた。

正徳のはじめ蓮臺五百挺、川越人足四百八十二人、脇越も法度、宵六つすぎの川越も法度にな
つてゐる。だから東海道五十三次の中でも金谷と島田とは泊りが多くなる。ことに常水二尺五
寸より二尺増水し、四尺五寸までは人馬を渡したが、それ以上は御狀箱（今の公文書）以外は凡
て交通を斷ち川留となつた。

淺き瀬を我に教へよ燕子花

それは川留の無聊と焦躁にかこつた嵐雪の句である。曲亭馬琴の『壬戌羈旅漫録』には、島田
の川留と題して次の如くしるしてある。

「連日の雨に大井川往來なければ、岡部より島田の間に諸侯みちみちていと賑へり。予は二十日
の夕島田に入る。予のしれる因幡屋でふ家も森侯（淺野の後をうけし赤穂城主ならん）の本陣と
なりぬ。この家旅店にあらねど富めるものなればかくの如し。よりて因幡屋の向ひ何がし源六と
かいへる商人の家に逗留す。時々の飲食は因幡屋より持來りて饗應しぬ。夜中驛中の繁昌小人の
小うたなどしばらく江戸に在るが如し。川は十五日より二十二日にいたりはじめ明きぬ。」

妹がゆふ島田の驛にとめられてかみへゆききのとどかぬぞうき」

この一節を見ても、川留の有様が窺はれる。だから川明けとなれば東西六百五十人づつの川越
が總出になる。人の聲、川波の音、東から西から大井川も人馬や蓮臺でうづまり、後から後から

つづく人波になみなみならぬ混雑を來たしたらしい。それが爲めでもあらうか享和三年四月からは一日に三大名以上の渡渉を制する旨達しられた。されば川留の折は大名は順次に途中の驛にさし控へて宿泊した。

とにかく一番長い川留は二十八日間であつたといふのだから一寸一月である。川留のつれづれも、川明けの混雑さもまさまさと眼に見るやうである。

二 島田の宿の巻

大井川と島田の宿。そこに江戸時代をしのぶなものがありさうに遊思をそそるものがある。ことに大井川上流千頭へは三十年前から知人の案内をうけてゐた。今大井川水電の工事もある歩を進めてゐる。金谷の宿に近く小夜の中山がある。かたがた島田の青年團より時局講演をと申出ありしを幸ひに此の夏東上の折り島田に立ちよつた。島田は急行車が止まらない。それも夜中に通過する。だから大阪發の夜行汽車の一番遅いのをえらぶ。それでも濱松で下車して乗りかへたのではまだ早すぎる。御といねいに静岡まで乗り越し下車してさらに下りの普通車にのると朝しかるべき時刻に島田に下車する。大井川の上流千頭の奥なる寸又支流の水電取入口まで往復する。小夜の中山を見物する。終りて島田の歓迎會にのぞむ。講演を試みる。さて翌日東京へといそぐが、今度は上り列車を待つとして、またさうさう夜中まで土地の人々に迷惑はかけられない。

夜然るべき時刻に今度は先づ下り普通車にのり濱松に下車し、さらに上りの急行にのりかへる。朝早くにはや身は又東都の人となつてゐる。一世紀前の道中にくらべて、そこにあまりにも大きなへだたりがあるではないか。

島田の宿ではもう昔の本陣のあとも影も無い。昔の宿場の面影も無い。僕は熱海にお宮貫一の記念碑が建つてゐるから、島田には朝顔の記念碑もあつてよいではないかといふと、そこには如才はありません、大井川の岸に朝顔の松といふ碑が建ててあるといふ。いかさま建ててある。この處で徳右衛門の生血を飲み、眼が明く、はじめて眼にうつたのがこの松でありますといふ。僕はこの松もさう古くはないやうだ。眼が明いてはじめて見えたのはこの松でありますといふより、この松の下で眼が明いたといふ方が通りがよい、分りがよいなあといつた。

朝顔の松の次には吉三地藏を見せようといふ。八百屋お七でおなじみの吉三である。お七が亡くなつてからふらふらとお七の幻を逐うてここまで來たが、たうとうこの川岸で戀にやつれて亡くなつたといふ。數年前の旅に作州津山でお七の振袖の遺跡といふのを聞かされた事がある。作州津山にお七の振袖あり、駿州島田に吉三の地藏ある。なんの不思議かあらんやである。

吉三地藏の代りといつては失禮だが、氏神大井神社にお詣りした。東海第一と自稱する帯まつりで名が高い。この帯まつりと、島田髻についてはかなり筆にする事が多い。

島田には大島田、やつし島田、しめつけ島田、投島田、辰松島田、抜け島田、腰折島田、きり

すみ島田、かしまや島田、さえだ島田、小萬島田、高島田、女夫島田、結綿島田等々の數々がある。ここにそれを一々繪ときしようといふのではない。島田齣の名の起りには音韻説、人名説、地名説がある。地名説を唱ふるものはこの島田の宿から起つたといふのである。くはしくは又別に筆にする時があらうと思ふ。

大井川は夜行列車で夢中で通過する。晝の特急でもこのあたりでは退屈してひるねをしたがる。その大井川のあたりへたまには一度下車して昔をしのぶもよい。島田の宿と小夜の中山と大井川鐵道による上流の探勝、それは一日又は二日の旅にふさはしい。(旅二一、二月號)

琉球と大阪

(砂糖の縁起物語)

昭和十一年十月十日、朝日會館開館十周年記念講演會にて

一小引

私は七日から播州の網干^{あみま}、室津、赤穂方面にまわりました。食事をするとすぐ講演、食事をするとすぐ自動車、といふので腹をこはす。歸るとまた噓の連發、水洩が出つづけです。今晚の講演がありますから、昨日から今日もずつと醫者のいふ通り床に引こもり吸入を續けてをつたのでありますが、外出はよくないといふ。よくないといふけれども、私は出かけた。琉球と大阪といふ題であるが、どんなことをいふか知らん、聞いて見ようといふ方もありませうし、又沖繩縣の方は可なり大阪に多いのですから、自分達の故郷のことをどう話をするか知らんといふのでお見えにもなつてをらうから、多少無理をしても出て見たい。まして、この會館は私には縁が深過ぎて、開館の時以來この壇上に何十回立つたか知れない。それでみなさまもお聞き苦しからう。

又私もいひ苦しいが暫く御辛抱を願ひます。(笑聲)

それから鍋井さんと私と順が振替はりましたが、これは私が風邪を引いてなくても、鍋井さんが真打になるべきで、鍋井さんは漫談家として、話術の方でも誠にその名を賣つてゐる。誤つて繪描になつた。(笑聲)いや、誤つてでなく繪描としてもいいのです。現に鍋井君の繪を私の家では食堂にかけてある位で、繪としても名高いが、話の方も非常にうまいので、まア鍋井君の極めて寛いだ、面白いお話を後でたつぷりお聴きのほどを願つておきます。

二 産業都市大大阪

で、私がかういふ題を選んだ譯を一寸申したいのでありますが、大體大阪とは、今日世界で十の指を折れば、その中に入る大きな都會であります。併しこの大きな大阪が大都市としての形を揃へてゐるかといふと、私はノーといひたいのであります。言葉を變へると、大阪は産業の都市であります。大阪は經濟の都市であります。だから朝晩お互ひに、朝の電車で顔を合したときには「今日は」といふ代りに「儲かりまつか」といふ。(拍手)さうすると、儲かつてをらうが儲かつてをらなからうが、「とんとあきまへん」(笑聲)といふことになつてゐる。今度は歸りの電車で、皆夕刊を買ひます。夕刊を買うて一の面、二の面をたつたつと驅足でめくつて、最後の四の面に來て、そこでびたつと眼を据ゑる。さうしてあの細かい活字でつめてある相場欄をじっくり

と見つめる。見終ると、それから中へ折りかへして、今度は小説「宮本武藏」を見ることになる。(拍手)もういい加減にお通と武藏を一緒にしてやつていいぢやないかといふ心持で読んでしまふと、ばつと捨ててしまふといふのが、大體のプログラムである。

三 朝日會館存在の理由

さういふ物質的の、産業的の大阪に、私は朝日會館といふものは誠に取合せのいい、味のいい設備であつて、どうしても人間の生活、都市の生活には堅いものばかりぢやいけない。取合せがなければならぬ。無論大阪には千日前も、道頓堀もある、活動でも芝居でもなんでもやつてをります。併し私のいふ劇といふものは、見物が赤ん坊を連れて來て泣かして見たり、子供を連れて來てひよひよひ飛び歩かしたり、おちよぼが幕の開いてゐる間でも、見物の席を跨いで、座蒲團を運んだり、お辨當を運んだり、お壽司を運んだり、ビール、サイダー、ラムネ、徳利等を運ぶ。お客も心得たもので煙草のみ乍ら舞臺を尻にして「ま、一杯やらんか」なんて小酒盛りをやる。(笑聲)ああいふ芝居風景ぢやない、極めて新しい研究、極めて熱のある研究、眞面目な研究を、それがいいとかわるゝとか、出來不出來は別として、出演するものも眞剣にやる、その眞剣さを買うて眞面目に見てやる、理解してやる、さういふ觀衆のために朝日會館は内地の劇にしても、或は築地小劇場といはず、或は前進座といはず、その他幾多の新しい研究的の眞面目な劇

をここに紹介した。それを諸君も見てくれた。殊に外國の舞踊であるとか音楽であるとか、その他幾多新しい試みを、この會館が過去十年の間に随分皆様に御紹介をした。さうした點から見ても會館は可なりの奉仕をしてゐる。併し私にはしむれば、朝日會館はそれだけではなくて、まだ特殊の役目を果してきた。それはどういふことかといへば、今日のこの講演會の催しの如きはそれでありませぬ。政談演説でもなければ、というて學者の研究發表でもない。趣味ある人たちが靜かに寛いで、和やかに講演を聞きたい。それは卓を叩いて論ずるのぢやない。叱咤するのぢやない。無闇に提燈を持つたり、攻撃をしたりするのぢやない。なごやかな趣味に生きる、講演を聞く場所もほしい。尤も大阪俱樂部であるとか、清交社であるとか、學士會俱樂部であるとか、さうしたところはありますが、主としてそのクラブのメンバーに限られてる。さうぢやなく、廣く一般民衆のためにあつていい。先程中村君が開會の辭に、東朝社の朝日講堂の話がありました。あの講堂が大阪の朝日會館と違つて、催し物の度數が非常に制限されるので、とてもやり切れないのが一つ、それから他に似た講堂も澤山できてきた。そこへ社の事務室が非常に狭くなり、足りなくなつて來たため、旁々とうあれを潰してしまつて事務室に變へましたが、その當時私は多くの人から註文を聞いた。それは自分達は朝日講堂で活動があらうが、講演があらうが、踊があらうが、音楽があらうが、なんであらうが、絶えずこの朝日講堂の一つのファンとして朝日讀者のファン常連となつてゐたから、どうもあれがなくなると非常に淋しいといふやうな嘆聲

であります。恐らくはこの會館に來る諸君の中でも、所謂會館の常連とでもいひますか、會館の催し物はなんであつても出かけて行くといふファンが相當あらうと思ふ。又さういふファンが大阪には澤山なければならぬとおもふ。だからかういふ會館が大阪にはまだ二ツ三ツ四ツ五ツ位あつていい。處がたつた一ヶ所位で、その渴を醫してゐるといふやうなことは大阪の文化の進みはますますおそくなりませぬ。

今日の琉球と大阪といふお話も實は琉球見物をすませてから一度話をして見たいといふ氣持を持ち、又それを話すなれば朝日會館のやうなところといふ心持であつたのでありますが、それがすつと持ちになつて、殆んど忘れられてをつたのであります。偶々十周年の記念になつたから、他の話される顔觸れを見ても、題目を見ても、大體藝術の話が中心になつてゐますから、この上私が申添へるのも如何なものかと思ひ、私はこの持ちになつてゐる琉球と大阪といふ話をここに演題にしました。これまでが前置で、とても長々しいだけに中味は至つて短かい。(笑聲)

四 お砂糖と鑑眞和尚

琉球と大阪といふのは、砂糖のお話であります。甘い砂糖の話です。今回の増税問題で、砂糖消費税がまた上るやうですが、これは大體二割方上つて、一年に三四千萬圓位の増收を計つてをりますから、またお互ひに、高くなる砂糖を舐めることになる。それでは困りますとか、或はフ

ランスが近くフランの切下を行つたために、オランダもギルダの切下を行つた。約三割の切下でオランダのギルダの値が三割方下つた。百斤について一圓位値が下るから、それ丈日本の砂糖と競争に有利となる。だから内地の製糖會社にこたへるとか、そんな經濟問題を、朝日會館の十周年記念にやらうとは思ひませぬ。この大阪には砂糖の取引所といふのがある。これは珍らしい取引所でありますが、なんでそんな取引所が出来たかといふと、これは大阪に砂糖の商人が多いからであり、なぜ大阪に砂糖の商人が多いかといへば、大阪は砂糖の大きな集散地である。それではどこから砂糖が来るかといへば、今日外からも來ますが、臺灣の砂糖が主になつてをります。併しさらにさかのばればその起りは琉球から來たのであります。その砂糖のいはれ因縁のお話をするのであります。砂糖はおもにあの甘蔗からとります。甘蔗は印度がおこりで、西の方はヨーロッパにのびてゆき、東の方は支那からさらに日本に入つて來ました。最初は奈良朝のとき、唐招提寺といつて、藥師寺と並んで古い寺がありますが、あの唐招提寺の開山の支那の坊さん鑑眞、がんと讀むのださうです、この鑑眞といふ唐招提寺の開祖が、支那から初めて砂糖を日本に持つて來た。その後弘法大師が持つて來た記録があります。その時分には砂糖は誠に珍重されました。昔は或は飴、或は甘酒、或は柿といふやうなもので甘味をつけてをつたのであります。砂糖がとても珍らしい尊いもので、一般の人は見たこともなかつたやうであります。それがまゝまつて商品として日本へ砂糖が入つて來たのは元祿の頃です。丁度赤穂義士快擧のあつた、あの時

分に砂糖が琉球から入つて來ました。それから内地でも紀州の有田邊り殊に土佐、讃岐、各地で甘蔗を植ゑ始めて、段々砂糖も多くなつて來る。幾分か砂糖が上流社會でなめられるといふ位になつたらしいのであります。

五 支那と琉球との交渉

琉球からどうして砂糖が來たかといふことになりますと、少し琉球のことをお話しなければなりません。琉球は御承知のやうに、臺灣と九州との間に轉々と散らばつた小さい島で、足利時代までは、支那へ貢物をして居ました。その貢物をどういふ道でもつて行くかといふと、沖繩から東風の吹く時に船を仕立て、臺灣の海岸を廻つて、南支那の福州といふところに上陸したのであります。それから長い道程を北支なる今の北平に参ります。それからまた同じ道を戻つて來て、今度は福州から西風の吹く時に琉球にかへります。支那の方からも冊封使といつて、琉球の王様が變ると、新たに琉球の國王に封ずるといふ、丁度豊臣秀吉に汝を大日本國王とするといふ冊封使の文句が朝鮮征伐のおこりでした、ああいふ冊封使が、支那から西風の時をみてやつて來ます。琉球の貢進使が福州で長い間泊つてをりますから、その間に沖繩から、種々の土産をもつて行つて、支那の土産と交換をする。今度は支那の冊封使が沖繩に來た時も、支那の種々の品物を持つて來ては沖繩の品物と換へるといふので、此の機會に交易が行はれる。此の如くにしてなかなか

利益が上りました。

六 日本と支那にはさまれた琉球

丁度慶長の頃であります。徳川の初めに島津が琉球征伐をやりまして琉球に勝つた。その結果琉球國王は江戸表まで朝貢します。今の大島、徳ノ島、永良部などの島々は薩摩藩へ割きとつたのであります。あの奄美大島、徳ノ島、永良部は島津の琉球征伐までは、琉球の一部であつた。琉球討伐後は島津家から絶えず琉球に役人が出ばつてゐます。つまり琉球は一方は島津の御機嫌もとらなければならぬ、また一方支那の御機嫌もとらなければならぬ羽目になりました。今年は支那から冊封使が來るとなると、今の八重山、宮古島など、南の端の島の方で支那の船が見えたといふと、そこそこで烽火を揚げて合圖をする。さうすると、沖繩本島ではそれツといふので、島津の船は皆どんどん東北の方に姿をかくす。日本や島津の臭がしないやうにしてしまふ。さうして冊封使滞在中は大和言葉を使はないやうにする。日本とは何等縁が無かつたといふ顔をしてゐる。冊封使の見える前年あたりから、那覇の近邊で漁りをしない、魚が少くならないやうに、或は木の實をとらない。さうして支那の冊封使を歓迎しましたが、例の貿易では支那から持参の品を否應なく買はせられて、琉球の大衆はあの頭にさしてある銀簪をとりあげられたとさへいはれてゐます。丁度支那が旦那でといつても中々いかついパトロンで、島津の方が情夫といふこと

になつてゐました。(笑聲)ところがこの情夫もなかなか強氣で、情夫金と力はなかりけりといふが、この情夫は力があり過ぎる。この情夫は琉球から支那へ貢物をもつて行くときでも、薩摩のものをウント一緒に積み込まして交易さすから、琉球としてはまことにつらい。琉球の使は交易の中働さばかりしてゐるから利益がうすい。だから今度は、八重山、宮古島などに寄り道をして荷物を途中へ揚げて行くといふやうな術を使ふ。さうすると島津の方でもそれを嗅ぎつけて、荷物の役人がすつかり琉球人の身なりになつて船に乗込んで行くといふやうなことで、琉球の人達は双方の仲にはさまり困つたらしい。よく琉球の人は兩股をかけてる、するいなどといふ人もあるが、それは可哀想な話です。誰だつてあの小さい島で一方には強い島津がある、一方には大きな支那があるんだから仕方がない。日本の内地でも、幕末にはどこの藩でも尊王と佐幕があつた。まだどつちが勝つか分らぬ。意見に於いては尊王を唱へ或は佐幕を是とする人もあらう。お家安泰のためには、今尊王になつて置くがいいか、佐幕になつて置くがいいかといふので、尊王と佐幕の二股をかけたかたちになつたものである。そこで話が又々砂糖に戻ります。

七 儀間眞常と直川智

琉球から福州に交易に行つたときに、今の福州に甘蔗があります。それをもつて歸つて琉球でも甘蔗を植ゑただけけれども、甘蔗は支那から外へは出さない。これは國禁になつてゐる。外へ

持ち出すことができません。沖縄では儀間眞常といふ人がございます。この人は日本の内地品によりて琉球餅をこしらへたり、福州から薩摩薯、薩摩薯といふのは、も一つ前は琉球薯で、その先は矢張り支那薯です、あのさつま薯をもつて來たり、非常に功勞のある偉い人ですが、この儀間眞常が、琉球で甘蔗を始めたのです。それから今の奄美大島につくりはじめた甘蔗もやはり南支那から持つて來たので琉球の分と相前後してきます。文祿、慶長の頃に奄美大島に川智といふ人がをつて、琉球に渡る心算が流されて南支那に漂流しました。その折に歸りに甘蔗を持つて歸らうといふので、非常に苦心をしました。二重底の箱をこしらへて、その板と板との間に土を盛り入れて、甘蔗の根が枯れぬやうにつちかつて歸つた、その二重底の中に三本入れた甘蔗が、琉球一帯の砂糖の今日あるを致した基であります。川智やその子孫が黒砂糖をつくるまでには、その間一方ならぬ苦勞を重ねてゐますが、もう時間がありませぬから、ここでは申しませぬ。

明治十三年にこの大阪で共進會をやりました。その共進會にこの川智の後を繼いでゐる子孫が砂糖を共進會に出してをります。時の内務卿が松方正義、大藏卿が佐野常民、兩名の名でその祖川智に對して生前の功勞を嘉して褒狀が下つてをります。それにはかういふことが書いてある。

「慶長年間支那に漂流難儀の際、よく製糖の術を習ひ、苗を携へて歸り、之を島中に植ゑ、喜界島……俊寛のは鬼の鬼界島と書きますが、大島のは鬼でない喜と書きます、その喜界島

……徳ノ島、大島の絶大なる殖産は實に茲に基とす。その功勞を嘉し、追賞するに金幣壹百兩を以てす。」

といふ褒狀があります。このときと思ひます、儀間眞常にも矢張り琉球で砂糖を作つたといふことにより、同じく褒狀と金二十兩が追賞されてをります。

八 藥種問屋から砂糖問屋

さういふ譯で、南の島で砂糖が出來出した。それを薩摩に貢物として納める。その中薩摩でも甘蔗を植ゑ始める。それから後には紀州、土佐、讃岐この三國でも相當苦勞を重ねてをりますが、その中でも讃岐は御承知の通り非常に水利に乏しく旱天の多い處です。九代將軍のときであります。そのとき高松の藩主松平頼恭が、砂糖を作ることに非常な研究を續けましたが、なかなかものにならない。池田玄丈といふ醫者が十數年この研究にかかり、それでも出來なくつて、たうとう死ぬときに、門人の向山因慶に宿志をつらぬくやう遺言する。因慶遂にこれを完成して、寛政二年には讃岐に砂糖が出來はじめました。讃岐では有名な平賀源内も砂糖を作ることに苦勞してゐます。それから筑前の人で宮崎安貞といふ人も、これは元祿年間のことです、是非日本で砂糖を作らなければ段々國民が砂糖を用ひて來て擴がつて行く、擴がつて行けば外國にそれ丈金が落ちるのだから、是非國內で作らなければならぬといふことを喧しくいつてをります。

以上申上げたやうな次第で、元祿の頃に、大阪へ七八百石積の船が砂糖を積んで入つて來ました。そのときに大阪では藥種問屋が入札をして、砂糖を引請けたのであります。それから毎年毎年砂糖が入つて來るものですから、藥種問屋が苦い薬より甘い砂糖の方がポロイといふので、相次いで砂糖問屋に變つたのであります。(笑聲) 私は別に調べてはをりませぬが、随分大阪には砂糖問屋が古くから澤山にあります。その古い砂糖問屋のそのまた元を質せば藥種問屋であつて、藥屋さんが皆砂糖問屋に變つたのであります。私が琉球と大阪といふやうな題を出すと、どんなことをいふか知らんと思はれたでせうが、つまり一言でいへば、琉球から八百石積の船が砂糖を大阪へ持つて來た、それを大阪の藥種問屋が入札して、その砂糖を引請けた、毎年來るからこの藥屋が砂糖屋に變つた、種をあかせばたつたこれだけの話であります。誠にたわいのない話であります。(笑聲)

九 竹森儀助と新渡戸稻造

それから序でありますから、大島に島司になつた人で、竹森儀助といふ人があります。この人の名も記憶して戴きたい。この人は明治二十五年に千島探検に行つて、その報告書を出した。さうすると、内務卿の井上馨が、竹森に大島、琉球に行けといふことを命じた。何故に命じたかといふと、明治二十五年頃には外國から日本に入つて來る砂糖が、一年に九百萬圓にのぼつた。今

日から見れば纔かのものであります。併し當時の日本の貿易としては九百萬圓の砂糖が、毎年外から入るといふことは由々しいことだから、竹森に南島を視察せよと命じました。竹森儀助は一介の志士であつて、柄にないとして斷つたのであります。品川彌二郎、金原明善など先輩よりも行けといはれるままに、竹森は南島探検をしました。その縁により後に大島の島司になつて大島の砂糖を奨励しました。その後御承知の通り日清戦争の後臺灣が日本に割讓される。臺灣では兒玉總督、後藤民政長官のときに、新渡戸稻造博士が殖産局長となり、臺灣の製糖に力を入れ、今までの黒砂糖を今日の精製白糖にしあげました、その製糖に手をつけるときに大島から多くの人が經驗があるといふので臺灣へ招かれたのでした。

今日では内地だけで人口は三千萬人より六千萬人となり、田舎のすみすみまで白砂糖が舐められるやうになつた。それで皆様にこれだけの話をした私の心持は、一は臺灣が日本の新領土になり、更らに朝鮮が日韓合併になつた。琉球は殆んど皆様から忘れられてゐる。併し週つて見れば、琉球から砂糖と薯が渡來したのである。その砂糖も生優しく出來たものぢやない。その間非常な苦心をかさねて來たのであり、それが大阪に來て藥種問屋の手に渡り、その藥種問屋が砂糖問屋になつたんだ。同時に我々が徳川時代に生れてをれば黒砂糖を舐めようと思つても容易に舐められるものぢやなかつた。それが段々に文化が進んで來ると、世上に行渡つて來て、今日は誰しも當然のやうに砂糖、しかも白砂糖を舐められるやうになつた。それで人間も甘くなつたといふや

うな譯でありまして、これで大概琉球と大阪とまア題した話が先づ終つたのであります。

十 大大阪に缺けしもの 大大阪に求むるもの

今夕私が尙お話をしたかつたことは、今いふやうに大阪は物質的になつてゐる。だから、大都市としてはもう少し種々と色取り配合がされなければならぬ。その一つとして朝日會館もあり、今度出來た天王寺の美術館もあります。併しまだこんなことでは足りない。何故足りないかといふと、御承知の通り大阪は我々浪人の住み難いところであります。つまり大阪では役人を辭め、或は會社を辭めれば皆大概十人が九人、或は十人が十人、東京に流れ込むのであります。何故流れ込むのか、勿論大阪に多少、浪人になつても残つてゐる人もある。私も現に残つてゐる。最近住友の川田順君が半浪人になつた。大阪に踏み止まつて今孤軍奮闘をしてゐます。これはどうしても孤軍であつてはならない。もう少し藝術とか文化、さういふ方の潤ひのある流れも大阪に相當廣く濃く流れなければならぬ。それでないと、幾ら家が大きくても、門があり、玄關があり、寢室もあり、食堂もあり、臺所もあり、便所もあつても、併しそれだけぢやいかん、矢張り一軒の家には客間もなければならぬ、書齋もなければならぬ、庭もなければならぬ。それではどうすればいいか、今大阪に我々はどういふことを註文したいか、今日ここにお集まりの諸君は、私がかく申すとその感を同じくされるのぢやないか、下村の言ふのも尤もぢや、成程さうぢやと共鳴し

て下さる方々と思ふ。私はこの點につきしみじみ實感を深くしつつかある。それでいろいろと考へてゐる。そこに多少の成案も持つてゐる。しかしこの壇上に立つて皆様にお話する時間がない。また別の機會を通じて申上げるが、何れにしてもなんとかこの大大阪といふものを渾然として纏まつたものになりたい、かういふ感を抱いてゐるのであります。これを私は諸君に宿題として、若し同感であつたならば、それぢや大阪でどういふやうな設備をしたらいいか、どうしなければならぬかといふことについて、お考へのことがあれば、お洩らしを願ひたい。またこれからお考へ下さつて、かういふことが面白い、かういふやうにしなければならぬといふお考へがついたなら、どうかお知らせを願ひます。

これで私のお話を終ります。(拍手) (會館藝術 一一、二月號)

大大阪に求むるもの

昨十一年の暮から今春一月へかけて此の演題の下に大阪朝日會館、大阪學士會、大阪俱樂部等に於て話しました。いづれも大同小異であります。この一文はその數回にわたる講演の内容をまとめたものであります。

一 書齋なき大大阪

大大阪に求むるもの、言をかへれば現状から大大阪にどう云ふ點が飽き足りないか、更に完璧を期するには、どう云ふ事を我々は望むべきかと云ふので、みなさまの智慧を借るべく既に數回話したのであります。大阪は現役に居る間は無論居らなければならぬ所であります。同時に現役を去つた時には去らなければならぬ——と云ふといひすぎますが居り難い所であります。諸君の先輩で現役を去つた人達がいくばく大阪に残つて居るか、恐らく甚だ少い事と思ひます。これが私の大大阪に求むるものと云ふ題でお話する動機であります。

私は浪人になる前からこの問題に觸れて居つて、相當意見も云ひ、又當時の柴田知事にも申し出た事があります。此の度浪人になつて見ると、その考へが一層強くなるのであります。

大阪は世界で七番目の人口を持つて居る大都市であります。それだけの大きな都市でありまして、人口と面積に於てはその數字が示す通り群を抜いてゐるのであります。ところがその内容品質に於ては必ずしも十指の中に入らないのであります。どう云ふ點が入らないかと云へば、私に云はしめれば一つの家で例すれば、どんな家でも玄關があるのであります。大阪にも梅田があり、天満、難波があり、阿部野、天六がある。又その家に住んで居る人の働く場所、食事するところ、乃ち事務室、臺所、食堂、寢室、便所などどうしても必要なものは無論備はつて居るのであります。けれども大阪の建物としてその客間に當るもの、書齋に當るものが備はつて居るかと云へば備はつて居らない。歐米人の住家では何よりも頭へつぎ込む食堂である書齋がなければならぬ事になつてゐる。英國では誰の家へ行つても、その書齋を観ると、その家の家風、その家人の趣味風格が判るといはれてます。かつて學友岩永裕吉君の話に、スイスのアルペンクラブに各國のメンバーが、滞在して居る。一週間をすぎてもその人は醫者か辯護士か商賣人か軍人か役人かその人の職業がよく判らない。言ひ換へれば一週間同じホテルに生活して居つても、その人の趣味が廣い、その人の話題が多い、だからどう云ふ職業人か判らないのが英國人だといはれてるさうです。嘗てルーズヴェルトが英國を訪ねた時グレイ卿でしたか、外相と鳥の音を聽かうと約束して、アフリカの虎狩から英國へ渡り、一日森の中におくり、只鳥の話ばかりしたといふ事です。我々はこの世の中に人間と生れ來て、いづれは死ぬのであります。その間ただ官署、會社で仕事

をして居れば良い、かせいで居れば良いと云ふだけであれば、人生の意義は全くないのであります。人間が家族を養ふ爲めに収入を得べく仕事は仕事として大いに活動してよい。又その仕事が奉公の爲めの意義もありません。しかしそれと同時に人間にはフィロソフィーがなければならぬ。趣味がなければならぬ。これが個人の家で云へば書齋に於て現はれる。その書齋が大大阪に全然ないとは云はないが、いかにも貧弱であります。世界で十指に屈しられる大都市として書齋があまりにも貧弱であります。

二 新聞ありて雑誌書冊なき大大阪

これをもう一つ變つた観方から云へば、大阪には新聞がある。毎日我々は新聞を見なければ社會共同生活は送れないといつてよろしいのであります。その新聞の見方にしても、東京の見方と大阪の見方は違ふのであります。大阪の見方は先づ歸りに電車の中で夕刊を手にとると、一の面の二の面の大見出しに眼を通してから裏の四の面をとまる。そして前場がどうなつた、後場がどうなつた。株が上つた下つた、氣配がどうかうだと、讀み難い小さな活字を丹念に見て、後は三の面の宮本武藏を見る事になつてゐる。(笑聲)吾等はニュースを知らなければならぬ。社會生活を送るからには新聞は誰しも愛讀する。いや必讀する。その新聞の發行部数は東京より大阪の方が遙かに多いのであります。『大阪毎日』、『大阪朝日』の二大新聞の如きサーキュレーションあ

るものは東京には無い。何故大阪に大新聞があるかと云ふことにつき私の公けにした『新聞常識』中に詳説してあります。それを説明すると長くなりますから、ここに省略致しますが、もちろんそれは大阪だけの力の新聞ではない。大阪を取圍んで居る堺から和歌山、奈良、岸和田、大津、京都、布施、豊中、尼崎、西宮、神戸から、明石、姫路へかけて市がつながつてゐる。人口が非常に密度を持つてゐる。その上に名古屋一帯から中國九州朝鮮へと大阪の勢力範囲ともいふべきものが、東京のそれに比してさらに廣く又密である。されば大大阪には日本一の新聞、世界で十指を屈する大新聞が二つも出て居るのであります。

それでは雑誌も出て居るか云ふと、出て居ない事はないが、東京とは比較にならぬ。問題にならぬ。出て居らぬとは申しませんが非常に少い。あまりにも少い。私は短歌を少しやつて居りますが、今春或短歌雑誌の示すところでは、短歌雑誌の發行数が東京では五十四に上つて居ります。大阪市ではそれが一つも出て居りませぬ。市外に四つ出て居るにすぎない。京都では六つ、名古屋で七つ、それに對しても大阪は下位にあります。

現役、實用と云ふ上から無くてならぬ新聞は世界でも指を屈するやうなものが二つもあるに拘らず、雑誌となると——『週聞朝日』、『サンデー毎日』などは出て居りますが、然し尠くとも我々お互ひの爲に相當教養になるとか、少し専門がかつたと云ふやうなものになると、殆んど比較にも問題にもならない。それが書冊となると京都の立命館出版部、人文書院などの書冊發行の

廣告を時には新聞紙上で見るやうになりましたが、東京の書店に比較したならばあまりにも微々たるものである。それでは大大阪では本は發行出來ないかと云ふと出せない事はない。私共若い時分大阪の新聞にその頃としては大ふんばつでした、兎屋と駭々堂といふ書店が一頁大の廣告で互ひに競争してゐたが、いづれも大阪の書店であつた。

とに角現在の大大阪は大新聞は出てゐる雑誌や書冊のあまりにも貧弱なる都である。食堂や事務室はあつても客間や書齋に乏しい都といつてよい。此の如き缺陷のあることが、又おのづから大阪に浪人の足を止め得ない一つの理由になつてゐた。現役の時だけはその事務室、工場に通ふべく大阪に足を止めてゐるが、一度び現役を去れば足をとめてをりにくい所になつてゐる。

三 大森林公園を求むる大大阪

苟くも世界で第七番目の人口を抱擁する大大阪を、かうした形のまゝにして置くといふことはいかにも残念な事と思ひます。それでこの前朝日會館の壇上から聴衆諸君に若し御同感ならばどうしたらよいのかといふので意見を求めたのですが、それに對して意見を寄せて下さつた方もありますが、結局私としては、嘗て柴田知事の時分に述べたやうな案を實現して欲しいと思ひつづけてゐます。それは形而上の方の希望でありますが、私は同時に別に形而下の方面では大大阪を健康地とする案も實現してほしいと思ひます。先づその方から申し上げます。私は西宮の苦樂

園に居りますが、あの六甲の山腹から毎朝六ヶ國を一目に見ながら西洋便所へ腰を掛けます。前面大大阪を眼下にながめますと、大阪の上空にはすつかり眞黒な煙霧の帯が横たはり、その上に生駒金剛葛城など連峰の山なみがかすんでゐます。この煙の都大阪の大きな工場では多少共完全燃焼の設備もありませうが、小さい工場又は風呂屋などではさう云ふ設備が不完全である。これには徹底した完全燃焼の勵行と云ふことが考へられます。更に實例で申せば、現に霧の都煙の都ロンドンに近頃完全燃焼によりとても明るくなつて來てゐるのであります。

大大阪にはもとより都市計畫が出來て居りますが、大大阪としてこれを一家にたとへて、いかにも庭が狭いのであります。歐洲ではロンドン、巴里、ベルリンいづれの都市にまゐつても、とても廣大な公園があります。私はかつて白耳義のブルッセル市に一年半ばかり留學致しました。あの人口五十萬そこそこの町の郊外に、大きなテルビューレン公園につづく長い沿道は住宅地域で、しかもみな境界に壁垣はつくらせない、建築も必らずそれぞれ様式をたがへる事になつてゐます。またボアの森林公園には私は恐らく五十回近くも出かけた事と思ひますが、未だ一回もこの公園を通りぬけた事はありません。森林がどこまでもつづいてはてが分らない。かうした鬱蒼たる森林を都會に見出すといふ事はいかにも尊いことと思ひます。東京の芝や上野は樹木は少し茂つてゐても、入口を這入つたと思ふと、すぐ通りぬけになつてしまひます。更に大阪の天王寺中の島などに至りては樹木らしい樹木もない、狭すぎる細すぎる、見通しのきく公園であります。

そこへ煤煙が全市にみなぎつてゐるから、見ただけでも健康都市とは思へない。此の間朝日會館に於ける大原社會問題研究所の東京へ移轉の送別記念の講演會壇上にも、大内兵衛君が大阪の兒童の衛生状態に就いてくはしく報告して居りました。大阪は大きな都市の中で死亡率の高い市であり、殊に子供の死亡率の高い所になつて居ります。私は生駒山方面へかけ又千里山から箕面、山崎、六甲方面へかけ、うんと大きな森林公園をつくるべきであると思ひます。奈良、京都、兵庫へかけ聯合の大公園をつくるべきであります。

四 浪人の目立つ大阪

昨年春私ははからずも一介の浪人となりました。當時、大阪俱樂部で盛大なる慰勞會を開いて戴きました。席上にて誰彼から「下村お前は東京へ行くんぢやない、大阪に残つてをれ。」といはれました。私も残り度い、又そのつもりなればこそ、一千五百坪の土地を苦樂園に求め、身分不相應な家も建ててある。勘定こそまだ済ましては居りませんが、兎に角餘生を送る場所にきめてあります。(笑聲)ところが浪人になつて見ると、私は朝日新聞社に出勤する用はなくなつた。ところが東京には絶えずいろいろ委員會理事會などの寄合がある。殊に耳學問になる會合が多い。それがあらゆる方面に通じていかにも多種多様である。會合する顔觸れも又千差萬別である。時には東京と大阪と地をちがへて同じ人が話す會合もあります。此の程川越駐支大使が一度日本に

歸り更に南京に赴任の時に、大阪に立ち寄り大阪俱樂部でも話をされたさうですが、當時私は東京に居りまして、大使の話を書く會合の案内を四五ヶ所からうけました。その中で私は國際協會の寄合の時に出席しましたが、石井子爵はじめ外務省の先輩から前大臣その他外交の連中が膝をつき合せての寄合であり、相當表裏も心得てゐる間の話し合ひでありますから、話す人の心持も聽く人の心持ちも普通の場合とはちがひます。さらに又さうした實世間の問題の外に、世間離れした寄合も少くありません。さうした寄合は寡聞ながら大阪には木谷蓬吟君の近松研究會などあります。其の種別と數においてこれ又東京とはもとよりくらべものになりません。さうした點から見ても大阪學士會のクラブなどのできたのはおそすぎてる。あのクラブの繁昌してゐるのを見てもいかにさうした氣分に餓えてゐたかといふ事が分ります。しかもその社交クラブにしてが、私が大阪に居るときに大阪俱樂部に行く度數と上京中に日本俱樂部に行く度數を比較すると、どうしても日本俱樂部に行く比率の方が、大阪俱樂部に行く比率よりも多い。なぜかと申しますと、大阪俱樂部を見渡すと現役の人が大多數である。そこへ浪人が這入つて行くと、オオ下村が見えた、氣の毒に未だ浪人をして居ると、まさか口には出させぬが、如何にも浪人下村の居ると云ふことが目立ちます。(笑聲)これは自分の場合ですが、今度は他の浪人の方を見ると……名を指すことはさしひかへますが……如何にもその人が目立つのであります。ところが私が浪人になつて上京する、初めて日本俱樂部の晝の食卓につきますと、眞向ふが南弘君、そこへ柴田善三郎、

土岐嘉平、丸山鶴吉、倉知鐵吉君など、もろもろの浪人ばかり列をつくつてゐる。今度は現役が目立って極りが悪いかとまで見える。詰まり大阪は浪人が無さすぎていけない、東京は浪人が多過ぎていかぬと、かう云ふ結論になります。(大笑)

これを軍人に例をとりましたが大阪には豫備の大將は一人も居らないと思ひます。居れないのであります、東京ならば古いお仲間が幾らでもゐる。碁仲間、釣仲間さては昔語りの僚友が多い。借行社もある。水交社もある。それぞれの社交俱樂部がある。在京の將官は大禮服を着けて自動車につてゐても、平服で電車の釣革にぶらさがつてゐても、いづれにしても目に立たない。大阪ではさうはまわりませぬ。

私はゴルフをやりますが、私は大阪在住人でありながら、横濱の程ヶ谷ゴルフクラブのキャプテンを三年もつづけて居ります。

私は上京中は折々程ヶ谷にウィークデーにまゐりますが、前以て仲間を誘ひ合はしてゆく事はまれである。何日何時出かけてもそこには自分達に似た老體のヨチヨチしたゴルファー、又話の合ふやうな浪人仲間が誰か彼か必ずまゐつて居ります。關西に縁のあつた中では加納友之介、乙部融、野口彌三、大澤佳郎、彌永克巳君など、さうした連中が有り餘る程居ります。別にわざわざ呼び出しをかける必要がありません。ところが茨木となるとウィークデーに不意に出かけても相手は居りませぬ。居らないばかりでなくウィークデーに引張り出さうとしても心當りの人が少

い。浪人が少いのであります。僕としては前京都市長大森吉五郎君一人しか居ない。毎月一回溝口直亮、三木國太郎兩君が日本電力の重役會へ参ります。兩君は手を携へて茨木へ見えます。いつも兩君だけであります。大阪の知人は一處にプレイしたくもできる浪人は居らないのであります。このほどウィークデーに歸阪の朝、あまり天氣がよいので京都驛でのりかへ茨木へ行きます。乙部君が居る。たまたま用が缺けてやつて來たが、どうも相手がなくて一人淋しくして居るところでした。乙部君は御承知と存じますが關西ゴルフファースの大先輩です。乙部君は六甲山上へ籠で通つた人で、故湯川寛吉君はじめ大阪神戸ゴルフ界の古顔は乙部君によりて手ほどきをして貰つた人が多い。長く大阪三菱銀行の支店長もしてゐた。大阪にはゴルフの顔なじみはとて多い。とても多いけれどもその知人は現役だから呼びよせられないのであります。つまり浪人になつても大阪では東京にくらべて仲間が少すぎるため、著しく不便である。いかにも物足りないといふ事になります。

五 知事市長中心になりすぎる大大阪

私は世界第七番目の大都市も浪人、半浪人の住みよい町でありたいと思ひます。人間は物質的に恵まれただけでは眞に恵まれたのではない。だから浪人の住めない都といふ事は、現役唯存、現役専門といふ事になる。東京の大なる所以は現役の知事や市長さらに内閣諸公があるからでは

ない。まだその外に浪人、半浪人がザラに居る。その中には知事や市長や閣僚よりも重きをなせる連中の少くないところに眞價がある。しかるに大阪では絶対に知事市長中心になつてゐる。これは府政や市政ばかりでは無い。あらゆる社交にまでゆき渡つてゐる。元市長の關一君になにが一番つらいか迷惑なのかとたづねたら、毎晩結婚披露へ引つ張り出される事だといつた。いかにも新郎新婦どころか、その両親すらもよく知らない。しかし家門の譽れであるといふので理も非もなく引つ張り出される。そして紋切り形のあいさつを述べさせられる。全くやり切れないといふ事であつた。いかさまあいさつする知事市長もやり切れないが、いつもそのキマリ文句を聞かされる參會者も亦ウンザリさせられる。さうなると東京の知事市長は、そんなツライつとめは少い。どうして市民の多數は誰が市長か知事か名前さへよく御存知ない。特に名前は差控へますが、あの結婚の披露が東京と大阪と兩處で開かれた。東京の時は忙しい中を閣僚の大部來會してゐる。陸海軍の大將や樞府の顧問官なども少くなかつた。しかし來賓のあいさつしたのは三宅雪嶺翁と僕であつた。それは兩人がそれぞれ新郎新婦につきよく知つてゐたからである。しかし同じ披露の宴も大阪へくると市長知事の定規にはめられてしまふ。もし僕の知るかぎり異例を求めたならば嘗て前京都市長大森吉五郎君の婿養子の披露宴であつた。その時は大阪府知事の他に、京都奈良和歌山兵庫三重の六府縣知事夫妻が列席した。大阪としてはまれな會である。しかし來賓のあいさつは僕と東京から見えた新婦の學校の女の先生であつた。それはそれぞれ新郎新婦をよく知

つてゐるからである。これは婚儀の話であるが、その他の宴會もいつも知事市長中心である。此の程大日本紡績の社長が交迭となり、菊池社長が會長に小寺専務が社長へ就任の披露があつた。狂言や踊や餘興も多くとても盛大な催しであつた。その時も卓上來賓のあいさつは知事であり師團長が杯をあげた。この時の吾々は日本の紡績界の今日に至るいばらの途、それを約半世紀踏んで來た菊池恭三翁の奮闘、さうした話を阿部房次郎翁なり然るべき人から願ひたかつた……此の話片は翌日東京にて菊池、阿部兩翁にも親しく話した事であつた……しかし現在の大阪はなにもかも知事市長中心として、あまりにも統制がとれすぎてゐる、あまりにも單調になりすぎてゐる。これを東京の方で見ると、東京では又あまりにも知事や市長を無視してゐる。あまりにも府市政に無關心である。大阪はあまりにも知事や市長を有視しすぎて虐使虐待してゐる。その結果はどうか？ 東京は無關心すぎる結果疑獄の連続になつてゐる。東京市政のよくないといふ原因として、たしかに市民の無關心といふ事は見のがせない。地方では公署などの位置變更となるとかかなり大騒ぎになる。ところが東京では帝都の市役所が丸之内から月島へうつるといつても、丸之内方面の人が反對するのではない。いや東京市民全體がどこを風が吹いてるかといふ態度である。冷淡を通り越してゐる。あまりにも無視しすぎてゐる。

六 湯川、關、武藤、平生、小林

これに反して大阪では一から十まで市長知事が中心になる。中心になりすぎる。それが大阪のレベルを知事市長以下へ押し下げてしまふ氣味にもなる。此のほど日本クラブの食卓で町田忠治君に話したらいや大阪では社交といふ事は求められない。僕の頃は折々花外で寄合をやつたよといふ。原敬、中橋徳五郎、片岡直温、片岡直輝、鶴原定吉、土居通夫、曰く誰曰く誰と名をあげてゐたが、それは巨頭連の社交の話である。とにかくさうした名前を聞いても、昔は大阪にも相當な顔ぶれが見えたのである。それが大大阪になると次第にレベルが低くなつてくるやうに見えるのは、自分が年をとつて見る目がかはつて來たのか、いづれにしても今日は大阪の人口は増しても中味はこれに伴はない嫌ひがある。さうした氣持からいふと住友の総理事をやめられた湯川寛吉君は貴族院議員として又茨木ゴルフクラブのプレジデントとして、誠に大阪に於ける浪人として尊い存在であつたが、不幸にして間もなく長逝された。又關君は永く市政に従事し助役として市長としてあれだけ大阪の市政に盡し、近く市長の職も圓滿に辭する事になつてゐた。吾々は貴族院議員として法學博士として、大阪市政の元老として、市長引退後の關君を大阪の尊い存在と期待してゐたが、不幸にして在職中長逝された。その他、武藤山治君は、『時事新報』經營の爲めに上京された。平生夙三郎君は文部大臣となり上京された。平生君は甲南の幼稚園小學校高

等學校と可愛い子孫會孫を持つてゐるから、文相をやめても大阪へかへると思ひますが、或は君も東京に持つてゆかれはせぬかと懸念される。小林一三君も東京實業界に進出し、東都の電力界と演藝界へ足をまたげて活躍をつづけてゐる。私は小林君は實業界よりも藝術界により尊い存在としてながめてゐる。それだけにどうやら東京の人になるのではないかと思ふ。仕事の爲めに大阪をはなれる事は已むを得ぬとしても、大大阪の天地に人間の拂底をつげる事は悲しい。浪人の居られない事は淋しい事である。

私も遠からず東京に居を移す事になりました。それは最近貴族院議員を拜命したからではありません。浪人になつても東京に雑用が多い。というて今の苦樂園と東京と兩建の生活は浪人の生活としては許されません。もともと私の故郷は紀州で、遞信省と臺灣の生活をへて朝日新聞社に入り、大正十年から私は大阪を墳墓の地と決め、六甲の山腹に海南莊をいとなみました。だから私の大阪への執着は轉居位でぬけきれませぬ。たとへ東京へ轉居しましても、月に一度か二度、何かの用事をつくつてもらふ、紐をつけてもらつて大阪へくる。さうして皆さんとお目にかかる機會を作つてほしい。これが今の私の心境であります。だから私は「大大阪を去るの辭」といはず「大大阪に求むるもの」として、みなさまのお耳をかりる事になつたのであります。

七 法文科大学を求むる大大阪

話が戻りまして形而上にいかなる施設を大阪でやつたら良いのかと申しますと、私は醫科大学に理工科を増設すると云ふ外に、文科、法科、経済科、農科をも増設しなければならぬ、文科を作らなければならぬ、法科も作らなければならぬと云ふことを提唱する者であります。中には近く京都に法文科などがあるのに可笑しいではないかといふかも知れない。それならば既に醫科理工科のあるものをかしい事になる。もともと経済に至りては、産業都市の大大阪として第一に設立されてあらねばならない。法科の方にしても大阪には控訴院もある。殊に商法関係となれば各銀行會社も多い。幾多の實際問題が起る。あたかも工場が到るところにあるから、工場と研究室のコンビになる事が工科大学として望ましいと同じ事である。更に文科に至りては大阪に昔は縁がありすぎた。少くとも今では縁がないと云へばそれまでですが、私はその縁の無い事が却つて必要を促してゐるといひたいのであります。あまりにも煙にとち込められ、現實の産業萬能に片よりすぎてゐる大大阪なるが故に、文科大学ができて、國史、國語、國文、漢文、英獨佛文學、支那語學、サンスクリット、言語學、哲學、考古學、地理學、心理學、倫理學、教育學、宗教學、社會學、佛教學、基督教學、東洋史、西洋史、美學、美術史等の諸學科が設けられて、さうした方面の空氣も大阪の町に展開されたいのであります。恰かも客間があり書齋があり應接間があり

額物もかかつてる。床の間に軸物生花も飾られてうつりがよくなるのと同じ事であります。現在大大阪には市立の商科大学はあります。しかし大阪の市民が、商科大学をどれだけ理解してるかといふとそれは疑問であります。今や財産經濟の諸問題が尤もキーン・インテレストを持つて、かうした時に商科大学の學徒の研究にまつものも少くないはずであります。どうもその存在、その活動が大阪の天地によくはうつりませぬ。單に一つの飾り物として高閣ではない阿部野が原に放任してるといふ嫌ひがあります。商科大学？ そんなものが大阪にあるのかな——、まあそんな程度ぢやないか知らんとまで思はれます。

八 大原社會問題研究所を失ひし大大阪

近く大原社會問題研究所が天王寺の伶人町を去つて、東京に移ることにになりました。私共は非常に残念なことと思ひます。大大阪特有の存在であつただけに誠に遺憾な事であります。大原孫三郎君は長らく少からぬ經費を支出して大阪に社會問題研究所を經營し、學者をつどひ資料を集めて居つた。然るに此の研究所にも大阪人の關心は極めて乏しかつた。それにはロケーションの悪い事も一因であつたでせう。天王寺の伶人町といふのではいささか場所が偏してゐたが、その研究所が今度東京に移ることになつた。如何にも残念な事ですが、研究所の經濟、財政等に關する七萬有餘の書冊が大阪に残る事になつたのはせめてもであります。これは全く安井知事の厚意

によるものであります。研究所の建物を大阪府の社會事業に使ふと云ふ必要もありませんが、建物よりも書冊の方が尙大事である。地所や建物などちがつて他に取りかへられない書冊をば先づ引うけるやうにと云はれたのが安井知事であります。そのおかげで七萬冊の文獻が大阪に残されたのはせめてもであります。しかし當時此の問題にふれて新聞も別に大きく書いて居らなければ、大阪の市民の口の端にもほらない。勞働問題に與かつてる少數の人の外にはすべて忘れられてゐる。いや初めから知られてゐない。今度東京へ移るさうなといはれても、ああサヨカといはれるだけである。(笑聲)この研究所の書冊は日本の圓の値が高く、外國のマルクやフランやポンドの安い時分に、外國で買ひ集めたもので、有名な學者などのライブラリーなどをまとめて求めてある。アダム・スミスの『富國論』の第一版といふやうな古書珍書も少くないさうである。さうした文獻が大阪へ残された事はせめてものなぐさめでありませう。しかしそれにしても研究所の東京への引越しが、何等大阪へ反響を持たなかつた事は歎かましい次第であります。

九 官學懷德堂の誇りをもちし大大阪

大阪に法文科を増設するといふ意見に對して、中には法文科などよくないと頭からケナス人もあらう。それは法文科がよくないといふのでなく、現在の教へる人、教へ方がよくないといふのでありませう。又文科こそ京都で澤山である、大阪には不用であるとか、それでは京都と共倒れ

になるなどといふ人があるかも知れない。私は日本では文科を輕視しすぎてゐる、うんと文科にも力を入れねばならない、だからますます文科を増設する必要がある、それは共倒れでない、共榮である、縮小退歩してはならぬ、擴大進歩せねばならぬと思ふ。

元來大阪に大學校を作ると云ふことは必要なるのみならず、史乘に徴してもさうした歴史を持つてゐます。

江戸時代の大學は東京に今の萬世橋のとなりの昌平橋の傍らの孔子廟の所に昌平齋がありました。これが江戸時代の東京の大學であります。その後享保年間八代將軍吉宗は學問に理解を持つて居られた。吉宗は大阪にも昌平齋のやうな大學を起すべきではないかと云ふ心持を話された事がある。當時大阪には三宅石庵の塾があつて、元祿十三年に開かれ、享保九年には相當立派なものがあつた。これは三星屋武右衛門(中村良齋)、道明寺屋吉左衛門(富永芳春)、船橋屋四郎右衛門(長崎克之)、備前屋吉兵衛(吉田可久)、鴻池又四郎(山中宗古)、など土地の篤學の商人たちの出資によりてできたものであつた。そこへ恰かも江戸表における大阪學問所の話があつたので、中井登庵は道明寺屋、備前屋などと東海道五十三次を三度江戸にでかけ漸く享保十一年に許可の命をうけ、地を賜ひ戸役を免ぜられる事になつた。その後寛政四年の大火に焼失したが、中井竹山は松平越中侯に訴へ、再建費千五百兩を算せしも、査定されて漸く三百兩を賜はり、その工に就いたが爲めに孔子廟などは取り止めとなり、なほ七百餘金を費した。これ又前にあげた社友五人その

外篤志の商人たちの出資にまつたのであります。此の如くにして大阪の懷徳堂は江戸の昌平齋と相ならび、東西の官學であつたが、それは主として大阪の富豪達の醸出によりて建設され維持され、明治二年まで百四十四年の長きに及んでゐます。この懷徳堂がいかに品性を養ひ風俗を正し人心を維持するに與かつて力ありしかは事々しく申すまでもありません。懷徳堂は中絶してゐましたが、明治四十三年懷徳堂の記念會ができ、大正二年財團法人となり、現在は小倉正恒、上野精一、今井貫一、江崎政忠諸氏の理事の下に博物館の一隅に再建せられ講演出版等をつづけてゐますが、これも新たななる綜合大學が出来たなら、その方へ引繼いでよく初めありよく終りあらしめたいと思ひます。しかし現在の状態では懷徳堂と云ひましても世間からは全く忘れられて、そりやなんだらう、矢張り風月堂見たやうなものか(笑聲)といふ位の程度ぢやないかと思ひます。

十 府縣聯合の大公園

江戸時代の大阪は儒林に三宅石庵、中井楚庵、竹山、履軒、片山北海、篠崎小竹、大鹽中齋等を出せるのみならず、或は西鶴、肖柏、鬼貫、來山を生み、契沖、長流相次ぎ、近松巢林子、半二、竹田出雲など相次いで輩出してゐる。何も過去の歴史がどうかうというて、今日を律せんとするのではないが、只大阪に綜合大學があつて不思議でない、いや當然すぎる事は明かである。もし文科も出来たならば、大阪の空氣も幾分かはるのではないか、さう云ふ方面の學者も居り、

さう云ふ方面と接觸する機會も多くなる、それが大阪といふ家の中に書齋がととのふといふ事になるのではないかと思ふ。

過般天王寺の公園が擴張されて、住友家より茶臼山一帯の土地が寄附され、新たに美術館も出來た。これで書齋の床の間もできたといふものではなからうか。ここに綜合大學を完成する。その上衛生の上より思ひ切り大きな森林公園を作つて大阪を緑化する。現に大阪には遠からぬところに生駒、葛城、金剛、又箕面から勝尾寺、能勢、山崎、一方には六甲連山まで山嶽地帯に接續しながら、充分に活用されてゐない。いや活用どころか、その自然の風光を損じ、美觀を壞さねばならぬといふので、六甲連山には毎年山火事を頻發し、赤禿にすべく努力してゐるかの如く見える。(笑聲)私は居を東京に移すはずですが、しかし六甲の山腹を死所にしたいと思つて居ります。自分の死所にするとかせぬとかさうした事は二段としても、大都市として精神的に肉體的に住みよい土地にせねばならないと思ふ。中にはそんな大風呂敷をひろげても、それは奈良や京都兵庫など他府縣にまでまたがる、そんな事は出来るものぢやないといはれるかも知れない。私は各府縣が聯合してやればよい。さらにそれだから府縣は廢合するがよい。もしそれもいやならばその上へ道廳のやうなものをおいてもよい。交通の發達した今日合併さるべきは町村ばかりでない。大公園の如きも又一大阪の公園ではないのであります。

私は前に述べたやうな意見をならべるのも、要は大阪はまとまりのよい土地であり實行力があ

るからである。東京と大大阪の市政についても、その長短をそれぞれ述べましたが、事實東京ではとかくまとまりがつきにくい、實行されにくい。それが大阪となるとまとまりがよい、實現の可能性が強い。これは私ばかりの一言ではない。昨年末度量衡の小委員会にて屢々前大阪帝大総長であつた長岡半太郎博士とよく膝を交へるので、談たまたま此の點に及んだのであるが、長岡博士も東京は議論倒れになつて中々實行しにくい。その點は大阪の方がはるかに始末がよいといふ事であつた。恐らく懷徳堂が大阪の商人の私財によりて建設され維持された如く、大阪の實力は存外私の述べましたやうな問題をも比較的手軽く片付けてしまふのではないかとも思はれまゝす。又さう期待します。私は大阪を去るとは申しませぬ。今後とも必ず月に一回は大阪にまゐりたい。又さうなるやうにみなさまから何か紐をつけて貰ひたい。さうして私が大正十年以後御厄介になつてゐる大大阪の完成につき、諸君の驥尾に附して微力をつづけてゆきたい。さうした心持でここに私は大大阪に求むるものと題し、二三點をあげて御参考に供する次第であります。

私は御承知の如くよく筆にし口にしてゐますから、ここに申し上げました所見につき隔意なく意見を洩らしていただきたい。同時に諸君も諸君自身の爲め、諸君の將來の爲め、又諸君の子孫の爲め、又大大阪の爲めに御研究活動のほどを心から御願ひする次第であります。(拍手)

(追記の1)

平生、柴田二君との話

一月十九日夜行にて東京發大阪に入り、翌二十日大阪俱樂部に於て「大大阪に求むるもの」と題して講演した折に、來會された安井知事はじめ各位の前にて、大阪は東京に比していざとなると實行が早く又強い、どうか安井知事の在職中又關西に理解深き平生君の文相として在職中、幾分とも提案の進捗を期したい、その芽生えを見たいと話した事であつた。

その即日又大阪をあとに上京し、翌二十一日帝國議會に登院したが、それがまさしく廣田内閣としては議會の最後の日であつて、二十二日から議會は停會となり、次いで廣田内閣は終りを告げたのである。

二月の中旬東都築地にて、阪神に縁故ある有志は平生君の爲めに一夕慰勞の宴を開いた、たまま平生君は柴田善三郎君と席をならべてゐたので、僕は大阪俱樂部に於ける話の概要を述べ、兩君がその話中の人になつてゐる事を報告し、同時にこれが理解と指導援助を依頼したが、その時に柴田君が、

「いや君、實際浪人になると大阪には居れないよ、僕は退官後芦屋の地をトして家居する事にしたが、なんと柴田の芦屋に居居つてゐるのは、市長をねらつてゐるのだとさうさくうはさをするぢ

やないか、僕はふんがいて芦屋を引き拂つたよ。」といふ。隣席の勝田永吉君が、いやあの時の事情は僕も知つてる、あれでは柴田君も居りたくも居れなかつたよといふ事であつた。さらに柴田君が無闇に結婚披露に引つ張り出されて、いかに自分ばかりでない來會の人達に迷惑をかけたかといふ思ひ出を話したが、そこに居合はした人々も今更のやうに、さうださうだと共鳴したものである。

ここに後日の記として付け加へておく。

(追記の二)

東京及び大阪の緑化問題

今、東京では市會議員改選にあたり市政改革新同盟は選挙肅正ばかりでない、さらに有志から候補者を選出して打つて出てる。丸山鶴吉、菊池慎三、大島正徳、三輪田元道、曾我祐邦、花岡敏夫、近藤次繁、近藤乾郎、松野喜内、石山賢吉、道家齊一郎、宮尾舜治、月田藤三郎、小野義一、菊池寛君等々である。

市政の腐敗といふ方では名をあげてゐる東京にかうした新しい動きを見ることも時勢の變と思ふが、僕は前から東京市政調査會に關係があり、又此の同盟に参加してゐるので、昨今連夜各所に應援演説をつづけてゐる。

市政調査會は我等の爲めに「市政の現状」なるパンフレットを資料としておくつてくれた。その中に道路公園といふ一節がある。その末文に現在東京市の公園は大小百三十六所、三百三十三ヘクタールの公園を持つてゐる。これを全市面積に比較すると、

市民一人當……………〇・六三平方米 公園量は全市の……………〇・七パーセント

である。さらにこの市民一人當りの面積を海外の都市のそれにくらべると

ロンドン……………三十七倍 ニューヨーク……………十一倍 ベルリン……………九倍

パリ……………十二倍 ロスアンゼルス……………二十七倍

と記されてある。かつて大阪都市協會發行の『大大阪』誌中に、大阪の緑化につき述べてあつたが、その東京と他の五大都市と比較して見ると、大阪の貧弱さ加減が數字によりの確に示されてゐる。

六大都市市營公園比較

都市名	公園面積	市面積との比	一人當り面積	調査の時
大阪市	一、〇六三、三七一	〇、五六	〇、三九	昭和十一年三月
東京市	三二、九九〇、七二二	〇、五三	〇、四九	同 十年九月
京都市	三二四、七二七	〇、一一	〇、三一	同 八年十二月
名古屋市	一、三二一、二二九	〇、八八	一、二九	同 十年九月

横濱市	四二八、五六七	〇、三二	〇、五一	同	十年八月
神戸市	一、四二五、九一七	一、七一	一、七八	同	十年九月

(追記の三)

興銀と藤本ビルブローカー

吾等の友が僕の肩をたたいて曰く、「おい君の此の間の話は利き目があつたよ、關西日英協會で、秩父宮殿下の御渡英をお送別申上げたが、席次もあいさつも今までとすっかり變つてしまつたよ。」といふ。但しこれはどの程度にどう變つたのか僕は精しくは知らない。三月の末つ方に僕は海南莊引繼の爲め大阪へゆくと、恰かも寶來日本興業銀行新總裁の披露宴があつた。來賓總代として安宅商工會頭が立つた。大阪出身の寶來君の昔話も出る。中小商工業者の金融につき職掌柄いろいろと要望も述べる。なみ居る連中はこれがいい、これがいいと今更のやうに感心する。その翌日は藤本ビルブローカーの松葉新會長の披露宴があつた、來賓總代としての中根三和銀行頭取は、銀行仲間であつただけにパニツク當時の藤本ビルブローカーの惡戰苦闘振りについて話す。その昔日本銀行に入ると僕は松葉君に十二ヶタの割算を教へて貰つたといふ思ひ出話に花が咲く。いやかうなくてはならない、これがよい、これがよい、お前はいい事を言ひ出したよと、卓を圍むものの笑ひがとまらなかつた。

大助かりになるのは主人や滿堂の客ばかりでない。これで市長知事諸公はどれだけ助かるか知れはしない。もう少し早くからはじめておいたなら、關市長も加々美市長も早世せずすんだ事であつたかも知れない。今度はあんまり藥が利きすぎて、知事市長の虐使のなくなるのはよいが東京並みに無視無關心になつては困る。(二二、三、二一。海南莊借別の前夜)

(追記の四)

席次不順ならず

此のほど中、大阪で宴會の折にもさてはクラブの食卓にも、いつも「大大阪に求むるもの」にふれた話題に花が咲く。中にも宴會の顔觸れ席次あいさつ、此の單調さ加減にはいづれもかなりうんざりさせられてゐると見えて、共鳴から雷鳴にまでなりたがる。

その中に話題に上つたのは中央から大官の見えた時の席次である。かりに大藏大臣が西下したとする。それが銀行集會所の大會に臨む爲めであらうと、それが造幣局の鑄造試験とかに臨む爲めであらうと、いづれにしても要は大阪財界の要人たちと親しく意見の交換を遂げる、歡談を交はすところに主點がある。

然るに藏相歡迎宴會の席次を見よ。先づ藏相の左右は隨行の次官とか銀行局長とか理財局長とか祕書官とか何々課長とかいふ來賓一行によりて占領されてしまつてゐる。更に陪賓といふので

造幣局長や税務監督局長や税關長……これには大阪の外に神戸からも馳せ参じる……さうした大阪の大藏省の御役人によりて取り巻かれる。例により例の如く知事市長等數人が漸く卓をへだてて、主賓と高聲で座談が取り交はされようといふのである。

大藏大臣は何を苦しんで東京で朝夕顔を合はせてる次官や局長と、大阪三界まで乗り出し、その西下の主旨にそむいてまで席をならべたいのであらうか。いやならべたくないが、お客さまといふので主人側からの儀禮上さうならべてあるのである。

もしこれが圓テーブルであり、各テーブルに或は藏相或は次官或は本省の局長といふやうに、それぞれ手を分けてそれぞれに又土地の重立ちし人々と互ひに膝を交へたなら、どれだけ主客ともにエンヂョイされるであらうか。さうしたお客さまたちに話を交へるべく大阪には商工會頭や副會頭もある。住友三和の銀行重役もある。日銀、三菱、三井、第一等々の支店長もある。鐘紡、東洋紡、日本紡の幹部もある。『毎日』、『朝日』の重役もある。大阪商船の社長もゐる、日電、宇治電、各電鐵の社長達もゐる。

お客も散らしにし、主人側もそれぞれにお客を取り巻いて話が出来たら、さぞかし効果的であらうと思はれるにも拘はらず、此の分り切つた事が分らずに儀禮慣例は千篇一律に、主賓一行のグループを一ヶ所にかためる舊式になづんでゐる。

これは一藏相西下の例を引いたまでであるが、かの内外國から經濟使節一行など見えた時も同

じ事である。どうしてもかかる時こそそれぞれに振り分ける必要がある。散らしの必要がある。この誤れる……致へて誤れるといふ……慣例は獨り大阪に止まらないが、かかる機會にこれ又お立直しが願ひ度い。

我等はいつも主人側から席次不順の段平に御容赦をといふあいさつを聞きあいてゐるが、實はあまりにも千篇一律不順ならざるに飽き飽きしてゐる。(二二、四、二六)

大大阪と武藤山治君

此の一篇は三月十日大阪國民會館における武藤山治君追悼記念講演の一節で、前半は「大大阪に求むるもの」と重複してゐるから、ここにその後半のみを録することとした。

大阪といふところは現役の人で蒸されてゐる。浪人になると居りにくい、尻がおちつかない。勿論浪人にもピンからキリまでありますが、相當な地位にあつた浪人、相當な學識經驗を持つてゐる浪人さうした人たちに飢ゑてゐる。それだけに私の最も残念に思ふのは湯川寛吉君が住友理事事を辭めて大大阪の浪人の親方元老として、上院の議員として、大阪一流の顔ぶれとして居られるは有難い事と思つて居ましたが、浪人になつて間もなく亡くなられました。私は同郷であり先輩であり湯川君には非常にお世話になつた。湯川君の亡くなつたことは大大阪にも又私にも大損害でありました。それから長らく市長をされた關一君は良い潮時を見て辭める事になつてゐましたが、既に加々美君といふ後繼者を得て、近く辭めようとして居る時にチフスにかかり手遅れで亡くなりました。若し關君がチフスにならず、いや懼つても手遅れにならずに市長を圓滿に辭めた

ならば、法學博士であつて大大阪の助役として市長として永く市政にたづさはつた人であり、さうして貴族院に席を列して居る、その間君が大阪につづけて居つて貰ふと云ふことは大大阪として誠に結構な事だと思つて居ると關君もコロツと死んだ。よくよく恵まれぬ。

さらに又平生夙三郎君は海上保險の現役を去られた。けれども甲南の幼稚園、小學校、高等學校の創設者經營者といふ變り種である。君はさきに文部大臣になつた、文部大臣になつたことは誠に結構なことであるが、文部大臣を辭めると平生君も——勿論自分の子、孫、曾孫とも云ふべき學校が武庫郡本山村にあるのですから、恐らく平生君はこちらへ歸つて來ようと思ふが、なんだか私の第六感から云ふと、だんだん東京へ引きずられて行きはせんかと案じられます。

それから小林一三君は阪急から東京電燈へ股をかける事になつた。實業界といふよりも藝術界に理解を持つて居る小林一三君は尊重すべき變り種である、東京で松竹と正面にぶつつかつてぐんぐん進展しつつあるのは小林君として快心事であらう。見て居給へ、段々東京へ移つてしまふぞと云つて居るうちに阪急の社長から足を洗つてしまつた。

同じ意味に於て武藤山治君、我々は武藤さんの大阪に居つて貰ふと云ふことはこれ又大なる變り種として結構なことであると思つて居つた。殊に鐘淵紡績の社長を去つて後の武藤君は關西における尊い存在と思つた。ところが『時事新報』を背負ふため東京へうつつて仕舞つた、その時分私は矢張り武藤君も或る機會に『時事新報』を辭めても、政治に經濟に舞臺は東京の方が大き

いから、結局東京の人になるよと云つて居ましたが、不幸にして凶變に斃れた。かくの如くにしてこれとは思ふ人は或は去り或は亡くなつてゆく。大阪の爲めに惜しい事と思ひます。由來人間は知事とか市長になつて居ればもてる、しかし辭めるともてなくなる事になつて居る。金力あるものももてるが、一度金がなくなるともてなくなる。

我々が過去を遡つて見ると徳川時代に、時の江戸幕府の大老と云ふものは今日の總理大臣、老中と云ふのは今日の先づ大臣であるが、諸君指を折つて見て徳川江戸時代の初期から十五代に至るまで御大老が何十人あつたか老中が何百人あつたか、さうして誰々を諸君が記憶して居るか。恐らく大老井伊直弼は御承知でありませう。老中に松平定信白河樂翁、それから江戸時代の初期には酒井雅樂頭とか本多正信、土井利勝、阿部忠秋、松平信綱、など云ふやうな人々の名は覺えて居られる事と思ひます。何百人何千人の大老老中の中で記憶に遺つて居るのは五指を屈する程である。維新以後、或は又今の内閣の官制になつて總理大臣は何遍變つたか知らない、又大臣も何百人に及んでゐるか知らぬが、どれもこれも在職中もてる。しかしその職を去つた後に果してどれまで記憶に遺つて居るのであらうか。ところが徳川時代の志士とか學者たちの書いた手紙一本でも今日入札すると何百圓何千圓といふ。吉田松陰、高杉晋作、橋本左内、頼三樹、高野長英、渡邊華山、林子平、佐久間象山といふやうな人々になると誰しも記憶に残つてゐます。頼山陽に至りてはその『日本外史』、『日本政記』が實に維新の王政復古を見るに至りし大きな推進力

であつた。更に明治以後となつても生前は月給三十圓の一新聞記者であつた正岡子規の手紙は數百圓數千圓の値が出て居ります。『朝日新聞』で校正をして居た石川啄木も、今日その寸簡零墨でも何百圓と云ふ値が出て居る、それだけいづれも死後その名がますます高くなつてゆきます。それで後世に長へに強く生きるには結局宗教とか教育と云ふことになる。政權金權を握るものはどうも長續きはしない。現に慶應義塾をはじめた福澤先生、早稻田の大隈侯、京都同志社の新島先生皆將來に生きてゐます。もう後世に生きようが生きまいが自分が死んで仕舞つたら分らんからつまらないと云へばそれまでですが、私も折々考へます。死んでから二十年か五十年たつた頃に一時間でも良いからひよつと世の中に出て來られると面白い（笑聲）成程忘れられずに居るな――、或はもうすつかり忘れられて居るな――（笑聲）墓場から一時間でも短か過ぎるから一日、二十四時間見て居られると良い（笑聲）などと思ふ。まあそれはそれとして、兎に角世の中は悠久である。自分達の命は至つて短い。お互ひに今こんな事を云つて居る間に一分一分死期が近づいて居る。決して延びては行かない。だから實業家の中には名は残らぬが巨額の金を残して死ぬ。その遺産が問題になつて遺産相續で血で血を洗ふ訴訟沙汰も随分あります。又その金を相當有意義な事に寄附して後に意義を残して行く人もあります。

武藤君は、筆の人として著述をする。その遺句が只今も八木君によりて朗讀せられた。武藤君は著書によりて生きて居る。更に武藤君は『公民講座』と云ふ雑誌を毎月出したがこれが未だ續

いて居る。これも大阪では中々難しい仕事である。新聞は非常に現在に即して居りますから、大阪には『毎日』、『朝日』と云ふ大きな新聞もあるが、今雑誌となると殆んど大阪にはない。ところが大阪に『公民講座』と云ふのがありますが、これは正直のところ、あまり振はないのは當り前です。良く續いて居ることと思つてます。これは矢張り武藤君の力である。『公民講座』と云ふのだから、学校の先生達の講義見たいなものが續いて居るんだらうから、中程から見ても中途半端で分るまい、学校の教科書見たいなものであらう、などと思はれませうが、これは政治、經濟、社會、各方面にわたつて載つて居る普通の雑誌であります。決して学校の教科書でもなんでもないのですから安心して御講讀願ひたい。私は頼まれたのでもなんでもないが（笑聲）これも武藤君の遺した仕事で大阪としては稀なる存在であります。よく成育させたいのであります。兎に角武藤君は實業家として傑出した人であるが、然し兎に角桁のはづれた人で政治運動に志して、先程も云ふやうに『時事新報』で諤々の議論をつづけ、番町會の攻撃或は東京市政の改革に敢然として戰つて來た。これ丈でも意義がある。更に幾多の著書を遺して居る。或は雑誌『公民講座』を續けて居る。乃ち武藤君の形骸は死んで居つても精神的には生きてゐます。更に此の國民會館と云ふ建物が出来て居て、此處で毎月一回武藤君を記念とする會が開かれ、又平日はこの會場が種々利用されて居る。かうして武藤君の遺した仕事に依り大阪の市民は絶えずいついっまでも恵まれて居る。武藤君が凶刃に斃れた事は誠に遺憾千萬であります。しかし武藤君はと

こしへに生きてゐる。

武藤君は關西で活躍して東京の舞臺に飛び出て、さうして凶變で斃れた。然し武藤君の仕事がそれだけ遺つて居ると云ふことにより、今私が「大大阪に求むるもの」と云ふ註文に對し、武藤君の形骸は亡くなつても、立派にその要求には應じて居るのであります。私は有難いことと思ふのであります。私はこの氣持で武藤君の靈に衷心感謝の言葉を捧げ、諸君と共に故人の人格を偲ぶと同時に、大大阪と云ふものが唯頭數ばかり、人口ばかり殖えれば良いと云ふのでなく、質も向上しなければならぬと云ふことに、御同様今後とも努力をつづけてゆきたいと思ふのであります。（拍手）

第五篇 歌と人

仙珪和尚とモズロベール

(赤穂行の一節)

芝高輪泉岳寺義士の墓所には香煙のあとを断たねども、播州赤穂は山陽線からわき道へそれて
ゐるために、訪ふ人は必ずしも多くない。

赤穂の町で大石神社と菩提所花岳寺が最も義士に由緒の深いところである。大石神社の境内に
は大石内藏介の屋敷を取り入れてあり、記念寶物館もある。

大石神社はどうしてできたかといへば、これ又赤穂は小藩であり、土地も僻遠な爲めに、明治
九年に神社の建設が企てられて、その間あまりにも長い長い歳月が流れ、明治三十三年に社號認
可大正元年に社字竣成、昭和二年縣社に昇格した。

その建設の中心になつたのが實に花岳寺の先々住仙珪和尚で、義士狂僧といはれた和尚は三十
有餘年幾度の頓挫にも屈せず、大石神社の建立に専念努力をつづけ、遷化の年漸く出来上つたと
傳へられてゐる。大石神社の社殿の右のうしろにあたり、現に仙珪和尚表功碑といふのが建てら

れてある。

ここに僕がこの一文を草することになったのは、その仙珪和尚が義士狂僧となつたいはれ因縁である。

時に明治九年七月のある日の朝まだきのことである。一人の西洋人が書生をつれて赤穂花岳寺をおとづれ、刺を通じ義士の遺物を拜見したいと申し出た。その名刺には、

神奈川縣裁判所

モズロベール

横濱伊勢山四番地寄留

と記されてある。時は明治の初年である、所は播州の邊土である。異人との面會などはとかく事面倒になると思ひ、平日は寶物は見せませぬと斷つたが、彼氏は、

私は大石公の世界無比なる忠臣であることを慕ひ、土用の休みを利用し旅行券をもらひ、横濱からわざわざ義士の遺跡と遺物を拜見にこれまで来たのである、是非に見せて下さい。

との懇望である。恐らく當時横濱から四百噸位の便船で遠州灘熊野灣をゆられ、やうやうの事で神戸へ上陸したことであらう。神戸から宿つぎに人力車かそれとも徒歩でやつて来たことであらう。全く遠路海山越えてわざわざたづねて来たのである。仙珪和尚も無下に斷わりかねて書院へ引見し、寶物を見せることになつた。ところが彼氏は日本語を解するのみか語學にも達者であ

り、その態度謹嚴をきはめ、一物を見るごとに押しただき、感激措く能はず落涙とどめあへず、問答數刻うどんの晝食をうけて退下したとある。

當時の彼氏との問答を逐一和尙は手づから記してあるが、その要領は、

大石公のやうな智仁勇三徳を兼備した人は、昔から今日まで一人もない。日本の楠公菅公いづれも智慧すぐれ君に忠なるに變りがないが、いづれも終りを完うしてゐない。大石公の智仁勇にして初めて大事が達せられたのである。それにくらべると私の國のナポレオンなどは全くお話になりませぬ。

とばかりに、

大石を おもへばわが國 ナポレオンの

名までもかげに くもるかな

佛國人 毛 津

といふ歌まで書きつけたが、彼氏は更に、

古來日本には多くの英雄を祀る神社は各地にあるが、かかる神々によりて利益が與へられるものとすれば、その行動終始一貫その精神忘我捨身の萬世武士道の龜鑑とすべき赤穂義士を祀れば、どれ程御利益があるかも知れぬ。赤穂の人はこの古今無比の英雄をなぜ神に祀らぬか。と詰問した。この佛人の熱烈なる態度と詞が仙珪和尚の肺腑をうがち、ここに義士狂僧として和

尙が三十年間の大石神社建立の運動となつたのである。

赤穂をたづねても仙珪和尙のことはあまり知られてゐない。ましてや毛津氏においてをやである。その昔輿論は汽車の近よることを忌避した。播州でも高砂は鐵路を加古川の方へ押しつけた、網干も赤穂もともに、如才なく鐵路の近よることを極力排斥した。

今有年驛から輕鐵がゴトゴトと赤穂にウネウネと通じてゐる。山陽本線の距離短縮はさきに山口縣柳井津方面で改修されたが、今姫路をあとに岡山への線路が北部へ迂廻してゐるから、遠からず赤穂線によりショートカットが西大寺方面へむけつながららしい。

さうなると赤穂觀光の客は猛烈に増すことになる。仙珪和尙の名も賣れてくる。さらに佛人毛津の碑も建つであらう。いや建つてほしい。

赤穂の町が縣廳所在地であつたと假定せよ。それが薩長土肥のやうな大藩であつたと假定せよ。まだまだ立派な立派な大石神社がまだまだすつと早く建てられた事であらう。それが邊土の小藩であつた爲め、そこに有力な先輩がなかつた爲め、辛うじて花岳寺の坊さんによりて企てられた。しかもそれが明治の初年横濱からはるばるたづねて見えたフランス人の進言に刺激されたといふことは、特記に價ひすると思ふ。

毛津氏について精しく知つてゐる方があれば、披露してほしいとおもふ。(『モダン日本』四月號)

お小言の葉書

(故柳澤保惠伯の思ひ出)

白耳義留學を命ぜられてブリュッセル市に入つたのが明治三十五年の初めであつた。

さあどこかにパンションを見つけねばならないといふので、貸間さがしに出かけ、最初に案内された家が故柳澤伯爵のかつての假の宿ださうで、此の部屋にコント・ヤナギサハが居られましたといふマダムの口上であつた。

柳澤伯はかつてブリュッセルに留學されたのであつたが、僕の出かけた頃はまだ伯に對する武府の思ひ出話が、生々しくここにくさくさと残つてゐたので、僕としては當時未知の方ではあつたが、故人についていろいろの追憶が残されてゐる。

僕は明治三十七年日露戦役が始まるとともに急ぎ歸朝する。いくばくもなく今の貯金局の前身である郵便爲替貯金管理所長になる。爲替貯金事務の統計月表をつくつて各方面に配布したが、無論その宛先の中に柳澤伯があつた。

柳澤伯から最初にうけとつた便りは、その月報が届かなくなつた不都合千萬であるといふ、とてもきびしい御叱りであつた。それは忘れもせぬ下關の宿屋からの旅の葉書であつて、細字のペン書きの自筆である。

管理所は別に月報を出さねばならぬといふ事もなく、又誰々へ配布せねばならぬといふ事もない。いはば好意で僕かぎりの思ひつきで送つてゐるのだから、不達になれば不達になつたで、只そのよしを通じてくれたら、更にしらべて、送るまでである。それを怪しからぬ不都合だと譴責されて見ると、ははあ矢張り御殿様氣質の抜けない御方ではあるわい。昔だつたら、おれは打ち首にならぬまでも閉門位にはなつてゐるかも知れないなどと思つた。しかし更に再考して見ると、當時あつた半ピラの爲替貯金の月報が、未着になつてゐるなどと、氣にかけてくれる人が他にあつたらうか。それは統計といふ上にとても克明な柳澤伯なればこそである。多數の人は配達されようがされなからうが、手にし眼にする人も稀であらう。その多くは一べつすらくれられないで屑籠に投げ込まれたのでは無からうか。

僕は伯爵のお小言に對し恭しくあいさつを申しあげ、さらに配達の上に注意を加へたが、もとより伯爵あての郵送を差止めてあつたわけではなし、伯のはがきが下關の旅先であるだけに、何か伯と伯の留守宅との間に聯絡が充分に取れなかつた事でもあらう。いづれ下關の旅先で東京より取りよせられてゐる郵便の中に、片々たる貯金統計の月表が見えなかつたのかも知れない。ま

あそれはいづれでもよろしいとして、さういふ事にまで氣にかけてくれる事をうれしいと思はねばならない。わざわざペンをはしらせてくれた伯の氣分には、なんとしても深甚なる感謝の念を禁じ能はなかつたのである。

故柳澤伯については、その後貴族院に於て、人口調査委員會に於て、人口問題研究會に於て、公けの席では屢々お目にかかつてゐる。又國際觀光委員の一行につらなりて、尾三の方面に旅を共にした事もある。さうした中には、故人の思ひ出のエピソードとして筆にしてよい事も、目にし耳にしてゐるが、それらは他に筆にし口にする人がありさうだ。僕などが出る幕でもあるまい。僕としては當時まだ生若い身であつたからでもあらうが、日露戦役直後の頃であつたらう、最初に頂戴したあのお小言の一本の葉書が、故人の印象として最も深く残されてゐる。

岡崎晩香翁をいたむ歌

玉津島 松風の音は かはらねど

君いにしあとは さびしきものを

和歌の浦 よせてかへらぬ 波の音の

いとどしづけき 夕なりけり

かつて海南莊に翁を迎へて喜壽をことぶく、その時つどひたま

ひし湯川寛吉、村山龍平の二翁相次いで逝き、今又翁を失ふ

武庫の山 君ことほぐと つどひてし

友つぎつぎにゆく 君もまたはや

君いまし 陸奥宗光と 語り居らん

その席の末に 父も居るらんか

三先輩をしのぶ

(後藤、明石、村山)

私が上司と仰いだ後藤新平、明石元二郎、村山龍平三先輩につき、數ある話片中より一二を筆にして見る。

大正の四年僕が臺灣總督府民政長官となつた時に、麻布宮村町の後藤邸へ挨拶に出かけたら、その時に後藤さんは臺灣の統治につきいろいろ話された。しかし私の耳底に残つて居る事は、君これこれの人達に注意せよ、あの男はこれこれだからよくない、あの男はかくかくの次第で注意ものだよとづけづけいつたものである。

一體さうした事は誰しも言ふを憚るものである。それが親子兄弟とか、又親分子分の間柄で特に親しくしてゐる仲ならばいざ知らず、さもなくばよくいへば他人の悪聲を放たず、見方によれば餘計な人の怨みを買ひたくないから、先づ十人が十人口をつぐむべき筋合である。それをすばすばといつてのけたのである。

私は後藤さんは變り種である、キビキビした蠻爵である。この時も、うれしく思ひ又少からず感心した。

*

臺北の新聞で長官の下村は總督明石と相よからず、近く長官の更迭を見るであらうといふ新聞記事が見えた。それは僕がアミーバ赤痢にかかり病床の人となり、次第に快方に向つて來てゐるが、かなり引籠つて長くなつてゐる。それを或は下村が不平があつての事であるなどと臆測してからでもあつたらしい。

前總督安東貞美大將も、後の總督田健治郎男も、又當時の明石總督も、いまだかつて長官官邸をたづねた事はない。ところがそろそろ快方に赴いてゐる僕の官邸へ、明石總督がひよつくりと見えた。何か直々話し合はねばならぬ用件でも起つたかと思つたら、さうではない。只雑談を交はしてそのまま引き取つた。

はてどうして珍らしくも總督が見えたのかと思つてゐたら、その總督の長官官邸見舞訪問の記事が新聞に見えると同時に、新聞でも世間話でも長官辭職説はパタと消えてしまつた。その時僕は明石總督の來訪を成程なあと、今更に膽は斗の如く豪宕を以て鳴れるが中にも、周到の用意ある總督の細心なるに感心した。

*

朝日新聞社がシベリヤ横斷の訪歐飛行を計畫したが、當時としては随分思ひ切つた仕事である。かなり危険性も多い。殊に廣く江湖に訴へ義金を集める事はしなないときめてゐたから、社の經濟より見て、かりに無事に飛行を遂行し得たとしても、相當の失費である。況んや事故發生の場合をやである。

ところがそれは飛行機一臺としての話であつた。二臺にすると、事故率も多くはなるが、又一機に事故があつても残る一機が目的を遂行するといふ成功の保證率も多くなる。しかし何分にも經費がかさむから、誰も二機までをと強く主張しかねてゐた。しかるに村山社長は何等の遲疑なく、一言に二臺説にきめてしまつた。平素社員一人の増員にも中々に首を縦に振らない社長が、アツサリと二臺説にきめた時に、矢つ張り村山社長はエライと思つた。

山本条太郎

一 滿鐵の工作

山本条太郎君とは公的生活のみならず、義妹の媒酌も願つたやうなわけで、家族たちもおなじみになつて居る。だから思ひ出の節も數々ある。

あれもこれもと一々あげるも煩はしい、又既に記憶のうすれてしまつたのも少くないが、その記憶に残されてゐる中から、三、四、想ひうかぶまま筆にして見る。

故人の滿鐵總裁としての活躍には誠に眼覺しきものがあつた。權益鐵道の確保なり、會社經營の刷新なり、後藤總裁以後中興の巨人として、君は國策會社として經濟革新の基礎を樹立したものであつた。東三省の權益回收の渦中にありて、山本總裁は北京の我公使もそのけの形にて、直接張作霖に體あたりを喰はし、ぐんぐんと折衝を進めた。その思ひ切つた活動の段取りなり、又その交渉の歩武を進めた内容の數々は、僕にしてがとても記憶し切れない。或は聞かから前に葬

られる筋合のものかも知れない。或は松岡洋右君あたりの筆舌により、その全貌なり片影なりが寫し出されるものかも知れない。いづれにしても張作霖横死の變あり、半途にして君の計畫も中絶するの止むなきに至りしは、故人としては如何にも遺憾千萬な事であつたとおもふ。もし藉すに尙多少の歲月を以てし故人の計畫通り進行してゐたならば、事の是非は二段として、その後の滿洲の歴史はかなり其のおもむきを異にしたかも知れぬ。當時赤坂新坂町の一室で殆んど二時間にわたり、滔々辯じ立てたる君の追憶談は、淡く薄れながらも僕の腦裡に残されてゐる。

二 政民の合同

政黨の更生、さうした話題を中心にした會見は一再では無かつた。輕井澤の別荘に、赤坂の新坂町に、君は政民二大黨の提携により憲政が常道に立ちかへるべき旨を強調した。君の意見は、すべての禍根は政民兩黨の下らない黨争に原因する。だから來るべき總選舉には五十名位民政黨に割いて一切兩黨の競争をなくしてしまふといふのである。僕はさうした候補者延いて地盤の協定などではできないものでないといふと、君は例の強氣で斷じてやれるといふ。僕は斷じて出來ないと確信する。又かりに出來るとしたならば、二大政黨が八百長で神聖なるべき選舉を弄ぶものなりとの非難を免れないというた。

此の論争は二三回に互つたと思ふ。僕はさらに二大政黨の合同、更に解消して新規まきなほし

とまで論及したものが。或る夏の輕井澤の如きは夫人と五斗博士の監視の下に、十分間をかきりて病床に會見した。先生いつのまにかムクムクと床上に起きなほり、例により談論風發式になる。止めにかかるが中々に止まらない。たうとう話半に聞き流し、あいさつもソコソコに引き上げた事もある。その後東都赤坂の「あかね」にて山本、久原兩君に招かれて我等同志二、三が相會した時も此の問題がくりかへされ、僕は進んで二大政黨の合同、更に一步進めて新たに二大政黨の解消から新黨の樹立にまで辯じ立てたのであつたが、その時別れの門口で、君は僕の肩を叩いて、議論は自由勝手だが實行となると、さう口先のやうに出来るものぢやないよといふやうな詞をかけられた事が記憶に残つてゐる。

三 北鐵の買収

新坂町のある日、君は北鐵買収問題を論じ、早く買収してしまふ事、その資金の一部を英米の外債によるべしといふ意見を述べたことがある。君の意見は英米兩國をして北鐵へ共同の利害を結びつけるがよいといふのである。金が不足だから借りるのではない。借りてやるのである。債權者として英米を北鐵へ結びつけてしまふといふのである。株主にするのでない。只社債の債權者とするに止める。金額も多きを欲しないといふのである。

君の此の意見を耳にした時に、僕は嘗て後藤新平伯がアメリカから五六億も借金するがよい。

借りねばならないからでない。アメリカと我と利害を一にせしむるが爲めであるといつた詞を聯想し、君の意見は面白いなとおもつた。

そこでこれは君の意見たるに止まるのか、それとも何か成案を持つてゐるのかと反問すると、それは英のコレコレ米のコレコレへあてて電報一つで話がすすむ手順になつてゐるといふのである。

あらゆる問題に直面して、すぐこれに對する意見を樹てる。それも有りふれた見方ではない。常人の思ひもつかぬ見地から對策を案じる。更に又さうした對策の實行案をつくり、實現すべき力を持つところに、故人が他の追隨を許さざる材幹力量を示してゐた。僕は君の意見はおもしろい。近頃はとかく借手方の鼻息が強い時代である。國際經濟戰にても消費の多い事、大きな顧客である事が強味になる。印度、合衆國からの棉花又しかりである。逆に我生絲の彼に對する又相似たるものがある。さうした點から北鐵が英米より借金するのもおもしろい。勿論時節柄さうした裏の裏まで呑み込んで政府當局がこれを容認するには、かなり困難なる事情もあらう。又これに對する反對論にもうなづける點なきにあらざるべきも、兎に角當局へ參考案として耳に入れおくべきであると、故人と打合せた上その筋々へ進言した事も、今では果敢ない思ひ出の一つである。

四 經綸の人實行の人

故人と最後に會つた時の話は、ご大層にここに説明の限りにあらず、といふほどでもないが、まだ生々しい問題であり、他人の身上にも關聯してゐるから……というて政治問題ではない……ここに略する。

君が滿鐵總裁として任に就かるるや、僕は大連郊外星ヶ浦のゴルフのプレイにより、健康の維持増進をはかるべき旨をすすめたものであつたが、どうしてもものにならなかつた。その後はせめて釣によりて日光浴と心氣轉換と健康増進とをはかられたいとくどくすすめたが、これもたうとうものにならず仕舞ひとなつた。いつも顔さへ見れば運動を運動をといはれたのを根に持つたわけでもあるまいが、前に述べた君と最後の會見の別れ際に、君が玄關口まで見送つたのはよいとして、夫人と口を揃へ、……君あまりゴルフに凝りすぎちやいけない、もういい年だ無理しちやいけない、用心し給へ、少しは控へるがよいよ、とばかり逆説法をまくし立てられた時は、さすがの僕もあいた口が塞がらなかつた。

意見がある、度胸がある、實行力がある、三拍子揃つたのが君であつた。資性剛毅、機略縱横、識見高邁とでもいふのであらう。慾をいへばよくもわるくも、今少し他人の言を聞くの雅量がほしかつた。しかしそんな事はいづれにしてもよろしい。君の如く意見の立つ人、しかもそれに實

行力の伴つた人は全く稀であつた。だから頼まれもせぬのに、僕は君のファンとして折々オセツカイもした。憲政擁護の總選舉の時なども、社の許しを得て三月間政民兩黨の知人の爲め政戦にかけめぐつたが、君の福井の戰陣急なりと聞き、但馬からかけつけて二日福井の劇場の壇上に立つた事もある。又恰も後藤新平伯の外相が異彩ありし如く、君の外相といふ事が種變りであり出色であるとはかりに、田中首相の外相兼攝の時であつた、僕は餘計な事であつたらうがオセツカイをした事がある。さらに犬養内閣の時には滿洲の時局は再び君の滿鐵總裁を必要なりと信じ、これ又餘計な事であつたらうが瘦馬に鞭を打つた。

かうした事は僕は今まで誰一人にも話した事はない、僕は故人には何等求むるところなく、只此の偉人の材幹を充分に活用してほしいとのみこれいひのりて微力をいたしたまでであり、それをここにはじめて筆にしたまでである。それにしても田中義一、森恪、犬養毅、齋藤實など諸先輩は、いづれも故人となり、僕の進言に全然同感の意見を示された木堂翁の返信位が漸く形見に残つてゐる位である。

邦家の現狀實に人なきを憂へる。その極めて寥々たる人材が揃ひも揃ひ、えりにえつて或は病みて起たず、或は兎手に斃れる。いかにしても邦家の爲めに痛恨に堪へない。君が不起の病と根氣よく戦つた心持は又偉とすべきであるが、しかし來るべき時が遂に來たのであつた。相次いで

民政黨の川崎卓吉君に至りては全く忽焉として長逝した。僕は重ね重ねの訃音に只悵然たるばかりであつた。時恰かも僕自身にも身上異變があり、感傷的にされがちな折も折、翁の長逝を見ると、さすがに憂鬱とならざるを得ない。今日と雖も君もし健在ならばと想到する事が多い。どう考へても残念千萬である。

故人と僕とは、共に三井や満鐵で仕事したわけではなく、共に政友會に席をならべたでもなく、経歴も年配もちがつてゐるから、思ひ出といつて見ても大凡上述べた程度のものに過ぎない。しかし故人の長逝を惜別する心持に至りては、必ずしも人後に落ちないつもりである。

故人が長逝すると、いづれ追悼會とか、追憶録とか、記念碑とかいふやうな判を押した計畫が立てられる事とおもふ。しかし山本条太郎の記念は只そんな判に押しした行事だけに終らしたくない。それならどうするのだ……それにはかうもしたらといふ事を故人の前に直言すべく、三度新坂町にたづねたが、さすがにそこまで話がきり出せ無かつた。

時節柄邦家の爲め政界の爲め、かけがへのない最も大事な経綸の人、實行の人は長逝した。天藉すに今四、五年の齡を以てすればといふ愚痴がとどめあへない。あきらめられぬとあきらめつつも、さてあきらめられぬものである。(山本条太郎翁傳記)

多磨墓地の歌

武藏野の くぬぎ林は さながらに

そこにもここにも 赤ペンキの屋根

秩父嶺は かすみで見えず もり上れる

若葉の中を 我が歩むなる

砂利道は 清らに廣し ただ中に

すくすくとのびたる 赤松いくも幾本

行きすりの 人も足とめ 幼きも

手を合せをり 是清翁の墓に

これやこの 齋藤さんの 墓どころ

高橋さんに向ひ 東郷さんとなり

ながらへて あらばと思ふ 友だちの
そこここにねむる 新渡戸さんもねむる
この時に この人あらばと 今さらに
山本条太郎の 墓の前に思ふ
策ありて 爲す力ある この人は
とはに世にあらず 事しげき世に

箱根の眞島博士

一 文句入りのプロローグ

この一篇は大坂帝大理學部長眞島利行博士を中心にした話である。
これを筆にはして見たが、いざ公表するとなると些か躊躇の氣味もないではない。それは、かうした記事が彼氏に對して善意百パーセントであり又他意なしとしても、存外反對の結果を見る事があるからである。

學界にも存外朋黨の弊がある。いや狭く限られてゆとりの少ない場所だけに、却つて女性的な反目嫉視が少くない。中には最近の九州の醫大の如く、甲派の醫者達が手術する最中……それが手術前とか手術後といふのでは、世間の非難をうけるに不十分なりといふのであらう……乙派の醫者達が闖入し、甲派の醫者達を引っぱり出してなぐりつけたといふ男性的？ なシーンさへ、あることはある。

だからこの一文が出ると、なんだ眞島が餘計などと、とんだ岡焼きから、この次の催しにはおれの大學では参加する者を邪魔してやらうなどといふやうな、思ひがけない事件が発生すると、つまりこの一文を草した事が却つて仇になるのである。

しかし僕は篤學なる眞島博士その人の風格には、さうしたくだらない反感を引き起す憂は萬々ない。いや、それよりもそんな事なら援助したいといふ方の、好ましい同情の動きは千一か百一か十一位にありうる。さらに他の方面でも成るほど好い思ひつきだ、我等も一つやつて見よう、試みよう、といふ事にならぬともかぎらない。いや、必ずさうした事になるだらう。さうした事になるべきだといふので、僕は物好きに筆にしたのである。

二 眞島博士

日本の有機化學界には農科の方に鈴木梅太郎、藥學科の方に朝比奈泰彦、理科に眞島利行。いづれも押しも押されぬ斯界の元老株であるといふ事だが、眞島博士は僕とは同窓である。明治二十三年であつたか、ともに本郷彌生ヶ岡の一中に入學した仲間である。……念の爲めにいふ、その頃は第一高等中學校なので一中というた。首都東京にさへ官立中學校は築地に一つあつただけである。中學校がニョキニョキ増設されるので、一中の名がまぎらはしくなる。中の字をヌキにして一高となつたのはすつと後の事である……。

しかし僕は豫科三年間いつも君と組がちがつてゐた。寄宿舎でも部屋を異にしてゐた。それから本科に入つては我は一部に彼は二部とかけ離れた。だから名のみ同窓で相識り相交はるところは極めて薄かつた。僕としては只彼氏が無口なポート選手であるといふ外にこれといふ印象が残つてゐない。それが日本はおろか世界中に漆の研究家として名をあげる人にならうなどは、僕だけでない、お釋迦さまでも御存じなかつた事と思ふ。

その眞島君は東京帝大から仙臺へ、次いで大阪に轉任する。その間かなり多くの學徒を養成し、それらの門弟衆も今はいづれも立派なプロフェッサ一となり、各所に研究をつづけてゐる。そこで眞島君は同じ科學の分野にあつて研究しつある同志が、せめて一年に一回位相集まり、互ひに報告する、意見を交換する、さうした事がわが日本科學界の爲めに極めて有意義であると考へた。いやそれは誰しも考へられる事であるが、この度眞島氏の場合に於て實現されたのである。

この夏七月の二十九日から三十一日まで三日間、大阪帝大十二名、東京理化學研究所五名、東京工大二名、北海道帝大一名、東北帝大三名、臺北帝大一名、東京文理科大學一名、米澤高工一名、神戸日本香料藥品會社一名、明治製糖會社一名、など三十名近くが北は北海道より南は臺灣より、箱根山上に集まつたのである。夏の箱根はシャレてるなどといふなかれ、強羅の小高庵といふ安直な宿屋に、昔の修學旅行式氣分を味はひつつ、連日眞面目な報告質問をつづけたのである。

三 箱根の修學旅行

眞島博士が終始座長席につく。參會者は各自研究の概要を報告する。自由に質問する。その内容は僕ばかりでない、世間の門外漢には猫に小判であるからここに省略する。只有機微量元素分析の實驗談をはじめ、松茸の香、配糖體（サポニン）の植物成分、感光色の製造等々、動植物成分に關するものであつたさうなといふ事にしておく。

尤も、たまたま箱根に來た、いや初めての人も少くない、三日間箱根に宿り元箱根、蘆の湖も知らないではあんまりであると、第二日の午後だけは箱根名所見物をしたが、あとは眞面目な研究報告や、來年の會合までの研究宿題の選定及び割りつけ等々をきめて散會したのである。

内容といふのは只これだけである。見方によれば誠につまらない。なんだそんな事かと一口にいつてのけられるものかも知れない。しかし僕をしていはしむれば、それが旅費日當の出る公けの集合ではない。銘々に自辨であつまるのである。來年は札幌か、輕井澤あたりで集まりたいが、なによりも旅費に困る。せめて助手達に一人五十圓でも支給して貰へるとよいのですがなあといつてゐる。これがあまりに數多い人數の集會であると、効果もそれほどでないが、眞島博士を恩師と仰いだ少數の、いはば水入らずの集まりである。同じ意見の交換にしても形式ばる事もいらない。恐らく三日間の會合は無形にも、間接にも、得るところは少くなかつたであらう。

しかも東京の眞ん中で會費五圓とか拾圓とか出して會合する、形式ばつた報告や無味乾燥なテールブルスピーチの連發、あとは失敬失敬で別れるくさぐさの會合の事を思へば、山の湯の宿に三日間寢食を共にしたこの會は、その舊交を温め新たに交を結ぶ上にも意義が多かつた事は想像にかたくない。

この一文を筆にするからは、知らぬ仲ではなし、親しく眞島君に訊ねて見てもよいのであつた。眞島君は近頃は理學部長として必らずしも研究室の中にのみくすぶつてはゐない。近く僕の身上に異變があると、大阪クラブの會合があつた。例の昔の彌生ヶ岡の同窓の會合である彌生會もあつた。いつも眞島君は見えてゐる。そして例により黙々としてゐる。恐らく君に逢うて見ても黙々としてゐるだらう。漆のやうな赤黒い顔がいささか綻びる位が關の山であらう。だから只その會合した中の一人から耳にしたかぎりを僕のうる覚えのまま筆にしたのである。

要はかうした催しに世間の理解同情援助がほしい。さらに學科にもよるであらう、人にもよるであらうが、かうした催しは或は他に既にあつたかも知らぬが、いづれにしても珍らしい事とおもふ。それだけに好ましき先例として、これにならふものの相つぐ事を期待し、ここに筆にした

モヒ中毒の中村龜松

「君、前進座はいよいよ解散といふ事になつた、兎に角早く一緒に出かけてくれ給へ。」
時は或る年といつてもまだ三四年前の話である。新橋演舞場がラクになつて地方興行にでかけようといふ時の、龜さん身の上異變物語である。

「そんな馬鹿な事が今更解散なんて……そんな事がそんな事が……。」
とむづかる龜さんを、とにかく一緒に外かけて相談の上と許りに、寢込から引つ張つて自動車へ乗せる。河原崎長十郎と中村翫右衛門の二人の間にはさまれた小柄な龜さんは、雨ふりしきる中をかどはかされるやうなかたちで運び出された。

車は兩國を渡つて本所にはひる。妙なところへ引つ張つてくるぢやないかと、龜さん聊か不審なりと豫感したところ、車はとある西洋館の前にとまる、下車して玄關口へくると、そこに白衣の婦人がちらちら見える。紛れもない看護婦である。龜さんサテはここは病院だなと感づいた時は、はや病院の一室にロックされてしまつた。

「君をだましてすまない、どうか勘辨してくれ給へ、どうしても此のままでは君の命が危ない、辛抱して入院してくれ給へ。僕等の巡業してくる間にすつかり治つてくれ給へ。」

と龜さんの手を握つた長十郎の眼には涙がある、翫ちゃんも涙があふれてゐる。龜さんは、「なんのまあ勿體ない。」と身振りして一とせりふあるべきところだが、感極まりて、

「ありがたう、ありがたう。」

とばかり連發して、オイオイと大聲あげ嬉し泣きにむせんだのであつた。この龜さんたるやモヒ注射一日二十回三十回にも及び、立派なモヒ中毒患者になつてゐたのである。

このままではたしかに命取りである。
只病院へといつてもとても聞きはすまいと、長さん翫さんは前進座解散だとばかりに、龜さんを面くらはせて、本所の氣狂ひ病院につれ込んだのであつた。

院長さんはモヒ注射を止めさせる事をたしかに受合ふが、受け合ひかぬる事は、モヒの中毒患者はさうした後に氣狂ひになりやすい、よく自殺したがる。

その方だけは無事に全快と堅い約束は出来ないといふ事であつた。

龜さんを病院に残した一行は地方興行に出かけた。

一座になくてならぬ人氣役者龜さんの姿の見えぬ事はいかにも寥しい。

明けくれ今頃は龜松さん、どこにどうして御座らうやらと、噂の種になつてゐたが、もしや氣

狂ひになり自殺でもしたらどうしようと、一座の面々が氣にかけてゐる矢先に、或る日汽車の旅中に、座員の一人が、

「アッ！ 龜サンが死んだ。」

と頓狂な聲をあげた。いかにも新聞には中村龜松自殺の記事がのせられてある。

たうとうやつたのかとつらつら読み直すと、同じ中村龜松だがこの龜さんは下谷の左官の龜さんである。氣狂ひ病院の龜さんでは御座なき事相わかり、一同ヤレヤレと胸を撫でおろす。

一座が東京へかへつてきた時は、すっかり生まれ變つた健康體で龜さんが退院する。

本人の曰くは、

「どうも一旦注射をやめてしまつたが、時々又注射をやつて見たくなります。しかし前進座があの茨の道を踏んで、喰ふや喰はずにその日その日を凌いで來てる中に、僕を長らく入院さしてくれた厚い志に對しては、さうした氣分を持つても罰があたると思ひまして、たうとう我慢し通しました、近頃はモヒと聞いても身ぶるひするやうになりました。」

この龜さん姓は中村名は龜松。あの前進座の中村鶴藏なのである。(『モダン日本』二二、二月號)

『大釣のこつ』の序

謹啓

益御多祥國家の爲に奉慶賀候。さて小生今般此世の名残りとして、

大釣のこつ

やつと脱稿いたし、本月中に出版の運びと相成申候。就ては御多忙中恐入候得共、何卒貴下の序文を得て巻頭に花をかざり、閻魔への土産に致し度、まことにあつかましく願ひにはあれど、老人の爲に曲げて御承引に預り度、別封ゲラ摺見本三十二頁相添此段得貴意候。草々。

昭和十一年八月十九日

松岡文太郎

下村 宏様

かうした手紙が六甲海南莊から東京の僕の旅先へ轉送されて來た。しかし其の見本の方は山莊にとめおきになつて今手もとにない。僕は今東京で『ゴルフ・バッグ』と『人口一億』なる二部の冊子のゲラの校正に逐はれてゐる最中である。松岡翁の本月中の出版といふと、僕が海南莊に

歸山してから筆にしたのでは間に合はない。というてゲラ摺の見本を手にはせず、その中味を見ないでは全然見當がつかない。それでは筆の下しやうがないといひ度いところだが、僕は釣の方はズブの素人である。よしんば見本を見たとしても、矢張り分らないものは分らない。

松岡文翁は此の前も釣の著作になんにも知らぬ僕に序文を書かした事がある。又々僕をズブの素人と承知した上の依頼である、まさしく木に縁りて魚を求めると類であつて、出来ない相談を重ねて押しつけるのである。しかし前に掲げしアノ手紙を手にして見ると何分にも断りにくい。断り切れない。僕はアノ手紙の閻魔への土産とある一句を見て、文翁も長い長い間かなり殺生をつづけて来ただけに、極樂への土産といはないだけ、さすがに殊勝な事であると思つた。そしてあの文面を見ては僕も釣られて序文なるものを筆にせねばならないと思つた。

此の前の序文には釣とゴルフについて一言したかと思ふ。近々刊行する『ゴルフ・バッグ』の冊子の中にも、ゴルフと釣につき筆にしてある。今又くりかへすのは愚の骨頂である。さうなると何等新たに筆にすべきものが無い。已むなく君の來信及びそれを見て浮びし感想をそのまま筆にし、これを序なるものに代へる。

僕をして畑ちがひの勝手の分らぬものに筆を執らしめるも、これ亦翁の釣のコツであらうが、さて釣られた序文は棒鱈どころか草鞋にもたぐへつべきで、文翁はこれはひどい、わしの差出した手紙をそのまま逆用して序文にするなどは、近頃以て奇怪千萬だといふかも知れぬ。しかしそ

れも自業自得である。文翁いかに釣の名人とはいへ、長い間にはかなり餌を魚にとられた事もあらう。草鞋を釣り上げた事もあらう。

これをしも善く泳ぐものは溺るが如く、善く釣るものは釣らるで、因果應報とあきらめて可なりである。もしそれこの書をひもとく読者にはいささかすまぬやうな氣がするが、もともと読者は本文を読むので、序文なんかはどうでもよいはずである。

さて、あの世へは文翁と僕といづれがお先へ出かけるのか、それは全く分らない。しかしいづれにしても、もう先は知れてゐる。餘命はいくばくもない。どちらが先になつてもあとになつても、大した事はない。僕とても極樂へ行けるだらうなどと、そんな厚釜しい虫のよい考へは持つてゐない。いづれは遠からぬ内に三途の川か血の池あたりで落ち合ふ事になるであらう。その時に僕は文翁が閻魔の廳で、閻魔大王をどうしたコツで釣るのか見物したいと思つてゐる。

昭和十一年八月下旬お茶の水にて

楚人冠と僕

此の一篇は『楚人冠全集』の刊行にあたり、筆にせる全集推薦の一文である。

『楚人冠全集』が出た。

出るべく期待されたものが出るのだから別に提燈を持つ必要もない。しかし僕は彼氏と相前後して紀州和歌山に生れた古い古い友人であり、しかも半世紀ほどたつて、同じ新聞社で机をならべることになる。いつのまにか僕がペンを走らせすぎるやうになつたのも彼氏に負ふところが多い。放送を聞くと隣國の永田青嵐に似てるといはれ、隨筆ものを見ると同郷の楚人冠に似てるといはれる。いづれも僕の方が似て非なるものだと、一應遠慮はしておくが似てゐる事は似てゐる。國のなまりといふものは争へない。新聞人として同人生活をしてると、氣持までいく分相似通つてくるものか、時には彼氏の作品を見つ、ふとこれは自分の筆にしたものではないかといふやうな氣分になる事さへある。いかさま彼氏の母堂奥さま子供たち、さらに彼氏のあらゆる方面の友人、隅の隅まで？ 知つてゐるのが僕なのだから、その相似たる豈それ顔の長さのみならんや

である。

こんな事を筆にしてゐると『楚人冠全集』の推薦の方が御留守になつて、飛んだ樂屋落ちとなり、申しわけが無いやうな氣もするが、苟くも彼氏には恐らく僕ほど因縁の十重二十重に深くからみついてゐるものはあるまい。彼氏の作品を見ても、僕に關せる御筆先が少くない事とおもふ。だから全集を手にする人の心得事とおもつて書きつける次第である。

楚人冠は明治五年生れであるから、當年とつて六十五歳である。和歌山の中學校をあとに東京へ飛び出し、もろもろの青年が高等中學、高等商業、さては慶應、早稻田に志願する中を、彼は英吉利法律學校に入る。中途退學して、郷里の『和歌山新報』に入社する、その頃縦横と號してゐたが、御年二十歳の主筆なのだから相當早熟なものである。そのまま鳥なき里の蝙蝠と和歌山にくすぶつてゐたらそれまでであつたらうが、さらに又東京に泳ぎ出て學校に入る、卒業してから米國公使館の通譯になる……少くともその時分は彼氏が一通り英語が話せたり聞きわけられた事を立證してゐる……その後縁ありて東京朝日新聞社に入る。それからかの『七花八裂』『大英游記』などで讀者の血を湧かしたのであるが、今では初老以上の人達に深い記憶となつて残されてゐる程度であるかも知れない……。當時この『七花八裂』が發賣禁止になつて、僕が丈餘の手紙を彼氏におくつたのが、僕の遞信省貯金局時代なのだから、日露戰役直後の事とおもふ。此の作品は彼氏の全集『へちまの皮』の中に納まつてゐる……もしそれ小説『うるさき人々』の前

後から『湖畔吟』『山中說法』などに至りては、ここに事新しく吹聴するまでもない。

この邊でもう僕の頗る要領を得ない推薦文を終る。只彼氏は變つた風格の男として特殊の存在として、ここに四分の三世紀を送らんとしてゐる。尤も波らん多かるべき性格の持主が、變轉極まりなき新聞人となりて、不思議にも既に三十五六年の歲月をおくりつつある。朝日新聞社なればこそであるともいへるが、『東京朝日』の過去を顧れば相當に風波も荒かつた。その中で彼氏の筆が紙價をなにか高めたであらう。又彼氏の筆もこの全集が示す如く、時が流れるうちに枯淡味がついてくる。押しも押されぬ楚人冠式の象牙の塔が築きあげられた。

しかし青年時代に運動嫌ひの彼が下手糞ながらゴルフによりて運動がつづけられしより、宿痾の喘息も追々退却する。この調子だと、まだ筆硯を新たに作品がゾロゾロとつながつてゆく。やがては米壽の祝と共に續全集を出版する。それからさらに相當生き長らへて？ つひに天壽を終る、さうした寸法にならぬとも限らない、少々あてにならないが、まあさうした期待を持ちつつ、ここに彼氏の全集の提灯を持つ。(二二、一、一九。於老翁)

磐城の旅の空より

(垂井逸水翁喜壽の辭)

一作歌難物語

垂井逸水翁より度々喜壽になつたから、祝ひの一首を寄せよとの來狀に接してゐる。僕は短歌はかなり多量生産してゐる。ことに喜壽米壽の歌などは頼まるるままに歌ふほどに、既に十幾首をデッチあげてゐるとおもふ。しかしそれは何等實感の伴うてゐるものではない。只判に押したやうな、鑄形にはめたやうな有りふれたものばかりである。頼んでくる顔ぶれには私の父が母がといふのもあり、又私の記憶にうすい人もあり、中には見ず知らずの人の直々の申込もあり、又さうした人を紹介して來るものもある。とてもこれではやり切れないといふと、川田順君のあいさつに、何等實感も伴はないのに歌へといはれても無理だよ、だから僕は斷つてゐる。北村季吟……といつたと記憶してゐる……は一首つくつておいて、誰彼なくその一首をおくつたといふが、

まさかさうもいかないからねといふ事であつた。

そこで垂井逸水翁から來信に接してからも、この鑄形にはまつた歌をおくれば、それで義理はすまず事にならう。しかしそれではなんとなく我心に充されないものがある。そこで屢々苦吟して見るがものにならない。のびのびになつてゐた。

その後令息のねんごろなる書狀に接したこともあるが同じくであつた。氣がかりになつて居ながらも出来ないものはどうしてもできない。此の夏は生れてはじめての浪人生活をおくる事になつたから、夏季大學講習會などはいづれも皆お断りをしてあつたが、磐城國平の町に近く小名濱に縣主催の講習會がある。八月の六日には是非來會をといふ事である。僕は日本國中足跡至らざるどころ少なく、又講演せざる地少なし。しかし磐城の國ではどうもまだ一回も試みなかつたやうな氣がする。那須のゴルフリンクスも開場されるから、見物かたがたと小名濱の招聘に應じた。

まづ七月中は六甲海南莊に閉ぢこもり清風に嘯いて居ようとする、海外拓植委員會と簡易保險の委員會が開かれるといふ。そこへ岡崎晚香大人の病重しと傳へられた。七月の下旬に上京する。それから東西の往復も大儀なので引つづき在京してゐたが、近年にない暑さである。アパートの一室に呻吟してゐるつれなさに、逸水翁の喜壽の吟をと思ひ出した事がたしか二回あつた。しかしどうにもものにならない。下手なせゐもあるが、歌想は一度行きづまると、妙にこぢれてまともにくいものである。

二 苦吟ならず

八月五日常磐線の客となる。車中で次に刊行せんとするゲラ刷の校正を終へてから、束にせる手紙に眼を通した。その中に垂井逸水翁の來信がある。封を切らずとも例の督促狀に相違ないはずである。果して中味は豫感通りである。水戸から勿來まで太平洋上にうかぶ月を仰ぎつつ苦吟をつづけたが矢張りものにならない、夜十時半平の町住吉屋旅館に着く。床上の人となりて苦吟をつづけてゐるうちにそのまま眠りに入る。相手が垂井逸水翁である。いづれは印刷に附せられて郷黨の多くの人々の眼にさらされるかと思ふと、例の判に押した型通りの歌でお茶を濁す氣分にもなれないから、六日の朝葉書を逸水翁におくり、どうしても歌はできない。二三日中なにか一文を草するからといふおたよりをした。

あくる六日は小名濱で講演、腹をこはしてゐるので、晝食ぬきのままにて平へ引かへし、赤井川に沿うて磐越東線を郡山へ車中の人となる。此の一文はその車中の腹案になるものであり、郡山驛にて東北本線の上り汽車を待ち合はせてゐるうちペンをはしらせたものである。

三 逸水翁と僕

垂井翁と僕との交友は淡として水の如くである。僕が臺灣民政長官時代に翁は南紀觀光團の團

長として大井ト新翁外十數名と共に大正五年春の臺灣共進會に見えた事がある。その前後を通じ僕が和歌山へ歸山すると、萬年商工會議所會頭であつた翁はいつも歓迎會を開いては開會のあいさつをされたものである。その以外に別に翁とは商取引もなく、政治運動もなく、まことや淡として交友數十年の長きに及んでゐる。

しかし僕の翁を知れるは二十年や三十年以來の事ではない、五十年前にさかのぼらねばならない。という僕既に還曆を越えたりとも翁よりは一と廻り以上も若い。その昔十歳前後の僕が三十歳近い翁にどうした交渉があつたかといへば、僕が當時亡き父の手紙の使ひをしたのである。あの頃から西旅籠町であつたと思ふ、中の島の方面へ向つて右側の家であつたと覺えるが、それはとても古い古いかな思ひ出である。

父を失つてはや二十三回忌もすませたが、亡き父は逸水翁よりは五六歳年長であり、僕は逸水翁より又十五六歳年少である。だから亡き父が逸水翁と相交はれるは父の二十五六歳頃から三十三歳頃まで、『和歌山日日新聞』主筆として又多分縣會議員でもやつてゐたり、兎に角相當發展してゐた時分である。その頃の父の舊友……逸水翁の舊友ではない……を五六歳から十二三歳にわたる乳の氣の失せない僕の子供心の淡い記憶から呼び起して、いかに垂井翁が長壽延命であるかといふことを間接に裏書して見る事にした。

四 亡き父の頃

先づその頃の知事、即ち當時の縣令は神山郡廉、松本鼎、書記官は秋山恕卿、警部長か收稅長に岩崎奇一、中學校長に色川國士、松山亮、師範學校長に菅沼政經、それから裁判所長に吉永成徳、郡長には有田であつたとおもふ、野田四郎の諸士があつた。森部好謙といふ名も浮んでくるが、縣廳のお役人でもあつたらうかよきは分らない。縣會議員には熊野から川上へかけて、

並木 弘	中松 小翠
山本 登	濱口 梧陵
山本 彌太郎	津山 仙三郎
神前 修三	中村 喜代三郎
辻野 惣兵衛	蘭部 三郎
中西 光三郎	千田 軍之助
兒玉 仲兒	稻本 太一郎氏令父

の諸士があり、醫師には五斗信吉、丸山脩巳、神田瑞穂の諸國手あり、辯護士いやその頃の代人にはピカ一の森懋老があり、實業家には、

佐藤 長左衛門

神田 清右衛門

橋本 太次兵衛

栗生 武右衛門

木下 七左衛門

島村 安次郎

宮本 吉右衛門

の諸士に加へて、垂井清右衛門翁があつたのである。この外高橋銃一郎といふ人もあつた。今の知事官舎のうしろの邊に西洋館を建てる。珍らしいので評判になつた。それから下津治助といふ名も浮んでくる。乳呑兒時代の山崎村には吉村角次郎、隣村川永村には宮本勝十郎の諸士があり、又市中の加藤杲翁はどうして居られた事か、そのころの僕の記憶に無い。

まだおぼろげながらに思ひ出をたどつて行けばポツポツと出てくるだらう。もし海南莊にかへり母と話し合つたなら、さらに幾多の追憶が湧いてくる事と思ふ。しかしそれは此の一文を筆にする主旨でない。只かうした當時の先輩諸士の名を呼び起して見る事は、逸水翁の古い思ひ出のよすがにもならう。又いづれは逸水翁が刊行されるといふ喜壽記念の冊子をひもとく人々にも、懐舊の枝折ともならうといふまでである。

ここにあげた顔ぶれを見ても、最近まで生き長らへられたのは宮本吉右衛門翁であり、今春に入りて栗生武右衛門翁、次いで岡崎邦輔翁も長逝された。結局今日健在なる人々を拾つて見ると、

木下 七左衛門

加藤 藤 杲

垂井 清右衛門

の三翁といふ事になる、誠に長壽延命息災といふべしである。

上來あげしところには無論記憶ちがひもあらう。又記憶漏れも多からうが、今郡山驛の待合室で五十年前乳臭い時代の淡い淡い記憶をたどつてゐるのだから仕方がない。しかしいづれにしても垂井さんはまだ達者で居られるといふ折紙となるのには妨げがない。

五 長壽よしあし草

かうして見ると逸水翁も古いものである。養生も好いのであらう。相當不養生もせぬでは無いとおもふが、しかし酒を嗜まざる爲めに、又俳句界に三昧するために、逸水翁は事實圓滿具足つつ餘生を楽しんでゐられる。

人間も長生するのもよいが家運が傾く、宿痾になやむ、さては子寶に恵まれない、恵まれても不肖の子である。たまたま鳶が鷹を生んで見てからが、逆さまに親に先ちて亡くなるなどとなる、長生必ずしも喜ぶに足りない事もある。

死生は命なり天に在りとはいひながら、長壽は目出度い尊い事である。しかも翁の如く健康で子寶にめぐまれる。そのよせられし書中にいへるが如く、

御名詠の十七文字お贈り下され拜受仕候、近く荷物をおろして身軽く風月に餘命を養ふ心紐みに候

とあるが如く、悠々自適して心境常に靜なる風懷を持しうるは、誠に目出度くも又羨しきかぎりである。此の上とも長く長く餘生を楽しんでいただきたい。亡き父今あらばといふ感懷より、思はず駄文が長々しくなつた。多謝。(二一、八、六。那須ホテルにて)

腹を立つた時立たうとした時

腹を立てさす相手を氣の毒な人と思ふやう。

腹立てる己れをあはれな者と思ふやう。

修養につとめてゐます。

時が立てば腹が立つても忘れます。

年が経てば段々腹が立たなくなりませう。(『キング』九、五月號)

秋の七草

秋の七草？

萩、桔梗、女郎花はすぐ思ひ出せたが、あとがすぐ浮んで來ない。そこへなづな、御形、はこべら、芹、すすな、すすしろ、佛の座など春の七草の七難しい草の名が古い古い記憶からよみがへつてくる。これは西南戦争の後間もない頃であつた。小學校時代の唱歌に、「螢の光」とか「四方の山邊を見渡せば」とかさうした歌目の中に春の七草の歌があつた。その歌の中なる「はこべだせり」といふ詞は未だに記憶に残つてゐる。はこべらと芹とつづけて「はこべら芹」といふのを僕等は「運び出せり」といふ風に解釋して歌つたのであつた。

まあそんな事はどうでもよい。秋の七草のあとの四つは芒や撫子は七草の中であつたらうか、どうもハッキリしない。これから先は手さぐりでイヤ頭さぐりでいろいろと當つて見るが、植物の知識に疎(と)すぎる僕にはとんと見當さへつかない。そこで書冊をくりひろげて見ると、芒も撫子も七草であり、それに葛と藤袴を加へて秋の七草になる。子供の頃からおやつ代りによく口にし

たのは麥粉がし又イリコともハツタイともいふ、あれに葛湯があつた。あの葛の根からとる葛粉を口にしながら、その葛の花や葉が秋の七草の一つであるのを見それてゐたといふ事は、我ながら不覺な事である。

六甲の拙宅海南莊は松と萩とつじと芒が野生のまま群生してゐる。そのところどころに、いだうの花がある、あれも七草の中に加へてもよさうなものとおもつた事がある。海南莊の坂道にははや萩の枝がうねりうねり路をせばめてゐる。朝露を葉ごとにおける萩の枝を、むざむざとかきのけて山莊の坂道をのぼりくだりした。僕の歌集の中に海南莊の萩をうたつたのが六首ある。

久にして かへれば庭の むら萩の たわわに茂り みな花をもてり

山莊の 樹の間樹の間は くまもおちず 山萩の花 赤く咲きたり

庭の松の 枯枝きらまく おり立てど 萩の下道 ふみわけかねつ

吾子^{おこ}走り 小犬またはしり 路の邊の 山萩の花は ゆれて散りけり

土に伏す 萩おこしおけと 聲高に 言ひながらくだる 朝の山路を

小繩もて 束ねあげたる 萩の花は たばねられしままに なほ枝垂れたり

山莊の外郭に小さい流れがある。この一帯は見るかぎり尾花である。同じく五首ある。

すくすくと のびたる芒 穂を赤み きららに光る 丘の夕日に

芒の穂 穂先わかれて この朝け 露をやどせり 一とすぢごとに

村人よ 芒な刈りそ わが庭の 秋草はみな うつろひにけり

芒の穂 ま白くなれるが 風になびき 目に立ちて見ゆれここにもそこにも

夕されば 風しづもれど しらしらと 芒はそよぐ 山峽の道に

今は八月のはじめである、連日気温三十二度を上下してゐる。東京の町中の假の宿にありては、秋の七草といつても気分がよくはうつらない。しかし夏のさ中とても足一度高原にいづれば、秋の七草ははやも咲き盛つてゐる。僕の記憶に最も深く印象されてゐるのは、輕井澤から草津への沿線淺間高原の一帯である。

夕まぐれ 待ちわびかねて 戸によれる さまにも似たり 桔梗の花は

われもかうは 大宮人の 黛^{まのまゆ}か 巴里の女の 顔のほくろか

黄をみだす 風あるらしも から松の おぐらきもとの 女郎花のはな

などいふ柄にない歌もある。

月見草は夏の草らしくもあるが、秋のすすき、女郎花などの中にもほのぼのと匂つてゐる。僕のすきなすきな花である。われもかうは淺間高原に多い。前にかかげたり、いんだうなどと共に七草の花に相ならぶべきであらうか。まあその邊がヅブの素人なる僕の七草観である。

ところで、ここへ例によりて小理窟を一つだけならべさせて貰ふ。それは秋の七草の座がしら萩といふ字についてである。今日本で漢字の制限といふ事が問題になつてゐる。私はこの一文中

にもわざと難しい漢字をさけて、なづな、すすしろ、すすな、はこべら、りんどう、などみな假名にしたが、僕はすべて日本固有の假名だけにしてもよいが、しかし極く普通に行はれてゐる漢字ならば、そのよみ方を整理した上残し置くを便利だとも思ふ。海といふ字が海苔や海老や海月——此の場合クラゲとよむ——などとややこしく讀むのをやめるといふのである。同時に又日本製の簡易な漢字も新たにつくつてよいといふ事である。支那では康熙字典などに五萬字もならべてある。その支那は今假名をつくつた。うんと漢字を制限してゐる。略字を奨励してゐる。日本ではその中から好いたものだけとつてよい。同時に又新たにつくり上げてよい。あの日本製の峠などいふ字もシヤレてるが、萩といふ字、それは秋の草といふ和製の字であるが、和製にしても立派な上等國産の文字ではあるまいか。(二、八、二。著者。『モダン日本』九月號)

エノケニツシエ短歌

幕末以後から昭和へかけての日本はあまりにも眼まぐるしく、根柢からガンドウがへしにかはりつつある。歌にしても取材の範囲が著しく變つた。廣くなつたばかりでない。交通の發達なり文化の大きな波にゆられ歌想も動いてゆく。さらに歌の調べもケルカモ一點張りでは板につかなかくなつて來た。さすればここに大正昭和生れの青年壯年の人々が見る世界は、明治時代の人と相當違つて來てゐるに不思議がない。これを演劇に例をとるならば、舊劇は舊劇で捨てがたいものがある。何百年間を通じて精鍊されて來たものは、又おのづからなる趣きはある。しかし世の中は政岡忠義の段や妹脊山御殿の場では丁場があまり長々しすぎる、まどろっこしい。大衆はいつのまにかスピードアップした映畫の方へ走つてゆく。そこに舊劇の觀衆の數に數百數千倍した活動の觀衆を見いのである。劇にしても時代に即したものに新しい味を催すから、新派なるものも出來上る。只泣くばかりではといふので喜劇が頭をもちあげる。こんどはジャズで列をつつて合唱する。アンヨをピンピンあげる少女歌劇も流行り出してくる。

一體さうした姿は短歌の世界にどう映つてゐるかといふと、そこに相當相似たるものがある。一々ここに名前を書き立てて、誰々が歌右衛門式だの羽左菊五吉右式である。誰々が左團次猿之助式だ、誰々が壽美藏簀助式で、誰々が前進座だ新國劇だ、いや河合だ喜多村だ花柳だ、いや井上だ八重子だ、いや曾我廼家だ新築地だ、いや五九郎だ緑波だなどと、ならび立てるまでもない。多少短歌の畠に首を突つ込んだものならば、なるほどさういへば歌人のなには劇のなにはがしによく似てるなあなどと、かんづかれる方もあらうと思ふ。

僕は去年の暮に數多く手にした歌集の中から、『凸凹』といふ變テコな名前に引きずられ、頁をくりだしてつい全部よみ通して了つた。著者は『曼陀羅』の山田弘通君である。知つてゐる人は知つてゐるし、知らない人は知らないとおもふ。……本人の自薦廣告によると、

読んで退屈のほか何物もない作品ならば、代金は何時にても返却する。この點僕は一介の商人だからはつきりしておく。

とうたつてゐるから、相當心臓の強いところもあるが、さて讀んだ僕に退屈感を與へなかつた事も事實であつた。先づ此の歌集の序文なるものが毒舌毒筆？を以て天下に鳴つてゐる尾山篤二郎翁であつて、御師匠さまらしいが、序文には特別に馬力をかけてある。その一節に曰く、

東洋大學に居たが病氣でやめて、これから京都の家で商賣の見習をしようといふのだから、こんな不向な圖はなからう。客をにがすばかりでてんから商賣になるまいと思つた。ところが近

頃は立派な商人になり、「これもう一本まけとくれやす。」などと客がいへば、「よろしおます、おまけしときますさかい、これも序に買つておくれやす。」などとやつてることだらうと想像するが、それと同時にあの佞屈生硬な文章も次第に圓くなつて、緩急の抑揚も自在になつた。そんなら歌はどうかといふに、根が理窟つばい男のことだから、どうしても談話になり散文的になりたがる。石塊を嚙んだやうだつたものが、餘裕と味とは出るやうになつたが、萬事は事實にこだはり過ぎる。かういふ調子の歌が實は此の頃大流行で、しかも彼自身流行を追つたのではなく、昔から此の調子なんだから、期せずして流行のさきがけをやつた形である。いいか悪いかはここでは云はぬ。あの下手糞な歌を作つた男が、どうやら歌集にして見ても、そんなに可笑しくない歌を作るやうになつてしまつたんだから妙なものだ。

序文がこれだから、そのお弟子さまの跋なるものも又振つてゐる。長々しき跋文の中から次の一節を拾つて見る。

私が短歌雜誌に投書し出した最初のもので、實は先生の作品の批評に始まるのである。あの先生の作品が實に下手糞だつたのに憤慨して、言語道斷の悪罵を公開狀として書き送つたが、それが選外佳作として載せられたから、いささか私も面喰つた。

これではお師匠さまとお弟子と、互ひに下手糞をこねあげて投げつこをしてゐるのである。それこそそうつかり傍へはよれないのである。そこでどんな歌なるものをよんでゐるかといふと、初

めが雄琴温泉とか題してあるが、

裏庭の木ぬれを雪のしづる音飛車のなる手をとめて聞きにけり
五番将棋の四番まで敗けては文句なし湖岸に出で鳩を見てゐる
水潜る鳩見てをれば将棋に負けしあの手この手が念頭を去らず
とよんでゐるが、碁の歌も同じ調子でシャーシャーと歌つてゐる。

氣を入れて打ち出しし碁にあらざれば早く敗かされかへりたしと思ふ
負ける氣で打ち出しし碁なれど物の見事に負けてしまへば少し無念なり
これが野球の歌となると、

どちらが勝つてもかかはりのなき今日の試合吾が坐る一壘側の應援に味方す
といふ工合になる。どうも古今の名歌だと感心するわけにはゆかないが、いつも吾等が實感し云
はんとする事をツケツケとうたひのけてゐる。もしそれ野球の歌等では分らないといふならば、
あつけなき思ひしてをり今少しで追ひ越す少女の道外れゆきし
といふ歌で、アアさよかと思ひ當つてくれてもよい。

毛唐の子に話しかけあつさりと日本語で返事をされて少しまごつく
なども同じ筋なれば、

ポケットに銀貨銅貨をとりまぜてそこばくの金ありちやらちやらと鳴らす

といふも同じ口である。彼氏の歌は古へ振りの歌人、いはば舊劇の歌舞伎側から見ると頭から歌
になつて居らんと、ケナされ慨嘆さるべきであるかも知れぬ。新派の面々にしてもどうもこれ
は散文だよとか、かう理窟ばられてはねと小首をかしくかも知れぬ。しかし誰しも彼氏の歌想の
つかまへどころと、それをこじつける小理窟の表現、その表現の破調のやうな調子、長々しき字
あまりな文句を逆手にこなしてゆくところに、吾等をして退屈感どころか、とにかく巻を捲ふま
でするすると引つ張つてゆく一種のみ力らしいものがある。ここに更にさうした見本を何首か陳
列して見よう。

かかる田舎で海つ物鮪を喰ふは無理か刺身の肉に新聞紙へばりつく

お臺場まで来て風のなきてふ法やある理窟にはならねど腹立ちてくる

東京灣の晝風どきの草いきれお臺場の芝生は歩けたものならず

町角に先刻からの女まだ立ちをりかくも永く待たす男に興味なきにしもあらず

どやどやと来て喧噪をきはむる女學生徒ら銀閣寺の寶物などよく見ざるなり

他樹を雜へず杉ばかりなる植林相の秩序ある感じは量をもつてせまる

汽車の音に飛び立ちさうにしてなかなかに飛ばぬ鳥は見てゐて癪なり

まかるなれどまからぬと云ひ張るは依怙地に似たれど蟲のすかぬ客にはかくなり易し

賣上げの少き日には賣りあせり値切らるるままについ負けてしまふ

かうした歌をならべると三十越しても間もなき男、しかし顔の構造が粗末なためか、氣が引けてゐたと自から號し、又同人からは童貞をつづけてゐたのだよと、無理矢理にきめつけられてゐた男の氣分と、その歌の綺柄が大凡分る事とおもふ。

僕は彼氏の歌風を『創作』の故竹添履信君によく似てゐると思ひ、その歌想の皮肉なピリツとしたところは田中武彦君と相とされるものあるやうな感じもし、又次の神戸港の六首を見ると、故木下利玄君のそれに一脈相通ふものあるやうな氣もする。

壓迫感を身近に感じ巨き汽船の船側に沿うて舳漕がする

一列の波のうねりの寄せ來りこの汽船にふるる遅速ありにけり

繫留船の横腹で一たん遮られし波のうねりは向ふ側にあらはる

船腹の吃水線を亂す波はびたびたと繰りかへし繰りかへす

防波堤の陽に照る側の熱量は飽和點に近く達してあるらし

西日を一ばいに吸集せる倉庫の壁に物のすえゆく匂みなぎる

そこで彼氏は自分の歌をどう見てゐるかといふに、跋文の中には次の如く所懐をもらしてゐる。

僕らのリアリスチックな歌の側に於ても、尙多くの魅力ある素材が発見されよう確信があるのみならず、一人の作家の内にはリアリスチックな要素とロマンチックな要素とは量の差こそあれ、通常交錯して存するものであるから、ロマンチックの歌の世界となつて、僕らの歌が涕も

ひつかけられない土壇場となれば、僕もその邊はよろしく轉身して涼しい顔をしてしまふだらう。少く共その位の才がなくては、短歌なんか作らずに引込んで居る方がまだしもである。主義に不忠實だといふ非難は、恐らくかかる才能に恵まれない者の言ひ草ちや無からうか。

ところが僕としては彼氏が轉身などしてもらつては大變だと思ふ。歌集『凸凹』の第二部といふのが、どうかといふと舊劇に近くして退屈感を催せしむるを思へば、どこまでも現在の調子でぐんぐん進んでほしい。彼氏のやうな想、彼氏のやうな調、それが短歌の全部であらうとも思はない。しかし今の時代の歌の中には、彼氏のやうな歌はあつてよろしい。いやほしい。

僕は彼氏は劇團であつたらさしづめどうした役どころかと思案して見た。新しいといつても河合喜多村の亞流でない。前進座でもない、曾我廼家でもない、新築地でもない。新國劇、それでもない。縁波でもない。五九郎でもない。結局僕は榎本健一あのエノケンの上乘なるところかも知らんかなとも思つて見た。

山田弘通君は此の評に對し人をエノケンなどと失禮なと怒るかも知れない。短歌界の老、老中、若年寄だちは、ああエノケンか、ウンよかる、そこいらだらうとおつしやるかも知れない。しかしさう簡単に片付けて貰ひますまい。この一月の木挽町歌舞伎座の豪華版なるものを見て下さい。入場料は一等金八圓とある。いかにもお高いことである。しかしここに歌右衛門、友右衛門、宗十郎、菊五郎、三津五郎、吉右衛門、羽左衛門、仁左衛門、幸四郎などいふ九大巨頭が

百餘名の名題を従へての御出陣である。一人當り金九拾錢也、それで午後三時からの盛り澤山である、これを思へばエノケンピカは光一ピカで木戸錢一圓二十錢なり。もしそれ歌右衛門老あたりがピカ一で出演したらどうであらう。何よりお客さまが見えるであらうか？

『凸凹』の著者は自薦廣告して、此の本をよんで退屈感を起すやうなら代はおかへし申しますといふ。その態度はエノケンが一騎打で永年淺草にて大入を打ちつづけてゐるのと似てゐる。五郎が立てつづげに二の替り三の替りを出すのと相通するものがある。今日の日本は短歌の黄金時代である。少くともその歌人の數、歌の雜誌の數から見ても、空前のレコードをつくりつつある。いかにも百花らんまんとしてゐるが、そこには随分ありふれたアキアキする色が少くない。『凸凹』の道に咲いてゐるこの草の色は、そこに、ある新鮮なる特異性をなげてゐるやうに思ふ。尙ほ別に歌よまぬ大衆向にと思つて、『モダン日本』の二月號へも『凸凹』につき筆にしてある。變つた見方で變つた見本を並べて……。『日本短歌』二、二月號

でこぼこの歌

(山田弘通歌集)

樋にこもるかそけき音をはばかりて夜深く二階から尿してをり
わが部屋の電燈を消してしみじみと深夜のいばりを憚りにけり
隣近所どころも寢靜まりし深夜なればちよろちよろと小便の音は
酔ひざめの永き小便どうにもならず吾れながら永しと思ひけるかも
音といふ音は杜絶えしかかる深夜に現身の小便は樋ごもり鳴れり
小便の歌をシャーシャーとよむ位ゆゑ、糞の歌×毛の歌もなきにしもあらず。
鼻毛に白毛を見しは去年なりきうたて今年陰に見えにけり
朝の小床に×の抜毛をわがひろひうつそみ淋しき思ひしてをり
健康な人間の糞が石ころの如くころがつてゐる山の上の夕陽